

ありふれていないパイロットは世界最恐??

ライさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いたって普通の高校生のルピ、いきなり異世界に召喚されるが、まささかの、過去に星を救う英雄の産まれ変わり知らずに、

目次

キャラ設定

キャラ設定

こんにちは異世界

ありふれている日常？

さようなら地球こんにちは異世界

狂信者に絡まれた

試練

ハジメ変わる

月下の約束

大迷宮突撃！

嫉妬と裏切り

真の大迷宮

真の大迷宮

奈落の底の吸血鬼

吸血鬼の秘密

最奥のタイタン

奈落の底で

パイロットは大峡谷を走る

治癒師と侍の苦難

ハルツィナ樹海とバグウサギ

帝国兵は外道だと？ならば慈悲はない殺せ！

フェアベルゲンでの一悶着

すぐくウサギは残念

亜人族の国

1

6

11

16

20

24

29

35

42

47

52

58

63

69

73

78

84

90

96

100

過去	107
シアの覚悟	114
大樹	122
mati	130
mat2	139
mat3	146
生きているゴーレム	
ミレディの大迷宮を発見！レベルは不明だ	156
大迷宮を駆ける	166
生きる大迷宮の主	175
発見ミレディ	182
迷宮の主との勝負	192
戦いの後	207
新たな街へ	215
新たな街	229
面倒ごとからの面倒ごと	239
依頼	247
意外な人物との再会（前編）	262
意外な人物との再会（後編）	270
夜中の密会／搜索作戦	279
山の探索	288
黒と白	299
なんか残念なやつ	304
残念な奴の姉もまた残念な奴だった	309
戦闘準備	320

戰鬥開始



キャラ設定

キャラ設定

ルピ）この物語の主人公

異世界転移させられ、謎のヘルメットとジャンプキットを受け取り、近代武装で戦うための知識を教えてもらう、そのためクラスの中では一番ステータスが高く、そして圧倒的な武器を持ちこの世界を進むパイロット

身長；175センチ

体重63キロ

特技：料理、速読

好きなもの：もふもふなもの

嫌いなもの：自己主観が強いやつ

座右の銘：雨垂れ石を穿つ

他：柔道日本一

南雲 ハジメ）原作での主人公。

ここでは、ルピに鍛え上げあられ、戦闘能力は結構高い方に位置する

だが、基本呑気である。ピンチになり始めてスイッチが入るかも？

by（ルピ）

身長：教えません

体重：教えません

特技：ゲームのデバッグ

好きなもの：寝る↑？

嫌いなもの：派手なもの・人

座右の銘：趣味の間に仕事

B T 1 0 0 1）ルピの相棒

ルピによって作り出されたタイタン、歩兵では話にならない程の力を秘めている、背中にはミサイランチャー、ソード（ローニンが使

う刀)

を常に装備している。ルピのことはパイロットであり創造者であると認識している

身長：約？5メートル

体重（質量）；測定不可能

特技；パイロットのために尽くすこと

好きなもの；パイロット

嫌いなもの；自分達を害する者

座右の銘；一念天に通ず

八重樫 雫）原作の準ヒロイン？

この世界線ではルピに恋しているが、中々言い出せずと言うか、言おうと思うと必ず事件が起きる。アンラッキーガールである

クラスの問題児のストッパー、故にお母さんと言われているとか言われていないとか；；

身長：結構高め

体重：変態ですか？

特技料理

好きな人；ルピ

嫌いなもの問題児一向・香織の暴走時

座右の銘：思い立ったが吉日

白崎 香織）原作準ヒロイン

この世界線では、ハジメを好いている（ストーカー）そして友達
の雫から、犯罪者予備軍呼ばわりをされている。ハジメを好いている
のは分かるけど、迷惑がられているのは気づいていない。容姿端麗の
為色々な人から告白されている

身長：ハジメ君だけ知っている

体重：ハジメ君だけが知っている

特技：情報収集（ハジメだけに限る）

好きな人：ハジメ

嫌いな人：厚かましい人

座右の銘：花紅柳緑

ユエ）原作ヒロイン

この世界線では魔王化？していないハジメに出会うが、ハジメを好きになった。主に自分を捨てたりしなかったため。ハジメの童貞を食べた張本人。夜になるとストーカー（白崎）以上の突撃具合を披露する

身長：大体150センチぐらい

体重：・・・

特技；魔法、夜の戦い↑「ゑ!?!」byハジメ

好きな人：ハジメ

嫌いな人：恋路を邪魔する人

座右の銘：魚心あれば水心

シア）原作準ヒロイン

本来の世界線では残念ウサギだったのだが、ここではルピに惚れ旅についていくことに、原作のように雑に扱われることはなくちゃんと1人の女性とみている。なお発情ウサギと化すと誰にも手に負えない

身長：175センチぐらい

体重：データが破壊されています

特技：料理、以下データが壊れています

嫌いな人：みんなを貶す人

座右の銘：志し高く

武器一覧

VK147フラットライン

至って普通のアサルトライフル。バレルがつけられないことから、好きな人と嫌いな人と別れる武器。ルピは何千発と撃っているため体に染み付いている

CARサブマシンガン

正式名称：Combat Advanced Round。
非常に扱いやすいサブマシンガン。

腰だめ精度が極めて高く、ウォールラン中や空中でぶっ放しても大画面中央にまっすぐ飛んでいく。

連射速度も高く、その割には反動も控えめなため、機動戦・遭遇戦の適性はピカイチ。

ロングボウ

正式名称：ロングボウDMR

セミオートのスナイパーライフル。どいつもこいつも変わり種な端末データでは一番まともな狙撃銃である。

連射速度も悪くない。

スナイパーライフルでは魔物の装甲ごと貫ける可能性がある、弾道低下もほぼ無く、遠く超遠距離でとても扱いやすい。

反面、射撃反動が特に大きく、最速連射すると当てづらくなる。独特の連射リズム

L―スター

倒した敵を跡形もなく蒸発させることさえ出来る、ヤバめの銃

一定数まで撃つとオーバーヒートしレンズとバッテリーの交換をしなくてはならない

エクスペディション

タイタンの武器。ドラママガジンでレートが高いことから、弾の消費が激しい。

バーストコア対応

イスナイン

端末にあったロードアウト『リージョン』の兵装プレデターキャノン

を両腕の前腕部にベルトで固定した物で、所々改造を施してあるが、リロード時間と移動時間が遅いと言ったデメリットがある。

コアは『スマートコア2』敵をロックオンしてプレデターキャノン

の弾が誘導する。効果時間は1.2秒。

発動中は射撃とパワーショットの威力が20%上昇し、更に弾数が無限になる。ただしリロード中は起動できないため、リロードをしてから発動しないといけない

攻撃アビリティとして『パワーショット』を採用

短い溜めのあとに強力な攻撃を放つ（要は強力な散弾（風の広範囲攻撃））

防御アビリティとして『ガンシールド』を採用

プレデターキャノンから前方シールドを展開する。最大展開時間は6秒。展開時間終了から再使用までのクールタイムは8秒。発動中は移動時間が遅くなる

こんにちは異世界
ありふれている日常？

どうも、俺はルピと言います
以後よろしく！

誰へ向けた挨拶だ？

「んーおはよう」

と言ってみるが親はいない、親は仕事の付き合いで、どこかに行っている筈だからな

「おはよう、お兄ちゃん」

「おう、おはよう」

「それにしても遅い起床だね」

「え？」

「時計見て〜」

現在10時30分

「わおー」

「今日何か約束はなかった？」

「えーと、あ」

「その予定の時間まであと1時間しかないけど、どうするの？」

「頼む、色々と手伝って」

「はあ、お兄ちゃんはどこか抜けてるんだよね」

「俺は抜けてるところの方が多い気がするが」

「はいはい、無駄話する暇があったら、顔洗って、ご飯食べて、着替えて、持ち物確認して、」

「お前は俺のお母さんか？」

「あのお母さんではない」

「そうだな」

「はい動いてー」

「はーいー」

※※※※※ ルピside↓?side

「よし、服装もよし、持ち物よし、準備OK！」

私は今日一世一代のことを行う、その時に恥ずかしい事は出来ない
と意気込み、1ヶ月前から準備を行なってきたから絶対に大丈夫な筈
予定の時間より早いけど、遅れるよりはマシだよな

「行つてきます」

家の扉を開けて、待ち合わせの場所に向かう

待ち合わせの場所は、駅の出口にしてあると思う

ダメダメ！こんな弱気じゃダメ！

もつと自信を持つておかないと

一歩一歩と目的に進む度に、怖くなる自分もいるが、足を止めな
い

「おーい雫」

ん？今の時間を確認する、予定より30分早い

「早いねルピ君」

「遅れるよりはマシかなと思ってな」

「私もそう思つて早くきちやつた」

「まあ、早いけど行くか」

「そうね行きましょう」

※※※雫side↓ルピside

あぶねー妹に手伝つてもらつて助かったー

具体的にやばいを表現すると、超重要な会議に1時間遅れると同義
と同じくらい

「ふー着いたけど、絶対に早いよな」

時計を確認してみると待ち合わせの45分前だった

遅れるよりかはマシだと割り切つて待つておく

〜15分後〜

遠くに見えるは雫さんではありませんか

「おーい雫」

「早いねルピ君」

「遅れるよりはマシかなと思つてな」

「私もそう思つて早くきちやつた」

「まあ、早いけど行くか」

「そうね行きましょう」

※※※ルピside↓三人称

駅に入り、電車を待つ2人ただ待っている間に

「ね、ねえ」

「ん？」

「手繋いでもいいかしら」

「おう、ええで」

／／／／／

という感じで桃色空間が形成されていた、リア充撲滅委員会過激派
がいたら、とつくに爆破されているだろう

電車に乗り込むと、さらに加速する

八重樫が

「ごめん、ちょっと眠いから少し寝るね」

「着いたら起こすから大丈夫」

「ありがとう」

と言うと寝てしまった、寝るだけならばよかつただが、ルピの肩に
顔を乗せて寝てしまうものだから、どうしても画になってしまう

「次は〜次は〜」

「もう着いたのか、おーい起きろー」

「Z Z z z.....」

「じゃあねえ」

と言いつつ終わると同時におんぶを雫をおんぶして、降りていく

側から見れば、もうできていると思ってもおかしくないのだが、こ
れで付き合っていないというものだから、周りはいつも驚く

「おーい起きろー」

「ん、んー」

「お、やっと起きたか、着いたぞ」

「え？ここが？駅のホームだけど・・・」

「ん？起きなかったからおんぶして降りた」

「え／／／／／」

「顔が赤いぞ？大丈夫か？」

「あ、うん大丈夫」

この男鈍感もいいところだ

「きゃー！ひったくりよー！」

「え？」

全身真っ黒な男がカバンを持ってこっちに走ってくる、今俺たちのいるところは駅の中でもかなり奥の方にいるから、ルピたち以外にいない

「ふん！」

「ぎゃー！邪魔すんじゃねえ！」

男は起き上がり、ルピに怒りをぶつける

「殺してやる」

男は包丁を片手に持ち、刺し殺そうとしてこちらに走ってくる

「無駄！」

男の手を足で上に払う、その勢いで相手の頭に踵落としを喰らわす

「ぐっ」

「おっと、やりすぎたかな」

「誰が見てもアウトでしょうね」

「ちよつと君、いいかな」

「あ、はい」

※※※※

〜2人事情聴取〜

「えつと、ひったくり犯がいたから足を蹴って転ばせたら、殺しにかかって来た」

「はい」

「それで返り討ち」

「はい」

「いいかい今度から逃げるように、学校にも連絡させてもらうけどありがとうね、犯人逮捕の協力を感謝します」

陽は傾いている

※※※※三人称↓雫side

あー！また言えなかつた☒？

あの犯人許すまじ、また来週かな？

「ねえ、ルピ君来週もいいかな？」

「全然大丈夫」

「ありがとう」

「じゃあ帰るか」

カップルと思われし存在は家に帰る

※※※※※雫side↓謎side

す、凄いスクープだ

クラスの広報担当の私だけど、学年の2代美神の外出を取れるなんて、

それよりも相手が男！これはいい記事になるぞ、そうと決まれば家に帰って記事を書かなくては！広報LINEに共有して作ると広めておいて、明日は号外だしね！

2人はどこでも悩みのタネを知らず知らずのうちにばら撒いてい
るようだ

さようなら地球こんには異世界

ピピピー！ピピピー！ー！ー！ー！

「うーん朝か」

時計を見ると5時を指していた、洗顔などをして台所に降りる

「今日は何を作ろうかなー」

と独り言を呟きながら、冷蔵庫を見る

ツナと豆腐を使ってナゲツトを作る

金平蓮根と果物の弁当に詰めればまあいっか

と決めれば早速行動に移すのがルピ流

〜1時間後〜

出来たー妹、俺、そしてハジメ

ハジメは俺の友達、少し抜けているところがあるが、根はいいやつというののはわかりきっているから大丈夫、まあその本人に、ストーカー予備軍が付き纏っているのだが、、、

朝ご飯を適当に家族分並べて、先に食う

〜30分後〜

自分の部屋に戻り制服に着替えて、準備をする

(もう7時前か)

学校の開門時間は8時だが俺は7時に家を出る、理由はハジメは朝が弱いのがわかっていいるからだ

「行ってきます」

誰も聞いていないがとりあえず言っておく

「行ってらっしゃい〜」

まさかの妹の見送り、嬉しいねー

※※※ルピside↓ハジメside

眠い、ただその一言に尽きる、昨日はお父さんが経営している、ゲーム会社のサポーターとして行っていたのだが、重大なミスがあったので家に帰ったのは3時ごろだった、布団に入るや否や、夢の世界羽ばたく

だが非情にも朝は来る、用意をしておかなくては

ピンポン　ピンポン
来ちゃった

「ルピーすぐに降りるから」
「わかった」

今日は比較的軽い教科書だけだから、物理的に軽いけど、身体は重い

今日は月曜日、察して

「行ってきますー」

「おはようルピ」

「おう、ハジメ早くいくぞ」

「焦らなくても十分に間に合う時間なのに」

※※※三人称

学校が近くなって来たけど、時間があるのでコンビニでジュースを買って時間を潰す2人

「で、昨日は？」

「僕の方はサポーターとして」

「大変だっただろ」

「、うん」

「何時帰り？」

「3時帰り」

「ウワア」

こうなるのには理由がある、過去に一度ルピもこの職場のサポーターとして、行ったことがあるからこそ共感している

「そっちは？」

「八重樫との楽しい外出が犯罪者に絡まれ警察」

「また？」

「また」

ハジメがこういうのにも理由がある

過去に一度、不良に絡まれていたハジメ、話を聞けばおばあさんとその孫らしき人を助けるために、土下座を繰り返した時に暴力を振るおうとした、不良どもが全員の鼻が折れているという、珍事件が発生、

なお犯人はルピだったが色々と手続きを行い、無罪円満で生活している

その他にも多数の厄介ごとがあつたが大体が、警察のお世話になっている

「それより、門が開くぞ」

「そうだね行こうか」

コンビニを出る2人に待ち伏せていたかのように、女子2人が現れる

「おはよう」

「おはよう」

※※※三人称↓八重樫side

「それでね、ルピ君がー」

「待って、ここからハジメ君の匂いがする」

「流石に幻よ、ここであつたら」

ウィーン

「おはよう」

「おはよう」

えー本当にいたー、本当のストーカーになつたのかしら香織は、

「少し時間を潰さない？」

「別にいいぞ」

よし！今度こそ

「雫何してるんだ？」

本当に最悪

「、おはよう天之川君」

「おっ、おはよう」

「おはよう、それよりもお前らまた、彼女らの優しさに潰れ込んでいるのか」

「いや、単純な立ち話ですけど何か？」

「そうか、雫行こう」

「私はルピ君と行くわ」

「私もハジメ君と行く」

頼むからもう行ってー、よし！歩いていった！
やつと2人で話せるよー

「なあ八重樫、凄い嫌な予感がする」

確かに私たちの教室に凄い人だかりが出来ている

「とりあえず行く?」

「そうね、行きましょう」

「ハジメ君行くよ」

「あ、はい」

※※※八重樫 side ↓ 三人称

4人が教室に着くと案の定人だかりが出来ていた

「ん?」

そこで目にしたのは

『スクープ』

2代女神ついに付き合う!』

と書かれている新聞のようなもの

「、、、は?」

ルピが歩き始め、教室に入ると割れるような歓声が響く

大体が嫉妬の声である

「おい、ルピお前等に何をしたんだ?」

「いや普通に遊びに行っただけですけど」

「そうよ、ただ遊びに行っただけ」

「っ!違うはずだよなかお」

誰が見ても、ハジメにもうアタックしている香織がいる

「はいはい、これ誰が書いたの?」

「俺だけど、、、」

「そうかそうか」

ニコニコとした顔でそいつに詰め寄る2人

「あのお二人さん顔が全く笑っていませんが、、、どうなさいました」

「ちよっとお話をしましょうか」

「誰かー!タスケテー!死にたくないー!」

「朝のホームルームまでには帰ってくるから」

その後、新聞記者は、いうまでもないだろう

※※※三人称↓ハジメside

その後はいつも通りに時間が進み昼休み

「ほら弁当」

「いつもありがとうー」

「俺の趣味のようなもの、気にすんな」

「ルピ君私たちも一緒に食べていいかな?」

「いいぞ、ハジメは?」

「別にいいよ」

「ありがとう」

「香織、雫。こっちで一緒に食べよう、南雲はまだ寝足りないみたいだしさ、せつかくの美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよっ」

確かに僕は寝ていたけど、それは酷くない

「なんで光輝君の必要がいるの?」

「「ブフツ」」

思わず吹いてしまったが、めんどくさい

「いっそ異世界転生されなかなーと考える」

「どうせ天之川君辺りが勇者でーと考えていると床が光り始め
(!?)

思考が追いつかない、しかし非常にも光はクラスを飲み込む

残っていたのは散乱した机、弁当箱のみである

狂信者に絡まれた

「お、お、て」

「おき、て」

「起きて！」

「はっ！」

「よかった、起きた」

「おはよう？ 雫ここは？」

「私にもわからない」

「ようこそ、勇者様トータスへ、そして同胞の皆様。私は聖教教会にて
教皇の地位に就いているイシユタル・ランゴバルドと申します。以後
お見知り置きを」

「??？」

※※※ルピside↓ハジメside

「ハジメ君大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「よかった」

「ルピの方が、」

「大丈夫だよ、雫ちゃんがついているからね」

ここにきて5分程、ほとんどが目を覚ましているのにも関わらず、
ルピだけ目を覚さない、ここはどこ？ 少なからず学校ではないことだ
けは確定している、周りには変な人が沢山いること以外の情報は得る
ことが難しい

「はっ！」

よかった目を覚ました

「ようこそ、勇者様トータスへ、そして同胞の皆様。私は聖教教会にて
教皇の地位に就いているイシユタル・ランゴバルドと申します。以後
お見知り置きを」

どうやら、かなりピンチな状況に置かれているようだ

※※※ハジメside↓ルピside

「少し場所を変えて話しをさせていただきます」

と言われるがままに着いていく、雫は袖を掴んでついて来ている
おかしい、日本の中にこんな建物があればすぐに話題になっている
はずなのに、こんな建物は見たことがない

「着きました」

扉が開き中に入ると長いテーブルがある部屋に着いた

席に着席すると同時にメイドが何か飲み物を持って来た、他の男子
共は見て顔を赤らめていたが、無理もない話全員が美人だったからだ
俺は別になんと思わないが、女子からこれでもかと言わんばかりの視
線が男子に向けられていた、というか向いたら横にいる雫に殺されそ
うな予感がしたからだ

「まず皆様が置かれている状況を説明させていただきますと」

「—————割—————愛—————」

そして変なおっさんが言う話は長いから要約すると

この世界はトータスと言ひ人間と魔人と亜人がいた

そして人類と魔人が戦争をし始めていたが魔人側が魔物を使役し
始めてから戦況は人類が劣勢になりよくわからん神エヒトが、俺らを
召喚した

はつきり言つてめちやくちやだ、何故戦闘経験のない高校生？そし
て訳のわからん神を酔狂する勢いで、信仰している狂信者、謎が多
すぎる

現時点ではわからない、とりあえず様子見か、あわよくばこのまま
帰りたいが帰れないという検討がつく

愛子先生が立ち上がって抗議し始めた

「ふざけないでください！この子達を戦争に巻き込むと言うのですか
それは断固拒否させていただきます！そして早く私達を元世界
に帰してください！」

予想していた通りの相手の意見が返ってきた

「お気持ち察しますが、、、結論から申すと帰還は不可能です」

「そんなそんなそんな、、、」

「なんでだよちくしょー！」

「ウソダドンドコドーン！」

おーい誰だ、こんなところでふざけたバカは？

「皆、今ここでイシユタルさんに文句を言ってもしようがない。俺は、、戦う、戦うつもりだこの世界の人々を救い皆を元の世界へと帰す。人々を救えば帰してくれるのですよね。イシユタルさん？」

「そうですねエヒト様でも救世主の願いは聞き入れてくれるはずですよ」

「それにさつきから力が満ちているような感じがするのですがこの力は？」

「召喚されたさいに力が与えられたのでしよう。この世界の人々よりも強大な力が与えられているはずですよ」

「この力を使つて俺は魔族を討ち滅ぼす！そして皆を元の世界へ帰して、この世界の人々を救つてみせる！」

非常に不味い、更に状況は悪化していく

それに感化された奴らが戦争参加を表す、最終的に表していないのは

ハジメ、香織、雫、そして俺だけ

「どうした？香織、雫、一緒に世界を救おう！」

「ごめん、私は参加しないとと思うわよ」

「私も」

「おい！ルピ2人に何をした!?!」

「あのなバカ、ここがどこかもわからん場所だな、戦争に参加してください、はいわかりましたっていう馬鹿がどこにいるんだ」

「でもこの世界の人たちが、、」

「悪いけど、見知らぬ人たちを救う程俺はお人好しじゃない」

「それにだ、戦争に参加するっていうことをわかっているのか？」

「どういうことだ？」

頭の中お花畑野郎もここまで来ると、腐つていると言っても過言ではないんじゃないか

「お互いに戦争するということは、お互いに知力がある、つまりだ人間に似た何かを殺すということだ

そのことを理解してるのか？」

「そ、それは」

「それでも不明瞭な点が残り過ぎている」

「どういうこと？」

ハジメが珍しく聞いてくる

「普通に考えて戦争をするのに、俺たち一般ピーポーが呼ばれた？」

自衛隊とかの方が少なからず向いていると考えても、おかしくはない

やろ、呼ぶのになんか制限があるのかもしれないけど」

クラスメイトも確かに見たいな顔をしている奴らがいる

「ゴホン！お話はすみましたかな」

賢い、ここで話を打ち切りにされるとまずいけど、仕方ないか

「終わりましたよ、それでどうするおつもりで」

「ハイリヒ王国に向かいます」

※※※※

王の間にて顔合わせを済まし、その後晩餐会が開かれたが、俺は早めに切り上げた、こんな訳のわからん場所で飯なんかが食えるはずがない

というわけで、部屋に入ってベッドに入って寝ようとしたのだが、下から風？らしきものが吹いている

ベッドを動かし、絨毯をどかすとそこには、取っ手が付いたものがある

開けてみると、腰に巻くタイプの鞆らしきものとヘルメットと手紙があつた、読んでみると

『この手紙を見つけた人へ』

この手紙を見つけたら、ここに来てくれ

そうすれば、この世界で生き残る力を授けることができる

見つけた時にある、ヘルメットとジャンプキットを持ってこい、テストをしてやる』

と書かれていた、まあ、向かってみるのもまた一興

とりあえず明日向かうか

試練

「フアアアアア」

貸し与えられた部屋で起きる、窓から覗いてみるとまだ太陽は登っていない（午前5時を回るかどうかのところ）

軽く身支度をして、ここにあつた鞆にヘルメットとジャンプキットを入れて向かう、飯はこの部屋にあつた果物とパン食べていく、置き手紙もしておいたし大丈夫な筈

※※※※

目的地に着いた？目の前にあるのはボロ小屋だった、中に入ってみると

『あの手紙を見てここに来たのなら、ヘルメットとジャンプキットをつけろ』

言われた通りにつけると、いきなり床が開く、何か仕掛けがあつたんだろうか？まあ、いい落ちた先には、この世界には似合わない空間があつた、壁がコンクリートだからだ

『よく来たな俺はクーパーだ、おつとこれはホログラムだから質問には答えられない、早速だが訓練を開始しよう、まずはこれを使い』

と言われた同時に、なんと銃が出てくる

『そいつはV-47フラットラインだ』

持ってみるとわかつたことが一つだけある、またいた地球にはない銃ということだ、まずの問題銃については昔調べたことがあるが、全く持つて知らない

『まずは射撃訓練だ』

的が出てきて『これを20秒以内に打ち壊せ、点数は85点以上だ』
アーチェリーのような的で、的の数は10だが、大きさはバラバラ
距離もバラバラ、凄い状況

『始めるぞ』

※※※※

「はあ、はあ、はあ、」

息遣いが荒いが、仕方ないと思う、いきなり実銃ぶっ放して、的を

撃てなんか言われたが予想以上に難しい、そして反動これが一番疲れた、体に力を入れないと、銃が勝手にブレるから困った、しかもこの射撃訓練、フルオートで撃たないと間に合わないし、スコープを覗き込みながら撃たないとクリア出来ないぐらい難しい（1倍スコープ）そして時間制限、これを使い越えた頃には、辺りにマガジンが大量に転がっていた

『よし、射撃訓練は終わりだ、次はガントレットだ。

障害物競走をするようなもの硬くなるな、ここで、ジャンプキットの

使い方を2つ、高所からの着地で死なないようにするのと、空中でもう一回ジャンプ出来るようにする効果がある、やり方は、、、』

〜20分後〜

『というわけだ、ガントレットの説明に移るぞ、ここからスタートして200メートル程走った先にゴールがあるが途中に、人形を置いてある、

そいつらを全員撃つて、ゴールにこいよ』

「ふー、行くか」

スタートを切る、ジャンプキットの説明の途中で壁走りを教えてもらった、それらを駆使して、ゴール

『お疲れ様、さ、休んでる暇はないぞ』

次はタイタンの説明に移る、タイタンというのは、鉄の塊で出来た高性能なロボットだ、そしてタイタンに出会った時の約束だが、真つ向からタイタンにも乗らずに突っ込むのは、“死”を意味することを覚えておけ、操作方法はまずここに、、、』

〜1時間30分後〜

『これで教えることはない、先に進むと鍛冶台があるそこに、俺が銃などの情報をまとめた端末がある、それを起動してくれ以上だ』

目の前には木の扉がある、開くと鍛冶台と机の上に置かれた端末があった、端末を起動すると、スマホのような感じで操作ができるため、すぐに情報を見ることが出来た、ただ材料がないと思っていたが、横の扉があり開けると、大量の資材が置かれていた、これならタイタン

を作ることが出来ると歓喜する俺、早速鍛冶台に火を灯し、鉄を打ち、
タイタンのパーツを作り上げる

※※※※※1週間後

時々、王宮にも戻っていたりしたが、ついに今日完成する

「よし！起動！」

データコアと言われる、心臓部分に当たる部分をはめる

「こんにちは、パイロット」

「お前の名前は、BT-001だ」

「私はBT-001、これからよろしくお願いします」

「おう」

※※※※※

BTに乗って、訓練場に戻ると、ハジメがいじめられている

「BT録画出来るか？」

「可能です」

「頼む」

「俺は降りてやってくる」

1人とタイタンから少し離れた場所になると横から唐突に衝撃を
受けて転んでしまった。其処に居たのは檜山が率いる小悪党四人組
でハジメにちよつかいを掛け始めてきた

「よお、南雲。なにしてるの？そんなに急いで何処行こうってんだよ
？無能は無能らしく地ベタに這いつくばってるよ」

「ちよっ、檜山言い過ぎー！いくら本当だからってさー、ギャハハハ」

「訓練もせずに毎日図書館に通うとか小学生かよーマジ笑えるわー、
ヒヒヒ」

「なあ大介。こいつさあ、なんかもう哀れだから俺らで稽古つけてや
んね？」

「何してるんだ？」

パイロットの装備に身を包み、片手にはグラップルを装備して俺は
話しかける

「あ？そこにいる無能が弱いから特訓してやってるんだよ」

「でも、お前らも弱いだろ」

「なんだと」

明らかに怒りをあらわにして言ってくるが

「お前らにはじめを鍛えてもらおうぐらいなら、俺が鍛える」

「お前みたいなの雑魚に何が出来るんだよ」

「そうかそうか、ならやるか？」

「おう、やってやるよ」

「ふっ」

リアットを喰らわせ中に浮かせてたあと、グラップルで地面に叩きつける

ゴキッ！

なってはいけない音が鳴る

「ギヤアアアアアアアア！腕が！腕が！」

首を折るつもりだったつもりが、まあいいか

「ひっ！ここに風撃」

「遅い」

ダダダダダ！

「ギヤアアアア、」

肩に銃弾を撃ち込んでただけだ、そこに

「ねえ？ハジメ君に何をしているのかな？」

サアーつと青ざめた顔を声にした場所へ向けると其処には笑っているが全く笑みが含まれていない目を浮かべた香織の姿であった

「ねえ？何してたの？誰がどう見ても虐めをしているとしか見えないよね？」

「いや、誤解しないで欲しいんだけど…俺達は南雲の特訓に付き合ってただけで」

「何やってるの!？」

そこにアホなどもくる、大変なことになりそうだな

ハジメ変わる

色々と来たなーと思っていたが

「勘違いしないでくれ、俺たちは南雲を鍛えようとして」

ここに来て言い訳か

「お前らがそう言うんだったら俺にも証拠がある。BTこい」

「了解」

地面に着地したと同時に爆音が鳴り響く、砂煙が晴れるとそこにいたのは、後ろに剣やミサイルランチャーを構えている、殺戮兵器にも見えるだろう

「証拠は取れているか？」

「取れています」

「流せるか？」

「流せます」

「流してくれ」

「了解」

そこから流れていたのは確実な証拠だった

「はあ？俺らがわざわざ無能のお前を鍛えてやろうってのに何言ってるの？マジ有り得ないんだけど。お前はただ、ありがとうございまして言ってくれればいいんだよ！」

そう言ってハジメの脇腹を蹴り上げる檜山。痛みに顔をしかめながら呻くが振るわれる暴力にだんだんと躊躇いを覚えなくなっている。檜山はハジメを人気の無い場所へと連れ込み突き飛ばす

「ほら、さっさと立てよ。楽しい訓練の時間だぞ？」

「ぐあー!？」

背中を強打

「ほら、なに寝てんだよ？焦げるぞく。ここに焼撃を望む——火球」

火属性魔法による攻撃を転がる事で危機を脱したが

「ここに風撃を望む——風球」

続く風魔法は避けられずに腹部へと直撃、吹き飛ばされ胃液を吐き出

しながら蹲る

「ちよ、マジ弱すぎ。南雲さあ、マジやる気あんの?」

そこから俺が来たという感じだ

「う、嘘だ!嘘に決まってるだろ」

「いや、私は信じるよ」

香織の援護射撃 効果は抜群だ??

「だってよ、メルドさん」

「」「」「え?」「」「」

「気付いていたか」

ぶつちやけると普通に聞こえてた、常人の耳よりいいからかな?

「罰は任せます」

「わかった、こい4人とも」

「」「うっ!はい」「」

一件落着

「だが、南雲自身ももつと努力すべきだ。弱さを言い訳にしているは強くなれないだろう?聞けば、訓練の無い時は図書館で読書に耽っているそうじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてる。南雲も、もう少し真面目になった方が良い。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもしれないだろ?」

「お前は馬鹿か?」

「なに?」

「ハジメが図書館にいるのはお前たちでない、知識を得るためにいるんだよ、じゃあ質問するぞ、大迷宮の上層に発生する魔物は?」

「そ、それは関係ないだろ」

「関係するわアホめ、ハジメ答えは?」

「ラットマンだよね、」

「そう、正解」

「わかるかバカ勇者、お前は高スペックな身体能力があるが、ハジメにはないんだよ、ハジメが仮にお前と同じ訓練しても、途中で離脱するのが関の山だ」

「だ、だけど」

「だけど？なんだ？」

「それよりも、お前はなんだ？」

「どう言うことだ？」

「お前は銃を持つてるじゃないか、みんなにも渡せ！」

「残念ながらそれは無理だ」

「どうして!？」

「質問だ、銃に必要なものは？」

「本体だけだろ」

「違う、弾丸は？」

「作ればいいじゃないか」

「そんなことは無理だ、俺は自分の技能を使ってそれを解決しているから出来るだけ」

「だ、だけど」

「パイロット時間です」

「お前と話してもなんにもならんわ」

俺はその場を後にする

※※※ルピside↓ハジメside

僕がやられそうになった時にヒーローはいつもやってくる

いつも通り助けてくれた、前よりも強くなって、、

僕はいつも守られてばかりだ、何か困ったことがあれば、ルピや香織達に助けてもらってばかりだ、僕は弱い、弱いなりに頑張っても邪魔が入る、それでまた助けられる、こんな僕は嫌だ??力もない自分は嫌だ??

だから

「ルピいや、ルピさん僕に戦い方を教えてください」

僕は頭を下げた

「え？いきなりどした？」

「弱い自分は嫌だ??だから教えてください」

「敬語はいらんし、教えてやるからよ。訓練場に来いよ」
笑顔が溢れる

「うん！」

〈訓練場〉

「ハジメの天職は錬成師だよな」

「うん」

「錬成師は鉱物の形を変えるんだったら、血液の中にある鉄分とか、その辺も変えることはできるんじゃないかなと考えてみたことはあるか？」

「うーん、考えてみたことはないね」

「そうか」

「？」

「じゃ、ハジメの戦闘スタイルは、こんな感じ

相手に接近する

??

血液などに含まれる微量の鉱石系統を錬成

??

倒す

って感じ」

「わかった、やってみる」

「とはいっても、ハジメの場合、近づくこと自体が困難だと思う」

「たしかに、、」

「そこでだ、使えるものを全て使って近づくとするとなにをする？」

「なについて？」

「そうだな例を挙げるなら、地面が砂で出来ていたら砂を相手の顔面に投げつけて、相手の視力を一時的に奪うとか」

「成る程」

「あとは、瞬発力を上げたり、キリはない」

「わかった」

「あとはハジメ次第、錬成で何か武器を作ったり、視力を奪うのに特化したもの作ったり、ハジメが一番戦いやすいもので戦えばいいと思う」

「ありがとう、ルピ」

「気にすんな」

「あともう一個」

「？」

「明日オルクス大迷宮に向かうために、この王国を出るって」
「ありがとよ」

月下の約束

俺たちは、宿場町ホルアドについた

王国の直営の宿屋にとまる。王国と比べると質素だが俺的には、こちらの程が楽に過ごしやすい、王国の部屋は、なんとなく（汚してはいけない）という気持ちだが、勝手に湧き上がってきたが、こっちの部屋は、庶民向けなため気が楽になる。裏の庭らしき場所にBTを放置している。今は、フラットラインの整備をしているが、ハジメは、明日の実戦訓練で足を引つ張らないか、心配している。王国にいる間に俺の訓練を受けているから大丈夫なはず、と信じよう

「ハジメ大丈夫か？」

「いや、明日のことがあるから、、」

「明日は、俺がそばにいるから大丈夫」

「だけど、ルピが、、」

「大丈夫だから」

「わかった、明日僕を頼んでもいいかな？」

「もちろん」

「ありがとう」

コンコン

扉をノックする音が響いた。

「どちら様……ですか？」

深夜に自分達を来訪する者の心当たりが無いとルピとハジメが首を傾げていると、

「ハジメくん達、起きてる？　白崎です。ちよつと、いいかな？」

「夜遅くごめんなさい、二人とも。　八重樫だけど、少し気になることがあって」

扉を開けるとそこには、純白のネグリジエにカーデイガンを羽織った二人が立っていた

「……………なんでやねん」

「「え？」」

唐突な関西弁、俺でなきや見逃しちゃうね

「んでどした？」

「ちよつと話がしたかったから、、」

「私も、、」

顔色があまり良くないが、

「立ち話も悪るいし、中に入れよ」

「、、、うん」

取り敢えず二人を椅子に座らせて、お茶を入れる

普通であれば、「どうぞ襲ってください」と言わんばかりの格好で、
いるのだが

俺達は、耐性があるからなにも思わないだけである

「それで話したいことは？」

二人は、顔を見合わせ

「明日の大迷宮だけど……………ハジメ君達には街で待つといて欲しい
の！」

メルドさんやクラスメイトは説得するから！お願い！」

「私からも！」

「ちよいちよい、いきなりどしたん？」

「そうだよ、ルピもいるんだし」

「あのね、なんだか凄く嫌な予感がするの。さっき少し眠ったんだけど……………夢をみて……………ハジメくんとルピくんが居ただけ……………声を掛けても全然気がついてくれなくて……………走っても全然追いつけなくて……………それで最後は……………」

「ルピ達が消えてしまう……………みたいなの」

「大丈夫だから、心配しすぎると体に悪いよ」

「ハジメの言う通り、俺はクラスメイトの中で一番ステータスが高い
んだし」

「もしものことがあれば、僕たちを守ってよ」

「「え？」」

「そうだな、もしものことがあれば二人が守ってくれ、俺的には本来俺たちが守るにのが、鉄板なんだろうが」

「あはは」

「!？」

「やっぱり、ルピらしいね」

「そうか？」

「うん、そうだよ。普通は、こんなことは言わないからね」

「はは、そうか」

「うん、でも注意はしてね」

「わかった、頭の片隅に置いて置く」

「ありがとう」

「遅いし、部屋までおくつていこうか？」

「大丈夫だから、おやすみ」

「おやすみ」

「ハジメ君おやすみ」

「おやすみ、【香織】」

向こうは向こうで、進展があつたみたいで良き良き

※※※ルピside↓ハジメside

明日が不安で仕方ない、本来であれば【錬成師】が行くような場所では無いから、、、

当日は、ルピが傍に居てくれるから少しは安心出来るかな？

でも、ルピにきたえてもらったからその成果を見せないと、、、頑張ろう！

「ハジメ大丈夫か？」

いきなり話しかけられるとびっくりした

「いや、明日のことがあるから、、、」

「明日は、俺がそばにいるから大丈夫」

「だけど、ルピが、、、」

「大丈夫だから」

「わかった、明日僕を頼んでもいいかな？」

「もちろん」

「ありがとう」

コンコン

扉をノックする音が響いた。

「どちら様……ですか？」

深夜に自分達を来訪する者の心当たりが無いとルピとハジメが首を傾げていると、

「ハジメくん達、起きてる？　白崎です。ちよつと、いいかな？」

「夜遅くごめんなさい、二人とも。八重樫だけど、少し気になることがあって」

扉を開けるとそこには、純白のネグリジエにカーデイガンを羽織った二人が立っていた

「……なんでやねん」

なぜか関西弁がでてしまった

「「え？」」

「んでどした？」

「ちよつと話がしたかったから、、」

あんまり顔色が良くないけど、大丈夫かな？

「立ち話も悪るいし、中に入れよ」

「、、、うん」

正直に言うとう目のやり場に困っている、ルピは凄いなー

顔色一つ変えずに話せるんだから、、

「それで話したいことは？」

二人は、顔を見合わせ

「明日の大迷宮だけど……ハジメ君達には街で待つといて欲しいの！」

メルドさんやクラスメイトは説得するから！お願い！」

「私からも！」

「ちよいちよい、いきなりどしたん？」

「そうだよ、ルピもいるんだし」

「あのね、なんだか凄く嫌な予感がするの。さつき少し眠ったんだけど……夢をみて……ハジメくんもルピくんが居ただけ……声を掛けても全然気がついてくれなくて……走っても全然追いつけなくて……それで最後は……」

「ルピ達が消えてしまう……みたいなの」

「大丈夫だから、心配しすぎると体に悪いよ」

「ハジメの言う通り、俺はクラスメイトの中で一番ステータスが高いんだし」

「もしものことがあれば、僕たちを守ってよ」

「え？」

「そうだな、もしものことがあれば二人が守ってくれ、俺的には本来俺たちが守るにのが、鉄板なんだろうが」

「あはは」

「どうしたの!?白崎さん!？」

「いやルピ君の言うことが面白くて」

「なら、安心したよ。てつきり壊れたかと思って」

「私は【治癒師】だよ。壊れることはないと思うよ」

「そうだね」

「それよりも、私のことを【白崎】と言ってるの？私のことは、【香織】って呼んで」

あれ？そうやって言うと、一部から恨まれそうだけど……

まあいつか

「わかったよ、香織」

明らかに笑みがこぼれているけど……まあいつか（思考停止）

向こうも終わりそうだし、こっちも切り上げるとしようかな

「夜も遅いしそろそろ、終わりにしようか」

「そうだね、おやすみハジメ君」

「おやすみ香織」

※※※ハジメside↓??side

「なんでなんで、南雲何かが！」

そいつの顔が醜くそして、復讐に燃えていた

大迷宮突撃！

俺たちは、今大迷宮の前にいる。

王国からの要請というか、国王からの要望で行かされている俺たちは、ある意味目立つ。冒険者から聞こえてくるのは、

「あれが、神の使徒？」

「本当に、あれで人間族は救われるのかな？」

と聞こえてくる、だいたい俺とBTに向いている。この世界にはないものだから、視線が集まるのは、至極当然なのだがなれないものである

「大丈夫？」

「なんとかね」

BTのスピーカ機能を使うことによって、外部との連絡を取れるという設計になっている

「雫も、視線が集まっているとおもうけどな」

世間一般から見れば、雫は美人の中でもかなり上位に入っていると思っているけどな。

「今から入るぞ！」

メルドさんがそう叫ぶと同時にクラスメイトが入っていく。俺とBTは最後にはいるてはずになっている

※※※※

迷宮の中に入ると、外の騒ぎが嘘のように静かである

縦横五メートル以上ある通路は明かりもないのに薄ぼんやり発光している。明かりの魔法具などがなくてもある程度視認が可能であるのは、この緑光石という特殊な鉱物が多数埋まっているからであり、「オルクス大迷宮」は、この巨大な緑光石の鉱脈でもあるらしい。

一行は隊列を組みながらしばらく進んでいると、ドーム状の大きさ且つ天井も広い広間のような場所に出た。

そこから、灰色の毛玉がでてきた

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

「気持ち悪いね」

とハジメが言うが仕方ない、外見を説明すると

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光り、外見はねずみっぽいが……二足歩行で上半身がムキムキだった。

戦いに目を向けると、間合いに入ったラットマンを光輝、雫、龍太郎の三人で迎撃する。その間に、香織と特に親しい女子二人、メガネっ娘の中村 恵里とロリ元気っ子の谷口 鈴が詠唱を開始し、魔法を発動する準備に入るといふ訓練通りの堅実なフォーメーションを組み立てるが、女子の顔が完全に引つっている。

前衛は訓練がどうりに行動して、後衛が詠唱を始めそして

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ――

――螺旋――」

三人同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていき、断末魔の悲鳴の後、灰へと変わり果てさせる。

メルドさんは、苦笑いを浮かべているが、慢心にしか思えないおもえないが

ただ、あいにく俺は魔法についてはわからないが、前衛の動きだけをみると無駄が目立ったように見える。俺以外の人が見ると一流に見えるかもしれないが、

恐らく、剣だけでも天之川に勝てると思う（雫のお墨付き）

「ルピお前の番だ」

「わかりました」

「敵対生物の数は5体です」

BTの背中に付けておいた【エクスペディション】を取り出し構える

「キーーーーー!!!」

ダダダダダダダダダダダ
!!!!!!!

ラットマンの5体の内、二体が肉片となり、地面に散らばる
「「きょろろろ」」

ラットマンは逃げよとしているが、この世界で一番射程の長いのは、弓？魔法？

違う違う俺だけが持っている【銃】だ

だから、ここから動かずとも全員を殺すことができる。

「さようなら」

迷宮の中に乾いた発泡音が響く

「終わっ!？」

メルドさんが見たのは、辺り一面に散らばる肉片であろう

今までは、BTの巨体で惨状が隠れていただけである

クラスメイトも、覗いて顔を抑えている人、壁に向かって吐いている人などなど、、、

「取り敢えず、先に進むか」

「はい」

※※※ルピside↓ハジメside

ルピは、向こうで暴れているけど、、ちよつとだけ不安になるけど、頑張らないと!

「キィィィー」

ラットマンがこちらを向いている、そして完全にこちらを敵に思っている

「ちようどいつか」

足元に転がっている岩石を持って突っ込む、そして

「錬成!」

ラットマンの口元で、錬成を行うことによって一度岩石を液状化し口と鼻に合わせる、そして勝手に窒息死するという戦術を考えて、実践に取り入れた結果は上々

ん?向こうが騒がしいから向こうに行ってみると

「!？」

辺りに一面に広がる惨状が目に入る、思わず口を抑える

そこに立っていたのは、ルピの乗っていたロボットが佇んでいる

「取り敢えず、先に進むか」

「はい」

ルピの返事と共にクラスメイトも進んでいく

※※※※ハジメside↓三人称

「よし、お前達。ここから先は一種類の魔物だけでなく複数種類の魔物が混在したり連携を組んで襲ってくる。今までが楽勝だったからと言ってくれぐれも油断するなよ！今日はこの二十階層で訓練して終了だ！気合入れろ！」

メルド団長のかけ声がよく響く。

二十階層の一番奥の部屋はまるで鍾乳洞のようにツララ状の壁が飛び出していたり、溶けたりしたような複雑な地形をしていた。この先を進むと二十一階層への階段があるらしく、そこまで行けば今日の実戦訓練は終わりだ。

転移魔法の様な便利なものは現代にはないので、また地道に帰らなければならぬ。一行は、若干、弛緩した空気の中、せり出す壁のせいで横列を組めないで縦列で進む。

すると、先頭に行く光輝達やメルド団長が立ち止まった。訝しそうなクラスメイトを尻目に戦闘態勢に入る。どうやら魔物のようだ。

「擬態しているぞ！周りをよく注意しておけ！」

メルド団長の忠告が飛んだ直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。壁と同化していた体は、今は褐色となり、二本足で立ち上がり、胸を叩きドラミングを始めた。どうやらカメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物のようだ。

「ロックマウントだ！二本の腕に注意しろ！豪腕だぞ！」

メルド団長の声が響く。光輝達が相手をするようだ。飛びかかってきたロックマウントの豪腕を龍太郎が拳で弾き返す。光輝と雫が取り囲もうとするが、鍾乳洞的な地形のせいで足場が悪く思うように囲むことができない。

龍太郎の人壁を抜けられないと感じたのか、ロックマウントは後ろに下がり仰け反りながら大きく息を吸った。

直後、

パラパラと部屋の壁から破片が落ちる。「ふう〜」と息を吐きイケメンスマイルで雫へ振り返った光輝。香織達を怯えさせた魔物は自分が倒した。もう大丈夫だ！と声を掛けようとして、笑顔で迫っていたメルド団長の拳骨を食らった。

「へふう!?!」

「この馬鹿者が。気持ちはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃないだろうが！ 崩落でもしたらどうすんだ!」

メルド団長のお叱りに「うっ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝を香織達が寄ってきて苦笑いしながら慰める。

すると、その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。まるでインディコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になった。

「ほお、あれはグラントツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

グラントツ鉱石とは、言わば宝石の原石みたいなものだ。特に何か効能があるわけではないが、その涼やかで煌びやかな輝きが貴族のご婦人ご令嬢方に大人気であり、加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもTOP3に入るとか。

「素敵……」

「だったら俺らで回収しようぜ!」

そう言つて檜山が唐突に動き出した。グラントツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ!」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった

ルピはBTについた肉片を落としているため気がつかない

ルド団長は、止めようと檜山を追いかけると同時に、フェアスコ

プで鉱石の辺りを確認していた騎士団員の一人が一気に青褪めた。

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

しかし、メルド団長も、騎士団員の警告も一歩遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に合わなかった

眩い光が全員を飲み込む……

※※※※

「大丈夫か？」

「なんとかね」

「こつちも大丈夫」

「こちらも大丈夫ー」

見た感じ飛ばされてきた場所は、石造りの橋に飛ばされたらしい

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

メルドさんが、支持をとっている。その瞬間に魔方陣が現れている
1つは、骸骨無限発生魔方陣。もう1つは、やばい香りがする魔物
それを見たメルドさんが「まさか……ベヒモスなのか」
「どうやら一筋縄ではいかないらしい」

嫉妬と裏切り

「グルアアアアアアアアアア!!」

「アラン！生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！カイル、イヴァン、ベイル！全力で障壁を張れ！ヤツを食い止めるぞ！光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

「待って下さいメルドさん！俺達もやります！あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！」

「馬鹿野郎！あれが本当にベヒモスなら今のお前達では無理だ！ヤツは六十五階層の魔物——かつて、”最強”と言わしめた冒険者が束になっても歯が立たなかった化け物だ！私はお前達を死なせるわけにはいかない！さっさと行け！」

「メルドさん、しんがりを引き受けます」

「正気か!？」

「この中で一番ステータスの高い俺がしんがりを引き受ければ、生存率

は上がります」

「わかった、生きて帰ってこい」

「わかりました、死ぬ気はありません」

「パイロットきます」

「わかった」

「グルアアア！」

「弾でも喰らえ！」

ダダダダダダ！秒間十発を超える発射レートでベヒモスを撃つ

「グルアアア！」

角が赤熱化し、こちらに突進してくるが目を的確に打ち抜く、いかに迷宮の魔物といえど、所詮は生き物弱点を潰せば怯む

「グガアア！」

怒りに我を任せ突進してくるが、

「ロックオンミサイル発射」

頭に当たり角が折れる

「グガアアアア！」

善戦をしていたが、戦っていたのは橋の上、橋が悲鳴を上げていた
「警告警告、橋が崩落する可能性があります。私からの提案はただ一
つこの魔物を殴り飛ばし、向こう岸に飛ばすことです」

「わかった、信用するぞ」

「わかりました」

「オラ！喰らいな！」

「グガアアア！」

「コア発動可能」

「バーストコア発動！」

バーストコアは、エクスペディションをリロードをし、強化弾を通
常の発射レートを超える

発射レートで撃ちまくるといふもの。簡単にいえば必殺わざであ
る

「死ねーーーーー！」

発泡音ではなく、魔物の咆哮が木霊する

「ガアアア！」

「ぐっ！」

橋の中腹まで飛ばされてしまった

「欠損はありません」

「ルピ（君）」

「お前ら早く引け！」

「ルピ聞いて！今から僕が錬成してベヒモスを錬成で封じ込めるか
ら、その間のサポートをお願い！そのあと魔法による殲滅が始まる前
に引くっていう、作戦」

「わかった、で2人は？」

「サポートだよ」

「さいですか」

会話をしていると、満身創痕のベヒモスが歩いてきた

「グアアアアア！」

最後の力を振り絞った咆哮を上げこちらに向かってくる

「行くぞ！」

「うん」

「私たちもいこう」

「そうね」

「錬成！」

ベヒモスは、錬成で作られた落とし穴にはまっていた。そこに上から弾幕が襲いかかる。そして

「坊主達退け！」

と言われて、ハジメ達をBTの脇に抱えて走る！後ろでベヒモスが追ってくるが、魔法が当たり、前に進めない。そして橋の目の前に来たところで、1つの魔法が目の前に着弾する、人であれば三半規管が逝かれていたであろうが、幸い俺はBTに乗っているため無事だが、橋が限界を迎えたようである

「雫、香織投げるぞ！」

「えっ」

「いけーーーー！」

「キャーーーー！」

「ハジメも」

「パイロットそれは無理です」

マジですか

「ハジメ悪いが投げれん、衝撃に備えろ！」

「わかった」

よく、平静を保てるな

「BTハジメを離すな」

「了解」

※※※ルピside↓クラスメイtside

「離して！ ハジメくん達の所に行かないと！ 約束したのに！」

私があ、私達が守るって！ 離してえ！」

「離しなさい！ 今此処で二人を助けにいかないでどうするのよ!？」

目の前で助けしてくれた人たちが、消えてゆく。そんな光景を見れば

助けに行こうとするのは当たり前、そして雫が抵抗をやめ口を開く

「だれ？魔法を放ったのは？」

「魔法って精密に書き入れないと打てないよね、もしかして檜山くん？」

「は、はア!?俺の適正魔法は風だぞ。あの時当たったのは火の魔法だぞ」

「今なんて？」

「だからあの時当たったのは火の魔法だって言っているだろ！」

「私たちは魔・法を当てたのは誰って聞いてたんだけど、、それってつまり檜山君がやったということだよ」

「な、なんで俺なんだよ」

「あの時100を超える魔法が、飛んでいたんだよ。つまり発動者しかわからないはずだよ。それは犯人っていうことだよ」

「死んで」

「……すまん」

「かほっ」

「うっ」

「お前ら……上に行くぞ」

「はい」

檜山は帰りの間、皆から無視され

「お前は王国に帰ってから裁く」

と言われている

クラスメイトは初めて、命について分からされた

真の大迷宮

真の大迷宮

「がはっ！」

勢いを殺すのに、失敗してしまった、、、視界が暗くなっていく、、、

「BT、ハジメを見つけ守れ、、、頼んだぞ」

「わかりました、安心してください」

「あり、、、がと、、、う」

ここで完全に気絶してしまった

ルPside↓ハジメside

運良く生き残っているけど、、、目の前にはウサギ？がいる

ドン!!

「ッ!？」

ハジメは驚いた先程まで居たウサギが一瞬でハジメの近くまで居た。砲撃と間違えるような強力な音を鳴らしてハジメの眼で追えない速度で近くまで来たのだから。

「わぁ!!」

ヤバイ！全身から警鐘が鳴り響くけど、ウサギは方向転換をしどこかに消えてしまった

ん？どこからか気味の悪い音が鳴っている？

「ッ!？」

ぐちやぐちやぐちやぐちや

そこには、先程のウサギを食べているクマがいた

「グガアアアアアアア」

不味い気づかれたー!!!

(助けてルピー！)

クマが腕を振り降ろそうとした時

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ!

発砲音が鳴り響く

「大丈夫ですか？後ろの壁を錬成して逃げてください」

「わ、わかった」

錬成！錬成！！錬成!!!錬成!!!!

外では戦いが終わらないらしい、その為、奥まで錬成で逃げ込んだ

ハジメside↓BTside

パイロットからの命令を受諾

対象者；ハジメを保護

生体反応は200以上あり、人型の生体反応は1そこに対象者を補足

謎の魔物を発見、ハジメを襲おうとしている

発砲開始

くま型の魔物は謎の斬撃を繰り返す

一部の欠損を確認、戦闘において問題なし

「大丈夫ですか？後ろの壁を錬成して逃げてください」

「わ、わかった」

対象者を保護

「グガアアアアアア！」

新たに2体の魔物を検知

「ここは通さない」

error error error

なぜ？今不要な言葉を？いや、私の目の前にいる害獣を倒さなくて

は

警告 警告 警告

多数の魔物がこちらに向かってきます。驚異を排除ただそれだけ

何発の弾を撃ったか分からないほど、戦い続けていました
生体反応は2つ

つまり、この階層の魔物は全員殺してしまった

「ん、ん？」

パイロットが起きました、不具合を隠さないと

「大丈夫ですか？」

「ああ、ハジメは？」

「その穴に入っています」

「ありがとな」

「当然です」

気づかれていますよね？

B T s i d e ↓ ル P i s i d e

「ん、ん？」

目が覚めた、、当たりを見渡すと、死体が積み上がっていた

あれ？これ100は超えてるよな

「大丈夫ですか？」

B T が話しかけてきた

「ああ、ハジメは？」

「その穴に入っています」

ナイス！

「ありがとな」

「当然です」

降りて、穴に入る

結構長いな、、ハジメが倒れている！

「ハジメ！ハジメ！」

「ん？ル・・・ピ・・・？」

「ああ、そうだ」

「よかった、生きていたんだね」

「まあ、自分でもなんで生き残っているかわからんけどな」

「そうだね、僕がここまで生き残れたのは、この水のおかげ」

「この水は？」

「僕の考察だけど、神水だと思う」

神水は、完全回復薬だと言えばわかるだろう

「神水!？」

「こんなに下の階層だし、あってもおかしくないと思う」

「まあ、そうか」

「それより、食料問題だね」

「ん？それは問題ないぞ」

外に出て、魔物の肉を剥ぎ取る

「これ食えば問題ないぞ」

「これって、魔物の肉だよな」

「うん」

「馬鹿なの死にたいの!？」

ハジメがこのように言うのに理由がある

魔物の肉は、猛毒だと言われている

魔物の肉には、魔力がある。これが毒

この魔力が人間の対しては、必ず死に至らしめる毒へと変化している

魔物は、これを分解することができる。

だが、この作用を神水に任せたら？

「俺が食うから、そのあと食ってみ」

「わ、わかった」

「いただきまーす」

肉を口に入れたあと、神水で流し込む

「ぐうあああつ。な、何がっ——ぐうううっ！いつ、ぎいいいい

「いいー！」

耐え難い痛みと自分を侵食していく何かに襲われ地面をのたうち回る。幻肢痛など吹き飛ぶような遥かに激しい痛みだ。

〜30分後〜

「ふう」

「本当にルピだよな？」

「お、おう。いきなりどうした？」

「顔見てみ」

「な、なんじやこりやアアアアア」

「うん、僕も食べるね」

「グウウガアアア！」

俺の体は、筋肉質なからだになっ

て、そして、髪は雪のように白くなっている、そして目が片方が赤、もう片方が青

いわゆるオッドアイいというやつ

「はっー！」

「おはよう」

ハジメ状態を表すと体の筋繊維、骨格が悲鳴を上げて破壊、そして神水の効果で治り、またしても襲い来る激痛。二人は絶叫を上げながらのたうち回り地獄を味わい続け、ひたすらに耐える日本人特有の黒髪は真っ白となり、筋肉や骨格が徐々に太く体の内側に薄らと赤黒い線が幾本か浮き出て来たのだ。幾何も続くその苦痛を耐え続け痛みが来なくなった所でようやく地面へグツタリと大の字で寝転んで先程起きたらしい

「ここで一旦体制を整えよう」

「賛成ー」

「!?僕のステータスが全部3桁を突破している、、、」

何か大変だなー

奈落の底の吸血鬼

落ちた階層から50階層

「これどう思う？」

「強いて言えばパンドラの箱かな」

ハジメは落ちてきた階層で、銃を作った

全長は約三十五センチ、この辺りでは最高の硬度と韌性を持つタウル鉱石を使った六連の回転式弾倉。

長方形型のバレル。

弾丸もタウル鉱石製で、中には粉末状にした燃焼石（燃焼粉）を圧縮して入れている。

それすなわち、大型のリボルバー式拳銃だ。

しかも、弾丸は燃焼石の爆発力だけでなく、ハジメの固有魔法「纏雷」により電磁加速されるといふ小型のレールガンと化している。その威力は最大で対物ライフルを軽く凌駕するレベル。

「ドンナー」と名付けた

ちなみにハジメのステータスはこんなものである

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：49

天職：錬成師

筋力：880

耐性：860

敏捷：1040

魔力：760

体力：970

魔耐：760

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配探知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・痺耐性・石化耐性・言語理解

まあ俺もうかうかしてられないな

さて、現実を意識を向けよう

目の前には、下へ続く階段はすでに発見しているのだが、この階層には今までにはなかったものがあつた。

脇道の突き当りにある開けた場所に、高さ三メートルの装飾が施された荘厳な両開きの扉があり、その扉の脇には一対の一つ目巨人の彫刻が半分壁に埋めこまれるように鎮座していた。

明らかに人公的な建造物を前にして調べる必要があると考えた俺は近づこうとしたが、それをハジメが制した。

「このまま、行くと嫌な感じがする」

と言われて、訓練を行なっていたが今日この部屋に入る

ルピside↓??side

私は、ここに何年間いたんだろう、、、

最近外が激しい、、、どうせここ何か無視されるのがどうせオチ、、、これぐらいなら死んだほうがマシ、、、でも死ねない、、、ああこの世界に神もいない、、、

??side↓ルピside

「これを開けるんだよな」

「そうだね」

「本来なら扉を調べるんだよな」

「うん」

「でもな、こんな扉ならな蹴破れるんだよーな！」

「正規の方法でいけやー!!!グガアアアー!!!」

「こうなるから、正規の方法で行った方が良かったんじゃない?」

「まあ扉は空いているから」

「先の中に入っというて」

「わかった」

「さてと」

目の前にはサイクロプスのような魔物が二体、襲いかかろうとして

いるが

「はい、残念でした」

エクスペディションから放たれた銃弾によって、両方絶命する

「この程度なんでしょうか？」

「いや普通に考えてここにBTが、あるのがおかしいと思うぞ」

「それもそうですね」

「中に行くか」

「わかりました」

ルPside↓ハジメ&??side

僕が中に入るとそこには、聖教教会の大聖堂で見た大理石のように艶やかな石で出来ており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かって二列に並んでいて、そして部屋の中央付近に巨大な立方体の石が置かれており、部屋に差し込んだ光に反射して、つるりとした光沢を放っている。

僕は、何か光るものが立方体の前面の中央辺りから生えているのに気づいた。

警戒心を解かずにそれを凝視していたが、生えている何かが動いた

「……………だれ？」

「女の子!？」

そう、生えていたのは小学生ぐらいの女性であった

「話を聞いても？」

「私、先祖返りの吸血鬼……………すごい力持つてる……………だから国の皆のために頑張った。でも……………ある日……………家臣の皆……………お前はもう必要ないって……………おじ様……………これからは自分が王だって……………私……………それでもよかった……………でも、私、すごい力があるから危険だって……………殺せないから……………封印するって……………それで、ここに……………」

何かやばいことを聞いたのかも、…、まず吸血鬼ということである

地上で読んだ本の中に吸血鬼族は三百年位前に全員死んだってことが書いてあった。それも戦争の時に、…、つまり目の前にいる吸血鬼は、三百年間ここに封印されていた。ということになる、自分がその

立場にいると考えると鳥肌が立つ

「どっかの王族だったの？」

僕は素朴な質問を投げかけてみた、その質問に対して吸血鬼は首を縦に振ってくれた

「どうやら、喋るのもままならないようだ、、ここは一つ賭けてみよう」

「僕の血飲む？」

「これだけで判断するのは、ダメだと分かっていたけど信用してみよう」

「これで話が続けられるね、それで何で死なないの？」

「……殺せないのは勝手に治るから。怪我しても直ぐ治る。首を落とされてもその内に治る」

固有魔法持っていたのか

「先祖返りって？」

「……殺せないのもそうだけど……魔力、直接操れる……陣もいらない」

「助けて欲しい？」

「……うん。私は、生きていたい……ただそれだけ」

「本当にそれだけ？」

僕は分かった、他にも目的があることを

「……もう一人は嫌……だから助けて」

「わかった、そしてよくできました」

錬成を使い形を変えて行く。魔力の通りは悪いが、気合でなんとかする。それでも膨大な魔力をつぎ込んで行く

今まで以上に使う膨大な魔力に脂汗を流し始め、徐々に徐々に少女の手足を拘束する枷を解き——少女を立方体から出す

事に成功した。一糸纏わぬ彼女の裸体はやせ衰えていたが、一般の人から見れば、神秘性を感じさせるほど美しいと思う筈だ。

「……ありがとう」

涙を流しながら感謝されていた、少し照れるね

「名前は？」

「……付けて、あとそつちも」

「僕は南雲 ハジメ」

前の自分を捨てて新しい自分と価値観で生きる。ということかな
「ユエ」ってというのはどうかな？」

「ユエ?……ユエ……ユエ……」

「そつ、ユエつてのは、僕達の故郷で“月”を表すんだよ。最初、君を見たときに月を連想したからさ。その金髪とか紅い眼がこの暗い空間と相まって夜空に浮かぶ月みたいに見えたから……どう？」

思いのほかしつかりとした理由があつたことに驚いたのか、女の子がパチパチと瞬きをする。

そして、無表情ながらも、どことなく嬉しそうに瞳を瞬かせた。

「……んっ。今日からユエ。ありがとう」

「あとこれを着といて」

流石に一糸纏わぬ姿をみせらてはねえ

「……ハジメのエツチ」

「ハハハ、」

「……危ない!」

咄嗟に緊急回避ができたけど、もしその場にいたら、

回避した瞬間天井にいたソレが降ってきた。

それは魔物だった。体長五メートル程、四本の長い腕に巨大な鋏を持ち、八本の足をわしゃわしゃと動かしている。そして、二本の尻尾の先端には鋭い針が付いていた。全身には見るからに固そうな甲殻を纏っている。サソリと例えれば分かりやすいその魔物に向かつて、ドンナーを連射する。だが

「キシヤアアアアアアア!」

全く効いていない、思わず

「うそん」

と声をだしてしまった、そして、サソリから謎の液体を吐いてきた

「……気を付けて、地面が溶けてる」

「わかった」

「!?くる!」

尻尾は突如膨らみ、凄まじい速度で細長い針を撃ち出してきた。

(今の僕にはあれを捌く手段が無い!)

「やられっぱなしは尺なんだよ!」

回避しながら、焼夷手榴弾を投げる

「ギイイイイイイイイイイイイイ!」

苦しそうに声を上げるサソリだが

「キシヤアアアアアアア!!!」

怒りをあらわにして声を上げるだが、

「良くやったハジメ!お前は寝てろ!レザークアオンライン!」

と言い終わると同時に、サソリは半分になった

「.....え?」

「お前さんは誰だ?」

吸血鬼の秘密

「んで、その人は？」

BTから降りて尋ねる

「・・・ゴーレムじゃなかった！」

「人様をゴーレム呼ばわりか、」

「まあ、そんなに落ち込まないで」

「とりあえず飯にするか」

「錬成！」

簡易的な部屋が出来上がった

「・・・凄い」

「まあ、話の中で聞くか」

※※※※※

「んで、あんたは？」

「・・・ユエ」

「僕が名前を付けた」

「それで、ただの人間には見えないけど」

「・・・私は吸血鬼、自己再生もあるし、直接魔力操れる」

「うんうん、んでなんでユエは、ハジメにベタベタしてるんだ!？」

「・・・ハジメは渡さない」

「ハジメ良かったな、彼女ができたじゃん」(ニヤニヤ)

「え? っていうかなんでニヤニヤしてるの!」

「・・・ハジメは美味しくいただく」

「ユエさん!？」

「っていうわけだから、ハジメもう1部屋頼むわ」

「はあ、錬成」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

「・・・ハジメ早く!」

「頑張れよハジメ」

「・・・」

〜二人が寝静まった後〜

「さて、この部屋を漁るとするか」

「特に反応はありません」

「地道に頑張るか」

〜漁り初めて約30分後〜

「ん？これは？」

「それは誰かの手記のようなものですね」

「読んでみるか」

「これを読んでいるということは、わたしの姪を救い上げてくれてくれているということ、話を進めさせてもらうぞ。申し遅れた私の名前は、デインリード・ガルディア・ウエスペリテイリオ・アヴァタールと言う、吸血鬼の国 アヴァタール王国で宰相を務めていた者だ。私は、この地に封印していたのにも理由がある、私の姪が神の依代として選ばれていた、、理由としては姪は天才だった。魔法の分野において、他の追従を許さないほどに。だが、その強さは目立ちすぎたんだ、、そしてその神の思惑に気づいた。ただ、彼女を殺すのには、時間を掛けなければならぬ、、その間に神に侵攻され、彼女が取られてしまう。

そして、ここに封印をした。何年後にこれが見つかるかはわからない、これを見つけた強き者彼女を頼む」

「なるほど」

「どうしますか？」

「これはここにおいていく、そしてユエには黙っておく」

「それが良いです」

「さ、寝るか」

「お休みなさい」

「おう」

※※※※※

ユエが仲間になってから、順調に降りていくことができているが少しいや、やばいぐらい困ったことがある

それは

「どうするか？」

「親玉をしばく」

「そうだな」

「お前らはおねんねしとけや！」

肉片となり散らばるがまだまだ魔物が近寄ってく

「ハジメ！本体は多分この先だ！」

「了解」

俺の考えでは おそらく本体がいるのは樹海を抜けた先、今通っている草むらの向こう側に見える迷宮の壁、その中央付近にある縦割れの洞窟らしき場所だ。

「ユエ、あんまり吸い過ぎるなよ。ていうか、そんなに魔力を消費してないだろ。というかハジメが貧血になるぞ」

「……不可抗力」

「ハハハ」

三人は縦穴に飛び込んだ

しばらくして、広間の中央までやってきたときにそれは起きた。

全方位から緑色のピンポン玉のようなものが無数に飛んできたのだ。

三人は一瞬で背中合わせになり、飛来する緑の球を迎撃する。

「……逃げて2人とも！」

「なっ!？」

「ちよ!？」

いつの間にかユエの手が2人にむいている、その手に風が集束する。

「ハジメは回避しといたほうがいいぞ」

「ルピは？」

「ん？俺か？BTの耐久テスト魔法ver」

「あ、はい（思考放棄）」

結果は無傷

そして、ユエを見ると、ユエの頭上にあるものを見て事態を把握する。そう、ユエの頭の上にも花が咲いていた。それも、ユエに合わせたのか？と言いたくなるぐらいよく似合う真っ赤な薔薇が。

アララウネやドリアド等という人間の女と植物が融合したような魔物がRPGにはよく出てくる。2人の前に現れた魔物は正しくそれだった。もつとも、神話では美しい女性の姿で敵対しなかったり大切にすれば幸運をもたらすなどという伝承もあるが、目の前のエセアララウネにはそんな印象皆無である。悔しそうな表情で歯を食いしばっているユエ。自分が足でまといなっていることが耐え難いのだろう。今も必死に抵抗しているはずだ。口は動くようで、謝罪しながらも引き結ばれた口元からは血が滴り落ちている。

鋭い犬歯が唇を傷つけているのだ。悔しいためか、呪縛を解くためか、あるいはその両方か。

ユエを盾にしながらエセアララウネは緑の球を二人に打ち込む。

がその玉は、届かない

「……私はいいから……殺って!」

「ハジメ狙い撃つてくれ」

「わかった」

バン!

「……ちよつとは悩んで欲しかった」

「俺が許可するから甘えてこい」

「……いいの?」

「程々ならな」

「ユエサン、ナンデスカソノシタナメズリハ」

「……覚悟♥」

「じゃ、頑張れよ」

明日から激化すると思うので気を引き締める

最奥のタイタン

真オルクス大迷宮100階層

「えーと、次が100階層だよね」

「おう」

「・・・なんか嫌な気がする」

「大丈夫です、生体反応はありません」

「そうか、BT」

と意気揚々に扉を開けると、碌な目に合わない転移の魔法陣があった

「お前ら離れろ！お前ら2人でこれに乗れ！これが最後の試練だと思う」

そこまで言い切ると視界が真っ白に染まった

※※※※

「BT 敵対反応及び生体反応は？」

「1つあります」

「具体的には？」

「この先にいます、しかも私と同じ感じがします」

「それって」

言い切る前に姿を現した、そうその姿は

「タイタン、、、」

銃火器を持っている上に、タイタン特有の一つ目間違いない

「搭乗者は？」

「いません」

「オートタイタンか」

オートタイタンとは、搭乗者がおらずAIが判断して行動するため、基本的には搭乗者つまりパイロットが最後に残した命令を遂行するだけの存在、最後の命令が終われば勝手に行動すると書かれていたが

「相手はやる気か」

「そのようです」

相手は銃口をこちらに向けている、「戦え」と言うことだろう

「やるぞー！」

「了解」

エクスペディションを構えて、発砲する

「どうだ？」

「警告！攻撃が来ます！」

「なっ」

相手が放ってきたのはグレネード、残留する炎をみる限り

「スコーチか」

スコーチとは、タイタンの中ではスコーチはかなりでかい方に位置する

武器がテルミッドグレネードを放ち、地面を燃やして自分のフィールドに持つていくと言う制圧型のタイタン

戦う場所にもよるが、ここは密閉している上に、かなり狭い（直径500メートルの円形でドーム状のフィールド）

「回避に専念する！」

「了解、相手が接近します」

スコーチは、炎のシールドを展開することが出来る。つまり相手は、シールドの炎による攻撃をしようとしていることがわかったが

（地面が炎塗れで逃げられない！）

相手は意味もなくグレネードを撃っていたのではなく、このためだけに撃っていた

「パイロット、地面の炎の中を走ることを推奨します」

「仕方ない」

B.Tの進言を聞き入れて炎を踏み抜いて、回避したが

「一部機能に被害が」

無傷で炎を突破できるわけもなく、多少の攻撃を受けてしまっている

「相手の弱点は？」

「相手の機能を全て潰すぐらいの攻撃だけです」

つまり弱点なしということですね

「じゃあ、反撃開始！」

「コア発動可能」

「サルヴオコア発動！」

サルヴオコアはミサイルをとにかく発射するコア、とある武器のコアなので、ロックオンもしていないので、真っ直ぐにしか飛ばないが、ここは狭い場所なので、真っ直ぐでも効果はあるため

「相手の行動が鈍くなっています」

「たたみかけるぞ！」

相手が回避しようとしているところにエクスペディションを構えておけば、相手に攻撃が出来ると思っていたのだが

「相手のコアが来ます！」

相手のコアが発動、サルヴオコアと相手のコアのダメージ交換をしてしまった

「ぐっ、」

「警告！警告！被害が甚大」

「どうするか」

「相手も限界のほずです、処刑攻撃をしてしましましょう」

「OK！」

相手に近づいて

「オラア」

相手に巴投げをかまして、転かしたら上からエクスペディション0距離射撃！

(これでくたばらなかつたら、俺が終わりだ)

その覚悟で行った攻撃その結果は

ドカン！

敵タイタンが爆発四散して終わった

「勝ったのか？」

「勝ちましたね、でも限界です」

後ろにある扉が開き、まるでこっちに来いと言わんばかりの感じをしている

「敵対反応及び生体反応は？」

「すいません。使えません」

「進むか」

B Tの歩行機能にまで被害が及び、足を引きずりながら進むと家があった、降りて確認しようと思い、降りると

ボタン

B Tが倒れた限界だったからだろう、修理しないといけないが、道具がない、家に入ろうとすると、後ろで扉が開いた

「ユエー！」

気絶したハジメを抱えていた

「・・・ハジメが大変だから手伝って」

「俺が家の中に入って敵がいなか確認する、待つといてくれ」

中に入ると、内装は綺麗だったそして敵はいないので、ユエがハジメを

抱えながら入ってくる。

「寝室に寝かせておくか、悪いがB Tの様子を見てくる」

「・・・わかった」

B Tはさつきと同じ体制だったが

「パイロット、すいません」

喋れるぐらいまで回復していた

「大丈夫か？」

「少しでも歩行機能と視覚機能が不安定になり、再起動の為倒れていました」

「歩けるか？」

「はい」

「とりあえずはそこで待機しといて、何かあれば呼ぶ」
「了解しました」

中に入るとユエに

「・・・来て」

と言われついていくと、精巧な魔法陣があった

「これは安全？」

「ん、大丈夫」

乗ってみると映像が映った

「試練を乗り越えよくたどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えればわかるかな？」

「あ？なんでお前生きてるの？」

「ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか・・・。メッセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。我々は反逆者であって反逆者ではないということ。」

語られる事実は、狂った神とその子孫達の戦いの物語であった。それぞれの種族が崇める神は同じで、神託による争いの日々。そんな無益な争いが何百年と続き、終止符を討たんとする者達が現れた。それが当時、“解放者”と呼ばれた集団だった。彼らには共通する繋がりがあり、全員が神代から続く神々の直系の子孫であったという事だ。解放者のリーダーである一人が偶然にも神々の真意を知ってしまい理解したのだ。人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたという事に反逆者という悪として扱われてしまった。解放者は守るべき人々と敵対する訳にもいかず、徐々に仲間が討たれてしまい、最後まで残ったのは中心の七人だけだった。そして彼等は何時の日か来たる真の解放者達へ試練を残し、自分達の力を譲り、いつの日か神の遊戯を終わらせる者が現れることを願った

「成る程、胸糞悪い話やな」

君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかは分からない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。我々が何のために立ち上がったのか・・・君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満了するためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

長い話が終わり、オスカーは穏やかに微笑むと同時に記録映像はスッと消えた。そして魔方陣の上に立っているの脳裏に何かが入り込んでくる。ズキズキと痛むが、それがとある魔法を刷り込んでいたためと理解できたので大人しく耐えて、痛みも収まり魔法陣の光も収まる

「これ何？」

「・・・わからない、ハジメが起きるまで待機しとこ」

「そうするか」

ハジメが起きるまで待機か

奈落の底で

ハジメが目を覚まして例の魔法陣に連れて行っても何も変わりはないなかつた

俺はとりあえずこの隠れ家を散策していたら、本がある部屋があった

何故かここに入らないといけないような気がした。

とりあえず入って本を取って読んでみると大体が、オスカーの日記だった。ただ1冊だけ違う本があった、手記のような物で著者の名前が書いてある、それを見て思わず声が出た

「;; ジャック・クーパー」

と書かれていた;;、とりあえず読むか

※※※※

私は未来の地球で戦争を行なっていた。だがとある日俺は死んだそれは相棒のBT7274と共に自決をし惑星ハーモニーを救った。

死んだ筈の俺とBTはこの世界に来ていた、転生したというのかという疑問が尽きなかったが、聖教会から俺達を戦争に強制参加するようという通達があった。俺達の戦争は土地を守る戦争だったが、この世界の戦争宗教の違いというものだった。

ハッキリ言ってバカバカしいものだ俺達の世界でも宗教は沢山あっただが、この世界はそれがダメらしいだから俺は戦争の参加を拒否した。だが俺達は参加参加と煩いのでオルクス大迷宮に潜った。俺はその前に王室のとある一室に俺のヘルメットとジャンプキツトを置いていった

もう俺は長くはないことぐらいはわかった道を歩けば石を投げられることぐらいはわかるし人々に殺されるかもしれない。だから俺はこの大迷宮に潜りここを死に場所として選んだだが、俺は結果的に真の大迷宮を突破してこの解放者に出会い真実を教えてもらった。

正直腹が立ったが俺にできることは何もなかったがやれることはあったせめてもの情報をヘルメットと端末に送り込もうとBTを使い送り込んだ俺の世界の銃や移動式のアイテムましてやBTの情報まで送り込んだ。

これは博打にも程があった。これを見つけたのが良い奴ならばよかったもちろんこれを読んでいる君が持っていたら良いが悪い奴らに渡つたらと思うと気が気じゃ無くなるような気分になった。

俺はクズのエヒトに挑もうと思う迷宮を巡り神代魔法を手に入れた

新たな武器などの設計図は随時端末に送り込んでいこうと思いきりの武器を送ろうと思う

※※※※

遂に全ての迷宮を巡り帰ってきた

解放者は死んでいた、簡易的ではあるが墓を建てた

解放者には悪いことをした

しかし驚くべきことがわかった

この世界において銃という存在がないことだ、つまりはエヒトに対して俺は大いに優位に立てているのではという仮説だ。

旅の道中神の使徒という訳の分からない奴らに襲われたが銃を発砲してやると皆驚いた顔をしながら死んでいった。このことから俺は優位に立ててると思っただが俺は常に最新バージョンへとアップデートを行なってきた俺の手には最新バージョンの情報があがるが、恐らくこれが最後の情報だろう、

俺の書記はここまでであろう死ぬか生きるかも分からない

戦争中は常に劣勢だった何故かって？

少し俺の過去について話そう

※※※※

俺は昔の戦争でいうと歩兵だった

腕の立つな

しかし敵地に突撃すると味方は全滅、；そこでは俺の先生とも言える人が死に今の相棒が、横に立っていたここから先は俺はひたすらに走った。

敵の幹部を3人も倒したが、所詮歩兵だった俺からすればステツプを踏まずに駆け上がった、騎馬兵にしなければならないつまりは、臨時パイロットだったのだが、相棒は俺がいいと言ってくれた俺は嬉しかった軍のお偉いさんにも説得してくれた

心機一転俺の最新の任務は故郷を守ることだ
いささかスケールが大きくないか？

そんなことはどうでもいい最終的に行き着いた方法は俺と相棒が故郷を破壊する爆弾の中心で自決することだった

俺1人の命で大量の命を救えるのだ戦争なのだから俺の命1つは安い物だそして死んだそしてここに来た

※※※※

これが俺の過去だ

どうだかつこいいだろう

まあこれを読んで君がどうしようかは自由だ

1つだけ先輩パイロットからのアドバイスだ

真のパイロットはタイタンとの絆ということだ

※※※※

クーパーは歴史から抹消されているのか？何故？普通ならば王国の歴史の中で書いてあると思う、また調べておこう
ハジメに覚悟を聞かないと

「ハジメちよつといいか？」

「?いいけど」

「単刀直入に聞くんけど人を殺す覚悟はあるか？」

「!？」

「驚いているけど、仕方ないぞ」

パイロットは大峡谷を走る

ハジメがユエに（性的に）食べられてから少し時が経った頃
クーパーの本の最後に『宝物庫』が挟まっていることに気がついた
ので、これは俺のものになった

これが便利過ぎる、マガジンや別の銃器も持てる。それに、BTも
運べ、自分から1mの範囲に出せるのでBTの武器も瞬時に切り替え
れることが出来ると言った物

ハジメは色々な武器を作り出し

ユエはハジメが作り出した神結晶シリーズのアクセサリを

まあそれは俺が一手間掛けた物だけだ

俺は、『ボセックボウ』『CARサブマシンガン』『ロングボウ』

ボセックボウはクロスボウ状のもので、火薬を使わずに撃てて音が
ほぼ無いに等しい、後は火薬などが使えない状況にも対応できるよう
にするためにと

BTの新ロードアウト『イスナイン』

端末にあったロードアウト『リージョン』の兵装プレデターキャノ
ン

を両腕の前腕部にベルトで固定した物で、所々改造を施してある
が、リロード時間と移動時間が遅いと言ったデメリットがある。

コアは『スマートコア2』敵をロックオンしてプレデターキャノン
の弾が誘導する。効果時間は12秒。

発動中は射撃とパワーショットの威力が20%上昇し、更に弾数が
無限になる。ただしリロード中は起動できないため、リロードをして
から発動しないといけない

攻撃アビリティとして『パワーショット』を採用

短い溜めのあとに強力な攻撃を放つ

簡単に言う必要は強力な散弾（風の広範囲攻撃）を放つ

防御アビリティとして『ガンシールド』を採用

プレデターキャノンから前方シールドを展開する。最大展開時間
は6秒。展開時間終了から再使用までのクールタイムは8秒。発動

中は移動時間が遅くなる

後、秘密兵器の完成度は20%

各個人のステータス（ユエはステータスプレートを持っていないため測定不能）

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???

天職：錬成師

筋力：10950

体力：13190

耐性：10670

敏捷：13450

魔力：14780

魔耐：14780

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」「＋複製錬成」「＋圧縮錬成」「＋肉体錬成」「＋地形錬成」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「魔力操作」「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」「＋瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「＋特定感知」・魔力感知「＋特定感知」・熱源感知「＋特定感知」・気配遮断「＋幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「＋体力」「＋治療力」・限界突破・生成魔法・言語理解

ルピ 17歳 男 レベル：???

転職 パイロット

筋力Fatal error

体力Fatal error

耐性Fatal error

俊敏Fatal error

魔力Fatal error

魔耐Fatal error

技能Fatal error

銃士　B T操作・壁走り・2段ジャンプ・B T製造・銃製造・言語理解

魔力銃弾製造「+即時リロード」「+自動弾込め」・鍛冶・錬成
胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

となっていた

ハジメはまだ数値化されているが、俺のステータスはもはや使い物にならない、即時リロードは銃に空のマガジンが付いている時に発動できる。その空のマガジンに直接弾を作るという、反則もいいところの技能

自動弾込めは、勝手にマガジンに弾が込められるだけ

こつちもまあまあ優秀

※※※※

「俺達は今日ここを発つ」

「長く苦しい戦いだっただけ……」

「ん」

「俺達の武器や力は、はつきり言って異端だ。教会の奴らや各国の人々が黙って見る事はほぼない」

「特に僕とルピの作った物はな……」

「それを寄越せとか言われたり。戦争に強制参加させられるかも知れない、それだけじゃなく、教会や国だけでなくこの世界を支配する邪神とも敵対することになる。しくじれば解放者同様に世界を敵に回す。命の安全は保証できない」

「今更だな、俺達はそのために力をつけた」

「地球に帰るには邪神との敵対は避けて通れないからね」

「よし……行くよ、みんな！」

「おう！」

俺達は魔法陣の光に吞まれ、隠れ家から転移した。

※※※ルピside↓三人称

眩しい光が収まり、目を開くとそこは――

「洞窟……」

ハジメが期待していた光景と違い落ち込んだ声を漏らした。

「秘密の通路……隠すのが普通……」

「まあ、転移で洞窟から脱出するのは私達の世界だとお決まりだったから、ハジメが期待しちゃうのもわかる」

いくつかのトラップがあったものの、オスカーの指輪に反応してトラップは解除されていたので、さほど時間もかからず外に出ることができた。

数ヶ月ぶり、ユエにとっては300年ぶりの太陽の光を見る。

「やっとなに………出たぞお………!!」

「ん………!」

「お二人さん周りを見てはしゃいでくれ」

周りを見渡す2人、そこには魔物の死体の上に座るルピがいた

「どつかのヤンキーじゃないんだし、そこに座るのはやめといた方がいいよ、臭いし」

「……あれ人間?」

「おいおい人間ではあるぞ、まあ人外かもしれんがな

とりあえず、ハジメバイク出してくれ

多分ここライセンス大峽谷だ」

ライセンス大峽谷は基本的に東西に真っ直ぐ伸びた断崖だ。そのため脇道などはほとんどなく道なりに進めば迷うことなく樹海に到着する。ハジメもユエも、迷う心配が無いので、迷宮への入りらしき場所がないか注意しつつ、軽快に魔力駆動二輪を走らせていく。車体底部の錬成機構が谷底の悪路を整地しながら進むので実に快適だ。

「そっういやユエ……魔法使えるのか?」

「……ざつと10倍」

「とりあえずユエはここでは護身用程度に留めておいた方がいいよ」
「でも、」

「別に大丈夫、こつちにはバグキャラがいるし、僕もいるしね」
「(・ω・)」

ちなみに隠れ家で模擬戦をやった3人だが、2人がかりでも勝てなかった

しばらくして

「!音がする、さきに行く」

壁を走りながら行くルピを見た2人は

「化け物」

バイクがそこに着くと困った顔のルピとウサミミを生やした女性
がいた

「わたしは兎人族ハウリアの1人、シア・ハウリアと言います!それと
わたしの家族も助けてください!」

この兎人族の少女シア・ハウリアは凶々しくそして、凶太い精神を
持っていたのだった。

治癒師と侍の苦難

ルピー一行が迷宮を脱出した時より時は遡る

勇者一行は王国に帰っていた。勇者の仲間2人が死亡、そしてそれは仲間の醜い理由で、殺されたことを報告しないといけないが、それは表向きの理由だ、クラスメイトの二代女神は気絶、その他も戦いを拒むようになった。

「目の前で人が死ぬ」これが心にくきたらしく、メンタルケアをしないといけないと判断した、メルドは速馬車で王国に帰っていた

※※※※※

「う、うーん、はあはあはあ」

「起きましたか八重樫様」

「え、ええ」

侍女が水を持って来てくれた、それを飲み干して聞いてみた

「ルピーは？ハジメ君は？」

「・・・」

「黙ったないで答えて貰っても？」

「・・・メルド団長が話すと」

「・・・わかったわ」

※※※※※

「メルドさん！ルピーは？ハジメ君は？」

「おお、起きたか」

「それより2人は？」

「落ち着いて聞いてくれ」

そこまで言われて自分がかかなり気持ちが悪まっていたことに気がついた

「2人は死んだ」

「う、嘘ですよ、流石にメルドさんでも冗談が過ぎますよ」

「死んだ・・・国から発表された」

「そ、そんな」

目から大粒の涙が溢れてくる、そしてもう一つの事を思い出した

「檜山は？罰則は受けたんですよね」

「勘がいいのか・・・それについても話すが、彼は無罪だ」
「は？」

思わず声が出てしまった

「お前が寝ている間にこんな事があった」

そう言い出して来た

※※※※

『しかし落ちたのが”無能”と、それに付き従う化け物だけで良かった』

『そうですな。大きな戦力低下もせずに済んだのが幸いだ』

吐き捨てられるそれらはメルドにとって不愉快そのもの。だが此処は命の価値が低い異世界、弱肉強食の世界なのだ。・・・彼等を罵倒される事で手を出そうと我慢していると、天之河が激しく抗議した事で国王や教会も悪い印象を持たれてはマズイと判断したのか、ハジメを罵った人物達は処分を受けたらしい

逆に天之河は無能と化け物にも心を砕く優しい勇者であると噂が広まり、結局天之河の株が上がっただけで、ハジメとルピは勇者の手を煩わせただけの無能であるという評価は覆らなかった。天之河がその事を全くもって理解していないのはお約束

あの時、自分達を救ったのは紛れもなく勇者も歯が立たなかった化け物をたった二人で食い止め続けたハジメとルピだというのに。そんな彼を死に追いやったのは檜山——2人の言を信じるならばそうだろう。だが天之河は檜山の犯した罪を許してしまった

「檜山の攻撃が南雲に当たってしまったのは事実だ。だけどそれはワザとじゃ無い。皆だってそうだろう？必死になって生き残る為に放つ魔法を他人に向ける余裕は無い」

持ち前のカリスマで徐々に周囲を納得させて行き、遂には檜山が皆の前で謝罪する事でこの出来事は葬られる事になったのだ。しかし一部クラスメイトだけはそれを否定して「牢屋に入れておけ」と言い張るが天之河がそれを却下

「皆で力を合わせなければこの世界の人達を救う事は出来無い！あの

攻撃はワザとじゃ無かったんだ。それを許して過去を乗り越えなきゃ死んだ南雲も報われない！」

等と言い出す始末。——故に、諦めたのだ。本当に何故こうなったのかと苛立ちが募る。その現実を受け入れたく無く、殆どの時間を八重樫と白崎が目覚ますまで見続けるといった形になったのだ

※※※※

「な、何よそれ！」

「すまん、俺の力及ばず」

確かにメルドの発言より、勇者である天之川の発言が優先されるのは当然のことだった。しかし、ベヒモスにも単騎で勝てるような人物を化け物と言うのか、と思うところもある。しかしその考えが浮かばないのは、勇者が一番と言う考えがあるためである。

「それとあの奇妙な坊主からだ」

「？」

渡された箱には、手裏剣のような物と手紙が入っていた

『この手紙を読んでるっていうことは、雫の言う通りに何かあったんだ

ろう。

この手裏剣は《アークスター》という爆弾だ

投げた対象に刺さり爆発するという物、壁でも床でも可能だ

こいつを使って身を守ってくれ

追記

多分これを、見ているのは雫か香織かハジメだけだろう

正しく使ってくれよ

ピ』

ル

置き手紙を読み終わると同時に雫は思った

(彼は自分のことよりも私たちのことを心配すんなんて)

「ありがとうございます、香織の所に行つて来ます」

「おう、起きたら頼めるか？」

「はい」

「頼んだ」

※※※※

八重樫が起きてから3日後

「あなたが知ったら・・・怒るのでしょね？」

あの日から一度も目を覚ましていない白崎の手を取ってそう呟く八重樫。白崎の様子を見た医者からは精神的なショックが大きく心を守る為に、深い眠りに付いているのではないか？との事。詰まるところ、時が経てば自然と目を覚ますと言っているのだ

八重樫は白崎の手を握り「どうかこれ以上、私の優しい親友を傷つけないで下さい」と祈っていると不意に、握り締めた香織の手がピクツと動いた

「!?香織！聞こえる!?香織！」

「・・・雫ちゃん？」

ゆつくりと開かれ、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡していたのだが、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす雫に焦点を合わせた

「ええそうよ。私よ。香織、体はどう？違和感はない？」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど・・・寝てたからだろうし・・・」

「そうね、もう五日も眠っていたのだから・・・怠くもなるわ」

「五日？・・・それで南雲くんは・・・南雲くんは!?!」

徐々に覚醒しその時の事を思い出して行った白崎は八重樫に問い詰める

「ツ・・・それは」

八重樫の言葉が詰まる。そして思い出す記憶が現実の物だと悟るが白崎自身到底受け入れる事は出来無い

「・・・嘘だよ、ね。そうでしょ？雫ちゃん。私が気絶した後、南雲くんも助かったんだよね？ね、ね？そうでしょ？此処はお城の部屋だし皆で帰ってきたんだよね？南雲くんは・・・訓練かな？訓練所にいるよね？うん・・・私、ちよつと行ってくるね。南雲くんにお礼言わないとだから、離して？雫ちゃん」

「・・・香織。分かっているでしょう？・・・此処に彼は居ないわ」

「やめて・・・」

「香織の覚えている通りよ」

「やめてよ・・・」

「彼等は・・・」

「嫌！やめてよ・・・やめてったら！」

「香織！彼等は橋の崩落に巻き込まれて落ちたのよ！」

「違う！死んでなんか無い！絶対、そんな事無い！」

「落ち着きなさい香織！何も私は死んだとは言っていないでしょう！殆どの人達は死亡扱いをしているけれど、私はそう思わないわ・・・実はルピ君が私達を投げてからハジメ君を抱えて落ちたのよ。分かる？」

白崎をゆつくりと落ち着かせようと抱きしめ背中を擦る

「私達は弱い。それに比べルピ君は私達より倍・・・いえ、何十倍も強いわ」

「そう・・・なの？」

手に持つアークスターを見せる

「そんな彼が死ぬなんて有り得ないわ」

先程まで震えていた白崎も落ち着きを取り戻したのかそれは治まり、ゆつくり・・・ゆつくりと現実を受け入れて行く

「・・・雫ちゃん。南雲くんは此処には居ないんだね・・・」

「そうよ」

「あの時、南雲くん達に魔法を当てたのは・・・誰なの？」

八重樫は白崎がどういった行動に出るのか容易に想像が付いた。しかしそれを実行させる訳にはいかない

「知っているわ。だけど報復行為をしては駄目よ」

「何で？」

「魔法を当てた人・・・檜山を光輝が許しちやったのよ。周りは「地球に帰るまで牢屋に入れておけ」と、何度も何度も提案したけれど全て却下されたわ。勇者の光輝が否定したら周囲の人達もそれに賛同、本当に何でこうなったのでしょうかね・・・」

「そうなんだ」

「もしも彼等が生きていたら、檜山は死ぬわ。ルピ君は100%殺すと思うの。私の勘だけど」

「そっか・・・それだったらハジメ君達に任せようかな」

問題ばかり押し寄せてくるそれに疲れ果てている八重樫、世界が考えを否定していると思う程立ち回れない白崎。この二人はしばらくの間沈黙してこれからの指針を決める

「雫ちゃん、私は信じないよ。南雲くん達は生きてる。死んだなんて信じない」

「そうね・・・」

「あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって。でもね、確認した訳じゃないし可能性はパーセントより低いけど、確認していないたらゼロじゃない。私はあんな状況でも皆を守れるくらい強くなって南雲くんの事を確かめる・・・雫ちゃん」

「なあに？」

「私に力を貸してください」

今の白崎は絶望による狂気等の危険な目をしておらず、唯真っ直ぐに、自身の答えを探し納得するまで諦めないという力強い意思が宿っていた。こうなった白崎はテコでも動かない、家族も手を焼く頑固者になるのだ

そしてこれは確実に幼馴染である天之河や坂上も含めて殆ど人間が白崎の考えを正そうとするだろう。だからこそ八重樫の答えは決まっていた

「もちろんいいわよ。香織が納得するまでとことん付き合うわ」

「雫ちゃんー!」

白崎は八重樫に抱きつき「ありがとう!」と何度も礼をいう。「礼なんて不要よ、親友でしょ?」と2人の苦難は始まったばかり

ハルツイナ樹海とバグウサギ
帝国兵は外道だど？ならば慈悲はない殺せ！

「わたしは兎人族ハウリアの一人、シア・ハウリアと言います！それとわたしの家族も助けてください！」

「「は？」「」」

少し気を落ち着けて

「ちよつと待つといてくれるか？」

「あ、はい」

集合して打ち合わせをする

「おい、あれどう思う？」

「ここにいる兎人族と言うのがなー」

「・・・悪ウサギ？」

「とりあえず相手に何があったかを聞くのが一番か」

「そうだね」

「んっ」

俺は待っている兎人族に話しかける

「おい、あんた何があつてここにいるんだ？」

「あ、はい説明しますと」

————— 割愛 —————

シアの説明を要約すると

兎人族・・・ハウリアと呼ばれる者達の中から、異常な女の子が生まれた。基本的に濃紺の髪をしているハウリアだが、その子の髪は青みがかつた白髪。亜人族には無いはずの魔力まで有しており、直接魔力を操り、とある固有魔法まで使えたのだ。当時の一族は大混乱で、必ず迫害対象なってしまう。しかし、ハウリアは百数十人全員を一つの家族と称する種族なので、ハウリア族は女の子を見捨てるという選択肢を持たなかった

故に、ハウリア族は女の子を隠しながら十六年もの間ひっそりと育

ててきた。だが、先日とうとう彼女の存在がばれてしまった為、ハウリア族は追放処分となってしまうた。それから、魔物、帝国兵から逃げる日々を送り、大多数のハウリアが帝国兵に捕まってしまうたとき

とても不運な者達だ。そう感じたルピ達

「・・・気がつけば、六十人はいた家族も、今は四十人程しかいません。このままでは全滅です。どうか助けて下さい！」

最初の残念な感じを見せず、悲痛な表情で懇願するシア。どうやら、シアは、ユエやハジメと同じ、この世界の例外というヤツらしい。特に、ユエと同じ、先祖返りと言うやつなのだろう。話を聞き終った3人

「すまないが今の言葉を吟味させてくれ」

「え？」

「大丈夫、信用できるならその依頼引き受ける

勿論それ相応の報酬は出してもらおうけど」

「わかりました」

そしてもう一度集合する3人

「これどうするか？」

「とりあえず僕の個人での意見受けた方がいいと思う」

「・・・私もそう思う」

「それはどういうメリットがあつて」

「樹海は亜人族じゃないと動けない、なら助けてって言ってるならそれに乗る方がいいからね」

樹海は特殊な霧が充満しており、方向感覚が狂う。その中で普通に動けるのが亜人族と王国の本に書いてあつたような気がする。なら答えは出た

「おい、あんたその依頼引き受けてやるよ。報酬は樹海の家内だ

いいか？」

「えっ？そんなのでいいんですか」

「なんだ不満か？」

「いえいえとんでもない、てつきり奴隷商人に売り飛ばすかと思いま

した」

「流石にそこまでではないぞ」

「とりあえず、先に進みましょう！私の家族が魔物に襲われているかもしれないので」

「そう言えば言い忘れてた俺はルピだ。気軽に読んでくれ、おーい2人とも、」

2人はイチヤイチャしていた……………

「戻ってこいバカップル！」

2人を叱り飛ばし、シアをサイドカーに乗せ、先に進みながら2人に自己紹介させる

※※※※

「目標発見！先に行く！」

バイクから飛び降り走っていく

「あれは人間ですか？」

「うーん人間の皮を被った化け物とだけ言っておくよ」

首を縦に振るユエ

それを見て少し悲しくなった

少ししてワイバーン擬きに突進しとりあえず蹴散らす、フラットラインで撃ち落とし、とどめまでしつかり刺す

しかしこの戦闘で思ったことはある、中遠距離対応武器を作っていないことに気がついた今度作っておこう

「あなた様は？」

おそらく長らしき人が話しかけてくる

「みんな、助けを呼んできましたよぉ〜！」

「「「「「「シア!」「」「」「」」」」」」

「ハジメ・ユエ状況説明するから降りてくれ」

「「わかった」」

「俺達はシアの依頼を引き受けてお前達を助けた。報酬はお前達の命

——それに伴い、樹海の案内という事になっている」

「私は、カム。シアの父にしてハウリアの族長をしております。この度はシアのみならず我が一族の窮地をお助け頂き、何とお礼を言えば

いいか。しかも、脱出まで助力くださるとは・・・父として、族長として深く感謝致します」

「それより亜人族は人間にいい感情は抱いていないよね？なんですんなり受け入れているの？」

「シアが信頼する相手です。ならば我らも信頼しなくてどうします。我らは家族なのですから・・・」

「いい家族だな、シア」

「はい、自慢の家族です！」

とドヤつて来た

「とりあえず樹海に向かうぞー」

※※※※

溪谷の出口に差し掛かった、尚道中絡んできた魔物は土の上で寝ている

階段を上りきったハジメ達の姿を確認。案の定帝国兵に絡まれていたので気配を溶け込ませたまま帝国兵達の背後に移動し終え、話の内容を聞き取る

「おいおい、マジかよ。生き残ってやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残ってただけなんだがなあこりゃあ、いい土産ができそうだ」

「小隊長！ 白髪の兎人もいますよ！隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りも別にいいが、あれは絶対殺すなよ？」

「小隊長お、女も結構いますし、ちよつとくらい味見してもいいつすよねえ？こちとら、何もないとこで三日も待たされたんだ。役得の一つや二つ大目に見てくださいいよお」

「つたく。全部はやめとけ。二、三人なら好きにしろ」

弱肉強食の国家はゲスだな。精神が腐りきっています。それよりこいつらは個人的に殺意が湧く

「ちよつ!?」一番の上玉じゃないつすか！小隊長、ずるいですよお」

「お前らにも味見させてやるから一番は我慢しろよ？」

「ひゃっほく、流石、小隊長！話がわかる！」

「ん？坊主お前奴隷商人か？その兎人族は国で引き取るから置いていけ」

頭に来た……………全員殺す！

「断ります」

「……………今、何て言った？」

「断ると言います。こいつらは今は僕のもの。あなたたちには一人として渡すつもりはない。諦めてさっさと国に帰ることをオススメします」

「……………小僧、口の利き方には気をつけろ。俺達が誰かわからないほど頭が悪いのか？」

「十全に理解しています。あなたたちに頭が悪いとは誰も言われたくありません」

ハジメナイス！俺も同意

こつちの視点からすれば、滑稽にも程がある。

すると、小隊長の視線がこつちに……………

というより、ユエに向いて下品な笑みを浮かべた。

「ああくなるほど、よおくくわかった。てめえが唯の世間知らずな糞ガキだつてことがな。ちよいと世の中の厳しさつてヤツを教えてやる。くつくつく、そつちの嬢ちゃんたちはえらい別嬪じゃねえか。てめえの四肢を切り落とした後、目の前で犯して、奴隷商に売っぱらつてや」

言い終わる前に頭と胴体に分けた

ハジメの恋人を犯すだど？そんな奴らに慈悲はない

「殺し尽くしてやるー」

フラットラインで頭を撃ち抜く。ハジメも撃っている。

陣形を整えようとしているが、甘い

CARを宝物庫から取り出し蜂の巣にする。

そして生き残っているのは唯一人となった

「捕まえていたハウリア達は怎么样了？情報を吐け！」

「た、助けてくれたら話す！だから命だけは取らないでくれ！」

「3ー2ー1」

「多分、全部移送済みだと思う。人数は絞ったから・・・」

有無を言わさず情報を吐かせるのが一番効率がいい、というかこんなゲスを生かすのは嫌なので

「人生最後の情報をありがとう。いい夢見ろよ」

パン！

薬莢が地面に転がる

恐怖から俺に対して負の感情を露わにしているハウリア達にユエが一言

「・・・守られているだけのあなた達がそんな目をルピに向けるのはお門違い」

事実を言われてハウリア達はバツ悪そうな表情をしている

「ふむ、ルピ殿、申し訳ない。貴女に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんのでな・・・少々、驚いただけなのだ」

「構わん別に、先に行くぞー」

フェアベルゲンでの一悶着

帝国兵を皆殺しした後、ハルツィナ樹海に入ろうとしている頃
ハジメside

帝国兵を自らの手で殺しても不思議と罪悪感が湧かなかつた
ユエの事を侮辱されたから？

それとも自分達の護衛対象を襲おうとしたから？

わからない、でも殺人に対して特に何も抱かないのはおかしいと思
う自分がいる。何故？この課題は永遠に僕の心での自問自答しない
といけないと思う

「…大丈夫？」

暗い顔になつてるからかユエに心配された、男として恥ずかしいな
「うん、大丈夫だよ」

「ハジメ、さっきの反動がくるなら俺が汚れ仕事を引き受けるぞ」

「大丈夫、自分が決めた事だしね」

「きつくなつたら言えよ」

僕の周りは素晴らしい人だらけだ。僕も追い付かないと

ハジメside↓三人称

ハルツィナ樹海が見え始めた頃

「あの、あの！ルピさん達の事、教えてくれませんか？」

「俺達の事は説明しただろう？」

「いえ、能力とかそういうことではなくて、何故、奈落？という場所に
いたのかとか、旅の目的って何なのかとか、今まで何をしていたのか
とか、お二人自身の事が知りたいです」

「一応聞いておくが、どうするつもりだ？」

「どうするとうわけではなく、ただ知りたいだけです。…私、こ
の体質のせいで家族には沢山迷惑をかけました。小さい時はそれが
すごく嫌で…もちろん、皆はそんな事ないって言ってくれました
し、今は、自分を嫌ってはいませんが…それでも、やっぱり、こ
の世界のはみだし者のような気がして…だから、私——」

「ああ、同族みたいで嬉しいって事か。浮いた存在で、周りに迷惑を掛

けたら、という事ということか」

「うう・・・そうです。ルピさんの言う通りですう」

「別に話しても良いぞ。特段隠す事でも無いからな」

ハジメ達が召喚までに体験した経緯とユエがどうして封印されていたのか、全てを語り始めた結果――

「うえ、ぐすつ・・・ひどい、ひどすぎますうう、ハジメさんもルピさんもユエさんもがわいぞうでぶぎやあ!?あ、はい・・・ルピさんも含みますです。そ、それ比べたら、私はなんでめぐまれて・・・ううう、自分がなざけないですう」

「ハジメさん!ルピさん!ユエさん!私、決めました!三人の旅に同行していきます!これからは、このシア・ハウリアが陰に日向に皆様を助けて差し上げます!遠慮なんて必要ありませんよ。私達は四人の仲間。共に苦難を乗り越え、望みを果たしましょう!」

「やめとけ命が幾つあっても足りなかなるぞ、これ」

「・・・え?」

「いやいや、ルピは死なないでしょ」

「:化け物は眠らない」

「お前ら、好き放題言いやがって!蜂の巣にしてくれるわ!」

「!」

その時二人は思い出した。ルピを怒らせるとやばいと言うことを

5分後

「ふースツキリした」

「体のあちこちが痛いよ」

「:体術は卑怯」

「あ?」

「なんでもありません」

「で、話が逸れたなああなたは素晴らしい家族も居る。何故そこまでして着いてこようとしてるんだ?」

「そ、それは」

「まあ、本気で着いて来たかったらユエかハジメに傷一つでもつけたら考える」

「本当ですか？」

「ああ、考えていけるなら連れて行く」

(二人は奈落の魔物を簡単に殺せるぐらい強い、それに傷一つつける
と言うことはぶっ飛んだウサギということになる)

そう言う魂胆があつた

※※※※

着いてくるなら実力を示せと宣告を告げてしばらくすると、一行は
ハルツィナ樹海と平原の境界に到着した。樹海の外から見ると、た
だの鬱蒼とした森にしか見えないのだが、一度中に入ると直ぐさま霧
に覆われるらしい

「それでは、ハジメ殿、ルピ殿、ユエ殿。中に入ったら決して我らから
離れないで下さい。皆様を中心にして進みますが、万一はぐれると厄
介ですからな。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのです
な？」

「ああ、聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係してそうだから
な」

ルピ達はこのハルツィナ樹海そのものが迷宮ではないか？と考え
ていたのだが、冷静になって考えれば違う事に気が付いた。もしそう
であるならば、奈落の底の魔物と同レベルの魔物が彷徨っている魔境
ということになり、とても亜人達が住める場所ではなくなってしまう
からだ。そしてオルクス迷宮と同様に、真の入り口が有るのではない
か？もしそうであるなら、カムから聞いた”大樹”が怪しいと踏んだ
カムは、ハジメの言葉に頷くと、周囲の兎人族に合図をしてハジメ
達の周りを固めた

「ルピ殿、出来る限り気配は消してもらえますかな。大樹は、神聖な場
所とされておりますから、あまり近づくものはおりませんが、特別禁
止されているわけでもないのです、フェアベルゲンや、他の集落の者達
と遭遇してしまうかもしれません。我々は、お尋ね者なので見つかる
と厄介です」

「わかりました。僕達もある程度なら、隠密行動はできるから大丈夫
です。」

ハジメは気配遮断スキルを、ユエは奈落で培った方法で気配を薄く、ルピは気配を消し音も消し感知系統にも引つかからないぐらい気配を溶け込ませる

「ツ!?これは、また・・・ハジメ殿、出来ればユエ殿くらいにしてもらえますかな?そしてルピ殿は何処に?」

「ん?ここだが」

「化け物」

「いやいや、あれぐらいできるだろ」

「普通は出来ないんです。貴方が異常なんです。」

と投げやり気味に言うハジメ

「…技能使った?」

「ああ、併用して使ってるな。後単純に自分でも消してる」

二人は天を仰いだ

「はい、結構です。さっきのレベルで気配を殺されては、我々でも見失いかねませんからな。いや、全く、流石ですな!」

身体スペックが低い代わりに聴力等の索敵関連に秀でているが、ハジメやユエのレベルは達人級。ルピに関しては、影が薄いクラスメイトの遠藤よりも上であると言える。

カムの号令と共に準備を整えた一行は、カムとシアを先頭に樹海へと踏み込んだ

※※※※

魔物が次々に襲ってくるが、大体は襲われる前に死んでいる

理由としては気配感知に入った魔物は、頭に風穴を開けられ殺される

尚使っている武器はボセックボウ、音もなく殺される暗殺武器となっている。クロスボウ状の形をしているため、最大3本の矢を同時に発射することができると言ったもの。

複数の気配を感じ取った少し後、今までにない無数の気配に囲まれてハジメ達は歩みを止める。数も殺気も、連携の練度も、今までの魔物とは比べ物にならない。カム達は忙しなくウサミミを動かし索敵

をしている。ガサガサと草を掻き分けて出て来た者達

「お前達・・・何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の亜人だった。しかも周囲に数十人配置しており、殺気を滾らせながら包囲している

「あ、あの私達は・・・」

「白い髪の兎人族だど？・・・貴様ら・・・報告のあったハウリア族か：亜人族の面汚し共め！ 長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！ 反逆罪だ！ もはや弁明など聞く必要もない！ 全員この場で処刑する！ 総員かッ!？」

音もなく、亜人の頭に矢が刺さる。

「おいおい、何あんたらうちの護衛対象襲おうとしたんだ。もし襲うって言うなら殺す」

ボセックボウは1回撃つごとにリロードを挟まないといけない。そのメカニズムがわかれば、怖くはないが亜人は音もなく発射された矢に恐れたようだ。

「な、なっ・・・詠唱がっ・・・」

詠唱の声も無く攻撃された事実には驚愕を露わにする者達。不意にルピはボセックボウを向けた。その先に居るのは隠れた亜人族、虎の亜人の腹心の部下がいる場所だった

「殺るといふのなら容赦はしない。約束が果たされるまで、こいつらの命は俺が保障しているからな・・・ただの一人でも生き残れるなどと思うなよ」

(冗談だろ！こんな、こんなものが人間だというのか！まるつきり化物じゃないか！)

「俺たちは大樹に向かいたいんだ。手荒な真似をさせないでくれ」

てつきり亜人を奴隷にするため等という自分達を害する目的なのかと思っていいたら、神聖視はされているものの大して重要視はされていない”大樹”が目的と言われ若干困惑する。”大樹”は、亜人達にしてみれば樹海の名所のような場所に過ぎないのだ

「俺たち三人は七大迷宮の攻略を目指して旅をしていてな、本当の大迷宮への入口は大樹だと想定して動いているんだ」

「本当の迷宮？何を言っている？七大迷宮とは、この樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進む事も帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「それはおかしいんですよ」

「ああ、この樹海にいる魔物達は酷く弱いからだ」

「弱い？」

「そうなんです。大迷宮の魔物は、どいつもこいつも化物揃いで、少なくともオルクス大迷宮の奈落はそうでした。」

「大迷宮というのは、」解放者達が残した試練なんだ。亜人族は簡単に深部へ行けるんだろ？それじゃあ、試練になってない。だから、樹海自体が大迷宮ってのはおかしいんだよ」

「……」

亜人は今の言葉を吟味する

「……お前達が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

その言葉に、動揺する部下。樹海の中で、侵入して来た人間族を見逃すということが異例だからだろうと直ぐに理解出来た

「周りが動揺しておりますが、本当に宜しいのですか？」

「一警備隊長の私如きが独断で下していい判断では無い。だが、本国に指示を仰ぐ。お前達の話も、長老方なら知っている方もがおられるかもしれない。お前達に、本当に含む所が無いというのなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」

「さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろよ？」

「無論だ。ザム！聞こえていたな！長老方に余さず伝えろ！」

「了解！」

襲撃を喰らったものの特に被害もなく、やり過ごした一行であった

すごくウサギは残念

伝令役が行ったため俺たちは、ここで待機していた。

子どもの相手をしたり、したがシアが

「ユエさんってペツタンコですね」

”ペツタンコ”

ペツタンコ

ペツタンコ

ユエの頭の中でリピートされる、『ペツタンコ』

残念ウサギと怒り狂う吸血鬼この後の展開は手を取るようにはわかる

樹海に命知らずのウサミミ少女の声が木霊した。ユエは固まり、ゆっくりと近づいて行く。ハジメは天を仰ぎ、無言の合掌。ルピは目を背けて、子ども達の相手をし出した

「……お祈りは済ませた？」

「……謝ったら許してくれたりは」

「……許すと思う？」

「死にたくない！死にたくないあーい！」

”風帝”

「アツーーー!!」

ユエの魔法によって生み出された竜巻はシアを飲み込み、錐揉みしながら天へと昇らせて行く。悲鳴が木霊しながら、ピツタリ十秒後にグシャッ！という鈍い音を立ててルピの目の前に墜落した。犬○家のあの人の様に頭部を地面に埋もれさせビクンツビクンツと痙攣しているその姿は、神秘的な容姿とは相反する途轍もなく残念な少女である

「いい仕事した！」と言う様に、掻いてもいない汗を拭うフリをするとハジメの下へ戻り、こう尋ねた

「ハジメはおつきい方が好き？」

女性の上目遣いしかも彼女からだ、ハジメの回路は真っ白になっている

そのハジメが出した答えは

「・・・胸は人それぞれだよ。おつきかろうが、小さかろうが、それは些細な事。相手が誰か、それが一番重要」

と答えた、ベターな答えだがユエは顔を赤くさせている

この感じはハジメが搾り取られるパターンだ

ガンバ！ハジメ！

というようなことがあったが奥から誰か来ているな

場に緊張が漂よい、霧の奥から数人の新しい亜人族——森人族

エルフが居たのだ

(る、ルピ！エルフ！エルフが居る!!生エルフ!!)

(落ち着けハジメ、エルフを見て感動するのは良いが、今はそれどころじゃないだろ)

(・・・ハジメ・・・落ち着く)

(・・・はい。落ち着きました)

様子を見ていたハジメとルピ、ユエは、彼が亜人達の中心に立っていた事から”長老”と呼ばれる存在であると推測した

「ふむ、お前さんが問題の人間族かね？名は何という？」

「ルピ。あんたは？」

ルピの言葉遣いに憤りを見せるも、それを片手で制止させて彼も名乗り返す

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預らせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが・・・その前に聞かせてもらいたい。”解放者”とは何処で知った？」

「うん？オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の一人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」

「ふむ、奈落の底か・・・聞いたことがないがな・・・証明出来るか？」
「証明か・・・」

咄嗟に何も思い付かないルピだが、ハジメが素材やオルクスが身に着けていた指輪をと提案。ルピはポンと手を叩き、”宝物庫”から地上の魔物では有り得ない質を誇る魔石をいくつか取り出して指輪と

一緒に渡す

「こ、これは……こんな純度の魔石、見た事がないぞ……」

アルフレリツクは少々驚いていたが、隣に居た虎の亜人は驚愕の余り声が漏れ出ていた

「なるほど……確かに、お前さんはオスカー・オルクスの隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが……よからう。取り敢えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリアも一緒にな」

前例に無い結論に、虎の亜人を筆頭に異を唱えて猛反対する亜人族。先程言った通り前例が無いのだ。今までフェアベルゲンに人間族が招かれた事など無かったのだから

「彼等は、客人として扱わねばならん。その資格を持っているのでな。それが、長老の座に就いた者にもみ伝えられる掟の一つなのだ」

アルフレリツクが厳しい表情で周囲の亜人達を宥めが、今度はハジメ達の方が抗議の声を上げた

「待て待て待て。何勝手に俺達の予定を決めてるんだ？俺は迷宮と思われる大樹に用があるのであって、フェアベルゲンに興味はない。問題ないなら、このまま大樹に向かわせてもらう」

うんうんと頷く、残り二人

「いや、お前達。それは無理だ」

「え？」

「大樹の周囲は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失う。一定周期で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。……亜人族なら誰でも知ってるはずだが……」

「おっと」

「……なるほどねえ」

アルフレリツクを初めとし、ハジメとルピの二人がカムの方へと視線を向ける。そのカム本人はというと、「あっ」と声を漏らした。今まで気付かなかったのだろう……

「カム？」

「あつ、いや、その何といいますか・・・ほら、色々ありましたから、つい忘れていたといいますか・・・私も小さい時に行ったことがあるだけで、周期のことは意識してなかったといいますか・・・」

「忘れたのか、？」

「ええい、シア、それにお前達も！なぜ、途中で教えてくれなかったのだ！お前達も周期のことは知っているだろ！」

「なつ、父様、逆ギレですかっ！私は、父様が自信たっぷりな請け負うから、てつきりちようど周期だったのかと思って・・・つまり、父様が悪いですう！」

「そうですね、僕たちも、あれ？おかしいな？とは思ったけど、族長があまりに自信たっぷりだったから、僕たちの勘違いかなって・・・」

「族長、何かやたら張り切ってたから・・・」

責任の擦り付けが始まった

「お、お前達！それでも家族か！これは、あれだ、そう！連帯責任だ！連帯責任！ハジメ殿、罰するなら私だけでなく一族皆にお願いします！」

「あつ、汚い！お父様汚いですよお！一人でお仕置きされるのが怖いからって、道連れなんてえ！」

「族長！私達まで巻き込まないで下さい！」

「バカモン！道中の、ルピ殿の容赦のなさを見ていただろう！一人でバツを受けるなんて絶対に嫌だ！」

「あんた、それでも族長ですか！」

兎人族の情の深さは随一といわれているが、見ていられない・・・段々とハジメと臯月の苛立ちが増していく。そして、ルピは一言呟く

「ん？特に何もせんぞ」

「え？」

「いやいや、誰でも失敗はあるでしょ。それがたまたま今回だっただけ、だから何もしないし気をつけてとだけ言っておこう」

「ありがとうございますー！」

なんかとりあえずウサギ達は残念だな

亜人族の国

亜人族と歩き始めてしばらくすると、道に誘導灯のようなものが地面に埋まっている

外見は拳大ぐらいの大きさで青い光を放つ結晶のようなものだった

俺が結晶をまじまじと見ているとアルフレリックが解説してくれた

「あれはフェアドレン水晶というもので、あの水晶の周りには、霧や魔物が寄り付かないという効果を持っている。私たちの集落を囲むように置いてある。だが、魔物が寄り付かなくなるわけでもなく、普通よりかはましと言う程度だが」

「霧の中にずっと居たら気が狂いかねないもんな」

話しをしながら歩いていると、巨大な門が佇んでいた。太い樹と樹が絡み合ってアーチを作っており、其処に木製の十メートルはある両開きの扉が鎮座していた。天然の防壁は高さも最低でも三十メートルはあり、亜人の”国”というに相応しい威容を感じれた。門番の亜人族に合図を送り、重たそうな扉がギギギツと音を立てながらゆつくりと開いて行く。この間に突き刺さる様な視線は恐らく亜人族達だろう。前例の無い人間族の訪問は何かしらの一悶着を呼ぶのだが、それを察して長老自らが出て来たのであろう

門を潜ると、そこは別世界の様だった。巨大な樹が乱立しており、その樹の中を住居としているのだろうか——ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れている。人が優に数十人規模で渡れるであろう極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成し、樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まで存在していた。ルピとハジメとユエの三人はその美しい街並みに見蕩れて、いると、ゴホンツと咳払いが聞こえた。どうやら、気がつかない内に立ち止まって

いたらしくアルフレリックが正気に戻してくれたようだ

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空気も美味い。自然と調和した見事な街だな」

「まるでお伽噺に出て来そうな光景・・・」

「ん・・・綺麗」

「私としては、亜人族の方々がどの様に生活しているのかを拝見したいですね」

ありのままの称賛。そこまで褒められるとは思っていなかったのか少し驚いた様子の亜人達。・・・やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている。ハジメ達は好奇と忌避、あるいは困惑と憎悪といった様々な視線を向けられながら、アルフレリックが用意した場所に向かった

※※※※

「・・・なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上か・・・」

三人はアルフレリックと向き合い、オルクス迷宮で知った話を話していた。その他にも、迷宮を創り上げた解放者や神代魔法、故郷に帰する方法等諸々だ。アルフレリックから教えられた事は少なかったが、重要な点と言う事は間違い無いだろう。フェアベルゲンの長老の座に就いた者に伝えられる掟——それは、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つ者が現れたらそれがどのような者であれ敵対しな

いこと、そして、その者を気に入ったのなら望む場所に連れて行くことという何とも抽象的な口伝だった

ハルツィナ樹海の大迷宮の創始者リユーティリス・ハルツィナが、迷宮攻略者の脅威を踏まえての口伝だった事が分かった。そして、オルクスの指輪の紋章にアルフレリックが反応したのは、大樹の根元に七つの紋章が刻まれた石碑があり、その内の一つと同じだったからだろう

「解放者ハルツィナは心優しいな。普通そういう事は伝えないと思うのに」

「本当にそうだな。だが、残酷な奴等には意味無いだろうがな」

「その様な者は目を見ずとも、雰囲気だけで分かるものだ」

「・・・気配が独特」

「そういうことだ」

「では今後のことをお互い話し合いませんか。互いに利のある話し合いにしましょう」

ハジメとアルフレリックが今後の予定を確認し合おうと話し出そうとした時、階下が騒がしくなった。階下にはシア達ハウリア達が待機しているの、何かしらのトラブルが起きたのだろう。ハジメとアルフレリックは顔を見合わせ、同時に立ち上がって下へ降りて行く。様々な亜人族達が剣呑な眼差しで、ハウリア族を睨みつけていた。部屋の隅で縮こまるシアをカムが必死に庇っており、シアもカムも頬が腫れている事から既に殴られた後のようだ。ハジメ達に気が付いた熊の亜人が剣呑さを声に乗せて発言した

「アルフレリック・・・貴様、どういふつもりだ。なぜ人間を招き入れた？こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど・・・返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

「なに、口伝に従つたまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

「何が口伝だ！そんなもの眉唾物ではないか！フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」

「なら、こんな人間族の小僧が資格者だとも言うのか！敵対してはならない強者だと！」

「そうだ」

「・・・ならば、今、この場で試してやろう！」

いきり立った熊の亜人が突如、ハジメに向かって突進した。余りにも突然の出来事に周りも、アルフレリックも反応が出来無かった。だが、熊の拳はハジメに直撃する事は叶わなかった

「おい、おまえ何してるんだ？」

熊の亜人の喉元にナイフが突きつけられていた。ハジメとユエはかろうじて分かった

他の亜人は俺が、瞬間移動したようにも見えたと思う

「動くな、離すな、聞け」

「今の攻撃が見えないんだったら、俺には勝てない。大人しく兎人族

を襲った理由を吐け」

「人間に話すか！」

「そうか」

次の瞬間熊の亜人の首から血を、垂らす

「もう一度チャンスをやろ。理由はなんだ？」

そう言うと、悔しそうに話し始めた

「そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」
カム達は一樣に諦めたような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのだから情の深さは折紙付きだ

「長老様方！どうか、どうか一族だけはご寛恕を！どうか！」

「シア！止めなさい！皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わない。ハウリア族の皆で何度も何度も話し合っただけで決めたことなのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様！」

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲンを謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれない」

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだ

が？どうする？運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

こちらの要求を飲めと言外に伝えてくる虎人族。他の長老衆も異論は無いようだ

「一度消えたハウリア族がノコノコと帰ってきたのが気に食わなかったんだろ、お前らより強い奴を連れてきて」

「ああそうだ」

投げやり気味に答えられた

「ハウリア族は殺せないぞお前たち、俺達は雇われているんだよハウリア族に」

依頼内容はハウリア族に襲いかかる全ての驚異の排除だ。そして契約は施行されているこの意味がわかるか？」

「ルピさん、、、」

「なるほどな」

「分かってくれてありがとう」

「ならば、お前さんの奴隷という事にでもしておこう。フェアベルゲンの掟では、樹海の外に出て帰って来なかった者、奴隷として捕まった事が確定した者は、死んだものとして扱う。樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼない。故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬ様に死亡と見なして後追いを禁じているのだ。・・・既に死亡と見なしたものを処刑は出来まい」

「アルフレリック！それでは！」

「ゼル。分かっているだろう。この少年達が引かない事も、その力の大きさも。ハウリア族を処刑すれば、確実に敵対する事になる。その

場合、どれだけの犠牲が出るか・・・長老の一人として、その様な危険は断じて犯せん」

「しかし、それでは示しがつかん！力に屈して、化物の子やそれに与するものを野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は地に落ちるぞー！」

「そんなものはどうでもよい。それとも玉砕するか？」
「くっ」

「じゃ交渉成立ということだ」

呆けているハウリア達を促してこの場をさっさと離れて行く。少しばかりブーツとしていたハウリア達

「ほら早く行くぞー」

「あの」

「ん？」

「私たちは死ななくて済むんでしょうか？」

「そうだ」

シアに手を貸し立ち上がらせる

シアの顔が赤くなっていた、うれしからか。

くなれば良い。襲い来るあらゆる障碍を打ち破り、自らの手で生存の権利を獲得すれば良い」

「・・・ですが、私達は兎人族です。虎人族や熊人族の様な強靱な肉体も翼人族や土人族のように特殊な技能も持っていません・・・とても、そのような・・・」

兎人族は弱いという常識が彼等を支配している。どうやっても勝てないと思ひ込んでるだけだ

「はあ・・・見てられないな。だって最初からこんなに強かったわけじゃ無いぞ」

「ハジメはかつての仲間から”無能”と呼ばれていたぞ?」

「え?」

”無能” って言った”無能” って。ステータスも技能も平凡極まらない一般人でハジメは弱かった。仲間内の最弱。戦闘では足でまとい以外の何者でもない。故に、かつての仲間達からは”無能” と呼ばれていた。・・・ハジメすまん

「それはいいよ、もうあいつらとは会わないと思うけど、過去の事だしね」

「・・・ハジメ大変だったんだ」

俺の告白にハウリア族は例外なく驚愕する。ライセン大峽谷の凶悪な魔物を苦もなく一蹴したハジメが”無能” で”最弱” など誰が信じられるというのか

「俺はなんか避けられていたな」

「化け物じゃないんですか?」

「はあ、そう言うことか、つくづく馬鹿な連中だと思ふな」

「それには同感」

なんでユエも反応してんだ? 隠れ家で話したのか? まあいつか

「この様に、最初は誰しもが弱いという事は変わらん。追い込みに追いついた結果が俺達————死に物狂いでやれば大抵の事は出来る筈」

「ルピの言う通り。奈落の底に落ちて僕達は強くなる為に行動した。出来るか出来ないか何て頭に無かった。出来なければ死ぬ、その瀬戸

際で自分の全てを賭けて戦った。・・・気がつけばこの有様だよ」

ハジメ達から淡々と語られる内容は壮絶、その内容にハウリア族達の全身を悪寒が走る。ハウリア達よりも低スペックな一般人ステータスで、ライセン大峡谷の魔物より遥かに強力な化物達を相手にして来たというのだ。追い込みには追い込んだ結果、最弱であろうとも、生き残る為に強者へと挑む精神の異様さにハウリア達は戦慄した。もしも、自分達なら——と想像すると、絶望して諦め諦観と共に死を受け入れただろう

「さあ、どうする生か死好きな方を選びな」

「やります。私に戦い方を教えてください！もう、弱いままは嫌です！」

一族を窮地に追い込んだのは紛れもなく自分が原因で、何も出来ずに唯朽ち果てるのはゴメンだ——そんな運命は嫌だと、シアは兎人族としての本質に逆らっても強くなりたかった。シアの覚悟は決まった。優しい心を持ったシアの様子を啞然として見ていたカム達ハウリア達は、また一人、また一人と、地面から立ち上がった。男だけで無く、女子供も含めた全てのハウリア達が立ち上がってカムが代表として一歩前へ進み出た

「ハジメ殿・・・宜しく頼みます」

言葉は少なく小さいが、言葉には確かに意志が宿っていた

「分かった。覚悟しろよ？あくまでお前等自身の意志で強くなるんだ。俺は唯の手伝い。途中で投げ出した奴を優しく諭してやるなんて事はしないからな。おまけに期間は僅か十日だ・・・死に物狂いになれ。待っているのは生か死の二択なんだから」

「ハジメー小太刀をくれー、あとこれ」

「これは？」

手に持っているのは大量の武器の原案だが、銃ではなく槍やナイフや鉞なんか書かれている

「銃が使えない時なんか使う武器と町で見せる武器」

「成る程」

「流石に町で発砲したらめんどくさい奴らが飛んでくるからな、だか

「頼めるか？」

「わかった、作ってみるよ」

「ありがとう」

「あ、シアはユエとマンツーマンな」

「・・・なんで？」

「魔力操ることが出来るんだ、ユエならある程度はわかるだろ」

「・・・わかった」

※※※※

小太刀を渡して、まず魔物を一体倒してこいと言ったがなんだこれは

「ああ、どうか罪深い私を許してくれえ〜」

「ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！それでも私はやるしかないのお！」

瀕死の魔物が、最後の力で己を殺した相手に一矢報いる。体当たりによって吹き飛ばされたカムが、倒れながら自嘲気味に呟く

「ふっ、これが刃を向けた私への罰というわけか・・・当然の結果だな・・・」

「族長！そんな事言わないで下さい！罪深いのは皆一緒です！」

「そうです！いつか裁かれるとき来るとしても、それは今じゃない！立って下さい！族長！」

「僕達は、もう戻れぬ道に踏み込んでしまったんだ。族長、行けるところまで一緒に逝きましょうよ」

「お、お前達・・・そうだな。こんな所で立ち止まっている訳にはいかない。死んでしまった彼（小さなネズミっぽい魔物）の為に、この死を乗り越えて私達は進もう！」

「「「「族長！」「「「「」」」」」

これにはもう、俺もイライラが爆発した

「だぁー！ー！やかましいわ、ボケツ！魔物一体殺すたびに、一々大げさなんだよ！何なの？ホント何なんですか？その三文芝居！何でドラマチックな感じになってるの？黙って殺れよ！即殺しろよ！魔物に向かって”彼”とか言うな！敵やぞあれ！」

俺の怒りを多分に含んだ声にビクツと体を震わせながらも、「そうは言っても・・・」とか「だっていくら魔物でも可哀想で・・・」とかブツブツと呟くハウリア達。二人の額に青筋が更に増える。二人の様子を心配したのだろうか、ハイベリアに喰われそうになっていたところを間一助けた男の子が近づく。しかし、進み出た少年は俺に何か言おうとして、突如、その場を飛び退いた

「?どうした?」

「刃物でも落ちてたの?」

だが、心配は無意味だった

「あ、うん。このお花さんを踏みそうになって・・・良かった。気がつかなかつたら、潰しちゃう所だったよ。こんなに綺麗なのに、踏んじやったら可愛そうだもんね」

「」(絶句)

「うんールピ兄ちゃん僕、お花さんが大好きなんだ!この辺は、綺麗なお花さんが多いから訓練中も潰さない様にするのが大変なんだ」

ニコニコと微笑むウサミ少年。周囲のハウリア族達も微笑ましそうに少年を見つめている中、ハジメがポツリと囁く様な声で質問をする

「・・・時々、あんたらが妙なタイミングで跳ねたり移動したりするのは・・・その”お花さん”とやらが原因か?」

時偶、妙なタイミングで歩幅や立ち位置を変えたりとっていたハウリア達。俺は次の動作の為の行動だと思っていたのだ

「いえいえ、まさか。そんな事ありませんよ」

「はは、そうだよな?」

「ええ、花だけでなく、虫達にも気を遣いますな。突然出てきたときは焦りますよ。何とか踏まない様に避けますがね」

だめだ、こいつらの考えを捨てないと、俺の過去でも話すか

「一つ話をしよう」

「訓練は?」

「まあ落ち着けて、話を聞いてくれや」

「わかりました」

※※※※

俺の家族は5人家族だった。

大企業の秘書の日本の母親と世界的な企業の社長の父親の下に生まれた。

俺が生まれた時には姉は中学生だった。

俺が5歳ぐらいの時に妹が生まれた、それはそれは可愛かった。

6歳になる時には塾に通わされた、その時父親が家を離れた

そこから始まった地獄、母の言うことを聞かなければ殴る蹴るは当たり前だった、飯を抜かれることもあったが、俺はみんなも同じと考えていた。ある日塾の公開テストがあった、俺は1位を取ったが、2位の子が親に褒められているのを見て、我に返った。(おかしくないか?) と思った。

そこで俺は親に言った

「1位を取ったよ！褒めて！」

と返ってきた言葉は

「当たり前じゃない、何を言ってるの」だった

俺は決意した、こいつらの呪縛から逃げてやる、対抗してやる、見返してやると、ただ俺にはもう一つ気がかりがあった。妹だ

俺は中学生になった時、妹は小学生になった

ただ妹は地頭がそこまで良くなかった

それに対してあのクズが取った行動は激しい虐待だった

俺は何も出来なかったいや動けなかった、あの時の事がフラッシュバックしてしまっただからだ、せめてまた思い妹に色々教えた、この世界には沢山の夢があると、妹は耐え努力を重ねた、頭は良くなり、運動神経は家族1位とも言えるぐらいにまでに成長した。そして高校生になりバイトをして金を貯め

大学と共に妹を連れどこかに行こうと思っていたが、この有様だ

「いいか、お前たち優しさだけでは何も救えない！それに見合う力を付ける！俺はお前たちが羨ましいだから死ぬな、生きてくれ頼む、」

涙を零しながらあいつらに懇願する

「優しさも必要だかな、優しさだけでは、世は回らないんだ
だから力を与える、だからこの理不尽な世界で生き残ってくれ、俺
がお前たちに与える最高の課題だ、『生き残れ!』」

ああ、俺の言葉は通じたかな

シアの覚悟

ルピが兔人族を鍛えていたころ

※※※※ハジメside

ルピから渡されたこの大量の武器のデータ、はつきり言ったら無茶だと思っただけではないと思う、、10人に聞いたら10人が無理だと思う

更によくわからない武器もある、、

なんだよこれ！『アームナイフ』って！こんなのがあったか地球にもなかった気がするんだけど、他にも理解不能な武器が沢山書いてある、幸いなのは、細かくデータ化されているからかある程度の想像しやすかったのが良かった、もし名前だけだと投げ出してたと思う。それは違うな、王国にいたころならもらった瞬間に投げ出してると思う、惚れた女性の前で無様はさらせないからね。もう少し頑張ってみよう

※※※※ハジメside↓シアside

ユエさんとの模擬戦を行って数日経ちましたが、この人容赦がありません！

いきなり最上級魔法を打って来たときは、私を殺しに来てると思いました

でも、数日経ってユエさんの魔法を目視で避けられるようになりました

でもあの人の横に立つには、まだ足りません、避けるだけでは相手には勝てません

もつと攻撃手段が必要です。色々抜けている頭で考えなくては

いきなりユエさんが、私には身体強化の魔法の適正があると言ってきました

でも、それを断定はできないらしいです。理由としては、私の打たれ強さがそうじゃないかと判断したらしいです、何か曖昧ですね。でももしこれが本当なら感覚だろうと何だろうと掴んでやります！

それからなんとなくですが、コツをつかんできました。その成果

かユエさんを追い込んで気がするんです

もしかしたら、自分の勘違いかもしれないかもしれませんがいまは攻め時です。一矢報いてやります

※※※※

勝負に負けましたが、あの人が提示した条件に到達しました、やりました、やりましたー！

これであの人の横に行くことができました。ユエさんには感謝しきれません

ユエさんありがとうございますー！

※※※※シアside↓ユエside

私は、目の前にいる兔と特訓することになってる

私には、特訓メニューなんかを考えることはできないから、模擬戦をすることによってなにか掴むと信じて

やってみよう、、最初は手も足も出せないぐらいぼロボコにしたが、一向にあきらめない

そこまでして着いてきたいの？わかったそれなら私も全力で答えよう

この兔やたらと打たれ強いと思い、身体強化の適正があると言ってみたら本当に適正があった

というか、やばすぎる、、いきなりその辺の木を引き抜いて投げてくる

化け物度合いで比べれば正直ルピといい勝負になると思う

※※※※

負けた、、この私が、、かすり傷1つでも付けたら勝ちというルールだった

でも、戦闘経験がないシアと奈落での戦闘経験などを持つてる私と差を埋めるためのハンデだった

10日間で私に傷を負わせるという驚異的な成長力、、頭の中で浮かんできたのは見放されるということ

私は長い間戦闘を行ってきた、それに対してシアはこの僅かな期間で私に傷をつけた、、

もし仮に私と同程度の時間、戦闘を行えば、、、私は魔法だけが取り柄のお荷物になってしまおう、、

目の前のライバルには感謝しないと、、私はユエあなたの宿敵

※※※ユエside↓三人称

ルピが兔たちを鍛えているとき、もう一人の兔は

「でえやあああ!!」

「・・・」緋槍」

砲弾に見立てた大木は燃やされてじり貧状態なってるが

「まだです!」

「ッ!城炎」

今までと同じ攻撃パターンに変化を入れて意表を突く。それに見事に引掛かったユエ

丸太を蹴って粉碎した事で、散弾と化した攻撃を炎の壁で防がれシアの攻撃はユエには届かなかった。しかし

「もらいましたあ!」

「ッ!」

気配を断って背後に移動したシアの手には、超重量級の大槌が握られており、豪風を伴って振り下ろされた

”風壁”」

砕かれた大地の破片や風圧を風の壁で防ぎ、攻撃直後の隙を見逃さ

ずに追撃を掛ける

「凍極」

「ふえ！ちよつ、まつ！」

シアが待ったを掛けるが、問答無用に発動された魔法は頭だけを残して全身氷付けにされたのだった

「づ、づめたいいく、早く解いてくださいよおく、ユエさくん」

「・・・私の勝ち」

「ううう、そんなら、つて、それ！ユエさんの頬っぺ！キズです！キズ！私の攻撃当たってますよ！あははは、やりましたあ！私の勝ちですう！」

「・・・傷なんて無い」

「んなっ!?卑怯ですよ！確かに傷が・・・いや、今は無いですけどお！確かにあったでしょう！誤魔化するなんて酷いですよお！ていうか、いい加減魔法解いて下さいよおく。さつきから寒くて寒くな・・・あれっ、何か眠くなってきたような・・・」

魔法を解除し、話始める2人

「ユエさん。私、勝ちました」

「・・・ん」

「約束しましたよね？」

「……………ん」

「もし、十日以内に一度でも勝てたら……ルピさんとハジメさんとユエさんの旅に連れて行ってくれるって。そうですよね？」

「……………ん」

「少なくとも、ルピさんに頼むとき味方してくれるんですよ？」

「……………今日のことは何だっけ？」

「とぼけないでくださいー！」

シアはユエと約束していた。それは、シアがユエに何かしらの一撃を加えればルピ達の旅に同行の説得をするという事

「……………はあ。わかった。約束は守る……………」

「ホントですか!?!やっぱり、やくめたあとかなしですよお！ちゃんと援護して下さいよー！」

「……………ん」

「何だか、その異様に長い間が気になりますが……ホント、お願いしますよっ。」

※※※三人称↓ルピside

シアたちが近づいてきたな、どっちだろうな

「ルピさんー私勝ちましたよー！」

「おめでとう、ユエどれぐらいだった？」

「・・・シアの魔法適性はハジメ達と変わりが無い。しかし、身体強化系に特化してる。多分最大値でハジメさんの五割く六割辺りだと思っ
て頂ければ分かりやすいと思う。そして、鍛錬次第で伸びると思
う」

「oh・・・」

やべーなシア、予想してたスペックの100倍ぐらい上だわ、、と
いうか、よくもったなユエも

ユエの戦闘スタイルは、魔法の遠距離攻撃がメイン、近距離は自己
再生で無効化するというごり押しという戦闘スタイルを取っている。
それに対してシアは近距離戦を得意としている、それも重量のある物
を振り回すという、相手の戦闘スタイルをぶつ壊すようなスタイルを
取っていると聞いた。

いくら戦闘経験がないシアとはいえど、ユエにはきつかったか

というか、シアの成長力は半端ないな、、うかうかしてられんな俺
ももつと特訓しないとな

「ルピさん、あなたたちの旅に連れて行ってください」

「ん？いいぞ」

「[おかし]」

「だからいいって言ってるんだ」

「それは何ですか？」

「正直に言つて自分の家族たちを傷つけたくなかつただろ、自分のせつだ」

「はい、い」

凶星か、い

「それともなにか別の理由があるのか？」

「はい！」

えらくはつきり言うな、なんか嫌な気がする、い、こういう勘は当たるんだよなー

「家族には言ったのか？」

「はい、父様は自分が行きたければいいと言つたので」

「うんうんでもシア、それ相応の実力があるんだつたら1人でもこの世界を旅できるだろ」

「で、ですからあ、それは、そのお・・・」

俺の袖を引っ張りボソボソと答えを告げた。その少し後で

「ルピさんの傍に居たいからですう！しゆきなのでえ！」

「あれ俺どこかでフラグを立てた？」

「この世界で普通奴隷とかにするんですよ、それを『樹海の案内』とかいう報酬に安い報酬に変えてるんですから」

「いや、それはだな、こつちに都合がいいからだしな」

「それに私たちを守るときに長老衆の時も！」

「あれお、おいユ・エ？」

そこには、ユエはいなかった、、、どこかに行ったのか？耳を澄ますと沢山の足音が聞こえる

カムの野郎やりやがったな、、、とはいえずいな、、、戦闘だったらましだったんだが、いかんせんこういうのは苦手だ

「本当に俺なんかでいいのか？」

「はいー！」

「旅はつらいぞ、それでもか？」

「これかたよろしくおねがいます！」

この兔の決意は固いようだな

シアが仲間になった

大樹

シアの覚悟を聞き終わると同時にハジメが帰ってきた

「うん？シアも旅の仲間になったんだ。これからよろしくね」

「これからよろしくお願いします！」

「それでユエとほかの人は？」

「もう少ししたら帰ってくるぞ、多分」

噂をすればなんとやら、帰ってきた。生まれ変わった兎人族がな

「「「「「先生！」「」「」「」」」」」

「「え？先生？」」

「おう、お帰りお前ら。うん？課題より多いじゃねーか、何かあったのか？」

カムが代表して答えた

「お題の魔物を狩っていたら、仲間が出てきたので狩りました」

「うんうんそれは分かったけど、なんであの時ユエを連れてどっか行ったの？」

「仕方ないじゃないですか、私のかわいい娘の告白だったんですから、成功してほしかったので、」

何だろう、怒るに怒れない、、親としては満点だからな、いい家族だな

「先生！報告したいことがあります。大樹に向かうルート上に熊人族を発見しました。どういたしましょうか？」

「ちよつと待つてください！この10日間で何があつたんですか！」

まあシアの言い分もわかる、元々温厚な種族だったはずの兔人族がいきなり戦闘に対して、なにも思わなくなったら普通は何かあつたと思うのが普通だからな、、というか俺の話聞かせたらこうなつた、仲間意識が高いからだろうか？今となつては、いい効果だつた。俺も少し気分が軽くなつたし、悩みは誰かに言つたほうが楽になるもんだな

「いや。これで良いんだシア。シアだつて、この世界の残酷さは知つてるだろ？」

「うつ、そ、それは……。確かに」

「我々を見下し敵視している人に魔人族。更には魔物。狂つた神。この世界には、理不尽が溢れかえつてゐる。その理不尽を弾き返すために、私達自身が強くないといけないんだ、優しさも必要だが、力がなければ何もできないと教わつたんだ。安心してくれ、性格が変わつてもシアの父親だ、例えこの世界が敵になつてもシアの味方であり続けるから、私達は家族だ、、」

「ッ！父様」

ボロボロと大粒の涙を流しながら、、、こっちも泣きたくなつた、、、
いい家族だな。ハジメとユエに至つては目を真つ赤にして泣いてる

「泣いてないで、シア。先生の旅についていくんだ。頑張つて、私のか
わいい娘シア」

「父様！行つてきます！」

「ああ、行つてらっしゃい。先生、私達に熊人族の対処を任せてくださ
い」

「ああ、わかつた任せる」

「さあ、みんな私たちの娘の旅立ちの日だ！派手にお祝いをしよう
じゃないか！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」

「我々は弱くないこと証明するぞ！いくぞ新しい兔人族！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「たくましくなつたな、あいつら
!!!!!!!」

「父様、、、」

「いい家族だね」

「・・・いい家族」

「後を追いかけるか」

「そうしましょう」

※※※※

俺たちが、熊人族との交戦場所にたどりつくところには、縄でぐるぐる巻きにされた熊人族がいた

そしてカムに質問していた熊人族、耳を澄まして聞いていると

「なぜ、そこまで強いのだ！この前まで最弱だったではないか！」

「弱者は、常に生き残ることだけを考えて生活をしている。自分たちが力を保持していると思いい我々を見下したのが間違いだ、それに我々の娘の旅立ちの日なんだ、邪魔はさせん」

区切りがついたので奥から出ていく

「カムありがとう、よく正気を保っていたな」

数は少ないといえど、死体が数体転がっている

「私達は先生から命の大切さを教えていただきました、こんなゲスどもにも待っている者もいるでしょうし、何よりあの帝国兵と同類になるのが嫌だったんですよ」

「まああつらは自分たちの快樂のために、亜人狩りを行っているからな、正直殺人したとき頭のネジが吹っ飛ぶと予想していた、まあ殺人に対して忌諱感を持たず戦い、そして理性を持って戦っている。お前たちは、立派な戦士だ。教えた身として誇りに思うぞ」

「「「「「「ありがとうございます！」「」「」「」」」」」」

とりあえず捕縛している奴らに意識を向けるか

「待たせたな、最弱種族に負けた最強種族さん」

明らかにこちらに対して殺意を持っているが、敵わないとわかって

いいるんだろう、特に何もしてこない

さて、生死を分ける質問だ

「今俺の手の中にお前たちの命がある、命令一つでお前たちが死ぬもしくはこちらの条件を2つ飲む形でここから立ち去るか。どちらが良い？」

「……。その、条件とは何だ」

「ッ！レギン殿！何を言うのですか！まさか人間の言う事を聞くというのですか！」

「そうだっ！俺には、この事態を招いた責任がある！……人間、貴様の条件とは何だ」

「難しい事ではないからな。お前たちはフェアベルゲンに戻り次第、カムたちの武力を亜人達に喧伝するのが1つ。……お前たち以外にも、ハウリア族を根に持つものは多いからだからこそ、お前たちが伝えるのだ。その強さを。自分たちが、どれだけ無様に負けたのかを。2つ目は長老たちにこう伝えておけ『貸し1つ』と」

「ッ！」

私の言葉に、ぎゅつと拳を握りしめる熊人族の指揮官。そう、こいつらには、生きた広告塔になってもらうのだ。そして、その脅威度が結果的にハウリアに対抗する事への抑止力となる。亜人族の中でも武に長けた熊人族の大半が死んだ、とあっては奴らもさぞ驚き、攻撃を躊躇うと思う。まあ貸しはおまけみたいなもんだからな、てきとうに覚えとくだけでいい

「……わかった、伝えるので国に返してくれないか」

「正しい選択だな」

「これって・・・オルクスが身につけていた指輪が嵌めれるんじゃない？」

「ハジメ・・・来て」

「何か見つけたか？」

窪みがあり、指輪をそこへ嵌めてみる。すると、石板が淡く輝きだしたのだ。何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も集まって来た。しばらく、輝く石板を見ていると、次第に光が収まり、文字が浮き上がった

” 四つの証 ”

” 再生の力 ”

” 紡がれた絆の道標 ”

” 全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう ”

「どういう意味だ？」

「この迷宮を攻略する際に必要な鍵という事？」

「四つの証は迷宮攻略って分かるが・・・再生の力と紡がれた絆の道標ってのは」

「多分、後者の絆の道標は亜人族との協力だよな。前者の再生の力は神代魔法の再生を司る力だと思う」

目の前の枯れている樹を再生する必要があるのでは？と推測するハジメ。俺もユエも、そうかもと納得顔をする。つまり――

「はあく、ちくしょう。今すぐ攻略は無理ってことか・・・面倒くさいが他の迷宮から当たるしかないな・・・お前らまた今度くるんだ、ちや

んと訓練しておけよ」

「当たり前です、そしてシア風邪ひくなよ、元気だな」

「はい！みんな行ってきます！」

こうして樹海を後にした

m a t i

車に乗って樹海を抜けた頃シアが話しかけてきた

「次の目的地は何処ですか？」

「次の目的地はライセン大渓谷だ」

「なんでなんですか？」

「おそらくこの大渓谷にあると思うんだよ、大迷宮が」

ハジメが答えた

「でもその前に町に行くぞ」

「・・・なんで？」

ユエが聞いてきた

「シアの服装はボロボロユエも服があまりない、普通のご飯も食いた
いし、後金もないことに気づいてるか？そんな感じの理由があるか
ら、町に寄ることにした」

「僕も普通のご飯が食べたい」

「だからこの辺の町に寄って色々と買い揃えるぞ。幸い魔物の素材は
大量にある、これを売ればかなりの金が入るはずだ。なかつたら
その辺の魔物を片付けたらいい感じの金にはなると思う。あとシア
これ」

シアに渡したのは首輪、奴隷は首などをつけていることが多い。な
ので

「ちよつとなんですかこれ！私はつけたくありませんよこれ！」

「あのなシア、お前自分の容姿を見直してみ。愛玩具としての需要が
高い兎人族、体つきも良い、それに珍しい髪色おしているんだ誰かの
奴隷じゃなければおかしいからな、それにその首輪、魔力を流せば
ちゃんと外れるからな。まあ我慢してくれ」

そう言い終わるとシアが体をクネクネさせたいた。

「そんな美人だなんて」

誰か教えてくださいこういう時どうすればいいか

「笑えばいいと思うよ」

「普通に心を読むな」

「だってそんな感じだったから」

「まあ、そうだけでも、それよりも検問所だ。車を降りて歩いていくぞ」

「あ、露骨に話を変えた」

「・・・照れ屋？」

「、、行くぞ」

徒歩5分ぐらいのところまで降りて歩いていく

※※※ルピside↓三人称

「止まってくれ。ステータスプレートを。あと、町に来た目的は？」

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

ハジメ達・・・ステータスプレートを所持している2人が提示する。気のない声で相槌を打ちながら門番の男が2人のステータスプレートをチェックする。ルピは普通に見ていたが、ハジメのステータスプレートを確認すると目を瞬かせた。ちよつと遠くにかざしてみたり、自分の目を揉みほぐしたりしている。その門番の様子をみて、ハジメは「あつ、ヤベ、隠蔽すんの忘れてた」と内心冷や汗を流した

(おいまさか、、ハジメステータスの隠蔽は?)

(ご、ごめん！ステータスが化け物染みている事をすっかり忘れてた

！だ、大丈夫。言い訳を思い付いたから！)

ハジメは咄嗟に誤魔化すため、嘘八百を並べ立てる

「ちよつと前に、魔物に襲われてですね・・・僕の彼女を護ったその時に壊れたみたい」

ハジメはユエの肩に手を当てて抱き寄せる

「こ、壊れた？いや、しかし・・・」

「壊れてなかったら、そんな表示おかしいですよ、まるで僕が化物みたいじゃないですか。門番さん、僕がそんな指先一つで町を滅ぼせるような『怪物』に見えますか？」

「はは、いや、見えないよ。表示がバグるなんて聞いたことがないが、まあ、何事も初めてというのはあるしな・・・そっちの二人は・・・」

「さっき言った魔物の襲撃のせいだな、こっちの子のは失くしちまったんだ。こっちの兎人族は・・・分かるだろ？」

ルピが代わりに答える

言葉だけで門番は納得したのか、「成る程・・・」と頷いてステータスプレートをハジメに返す

「それにしても随分な綺麗どころを手に入れたな。・・・白髪の兎人族なんて相当レアなんじゃないか？あんたって金持ちなんだな」

チラチラと女性を見て羨望と嫉妬の入り交じった表情の門番。ルピは肩をすくめるだけで何も答えなかった

「まあいい。通つていいぞ」

「ああ、どうも。おっと、そうだ。素材の換金場所って何処にある？」
「あん？ それなら、中央の道を真っ直ぐ行けば冒険者ギルドがある。店に直接持ち込むなら、ギルドで場所を聞け。簡単な町の地図をくれるから」

「おお、そいつは親切だな。ありがとうよ」

門番から有益の情報を手に入れたハジメ達は門をくぐり町へと入って行く。町中に入れば賑やかで、オルクス近郊の町程では無いものの露店も出ており活気に溢れていた。ルピ達は楽しげに目元を和らげている。

しかしこんな集団が町中を堂々と歩けば目立つものだ。男どもは、シアとユエを見て声を上げるが、彼女がいた男たちは顔をグーで殴られていた。異世界でも女性の尻に引かれるのは変わらないようだ

目線を感じながら歩いていくと一本の大剣が描かれた看板を発見する。かつてホルアドの町でも見た冒険者ギルドの看板だ。規模は、ホルアドに比べて二回りほど小さい。看板の確認も済んだハジメ達は扉を開いて中に踏み込んだ。ハジメとルピの二人は、荒くれ者が集う場所のイメージを持っていた。しかし、中へ入ってみると全体は清潔に保たれており、正面入り口はカウンター、左手側は飲食店となっていた

中に居た冒険者達は当然の様にハジメ達に注目しており、特に女性陣3人に視線が集まっている。テンプレよろしく絡んできたりする者は居らず、皆が理性を働かせて観察するだけに留まらせているのだ。ハジメ達は真っ直ぐカウンターの方へと進むと、大変魅力的

な・・・笑顔を浮かべたおばちゃんがいた

ハジメは内心でオバチャンと思っており、二人の内心を知ってか知らずか、おばちゃんはニコニコと人好きのする笑みでハジメ達を迎えようとしていたが、ハジメから溢れている残念みたいなオーラを感じ取り

「ふふ、そっちの坊は花を持ってんのにまだ足りなそうだね」

片言で答えて顔をそらすハジメ。ユエがジト目でハジメを見つめる

「そつとしいてやってくれ、夢を見ていたんだ、」

「なるほどねえくくくくく」

にやにやしながら答えるおばちゃん

「それで今回のご用件は？」

「素材の買取をお願いしたい」

「素材の買取だね。じゃあ、まずステータスプレートを出してくれるかい？」

「買取にステータスプレートの提示が必要なの？」

「ん？坊やは冒険者じゃ無かったのかい？確かに、買取にステータスプレートは不要だけどね、冒険者と確認できれば一割増で売れるんだよ」

「成る程・・・メリットがあるのか」

おばちゃんは何も知らないハジメ達に、冒険者になった際のメリット

トを説明していく。宿や店では一〜二割——高ランクになれば、移動馬車を利用する料金が無料になったり等々

「と、いう事ね。どうする？登録しておくかい？登録には千ルタ必要だよ」

「う〜ん、そうか。ならせつかくだし登録しておくかな。悪いんだが、持ち合わせが全くないんだ。買取金額から差引くってことにしてくれないか？もちろん、最初の買取額はそのままがいい。俺とハジメだけでよろしく頼む」

「可愛い子が居るのに文無しなんて何やってんだい。ちゃんと上乘せしといてあげるから、不自由させんじやないよ？」

ハジメとルピは、有り難く厚意を受け取っておくことにした。今度こそ、完全に隠蔽したステータスプレートを差し出す。ユエとシアの分はまた機会があればという事にしておいた。隠蔽する事が出来無いユエ達となると、初日早々から目立ってしまう。それを避ける為の一時での措置をした

戻ってきたステータスプレートには、新たな情報が表記されていた。天職欄の横に職業欄が出来ており、そこに”冒険者”と表記され、更にその横に青色の点が付いている。青色の点は、冒険者ランク——上がるにつれて色が変わるのだ。因みに、戦闘系天職を持たない者で上がれる限界は黒だ。辛うじてではあるが四桁に入れるので、天職なしで黒に上がった者は拍手喝采を受けるらしい。天職ありで金に上がった者より称賛を受けるといいうのであるから、いかに冒険者達が色を気にしているかが分かるだろう

「男なら頑張つて黒を目指しなよ？お嬢さん達にカツコ悪ところ見せないようにね」

「ああ、そうするよ。それで、買取はここでいいのか？」

「構わないよ。あたしは査定資格も持ってるから見せてちょうだい」

ルピは、事前に宝物庫から取り出していた素材をバッグに入れていたので、そちらから素材を取り出す。品目は、魔物の毛皮や爪、牙、そして魔石だ。カウンターの受け取り用の入れ物に入れられていく素材を見て、再びオバチャンが驚愕の表情をする

「と、とんでもないものを持ってきたね。これは……樹海の魔物だね？」

「ああ、そうだ」

「樹海の魔物ってやつぱり珍しかったんだ」

「そりゃあねえ。樹海の中じゃあ、人間族は感覚を狂わされるし、一度迷えば二度と出てこれないからハイリスク。好き好んで入る人はいないねえ。亜人の奴隷持ちが金稼ぎに入るけど、売るならもつと中央で売るさ。幾分か高く売れるし、名も上がりやすいからね」

おばちゃんはチラリとシアを見る。おそらく、シアの協力を得て樹海を探索したのだと推測したのだろう。樹海の素材を出しても、シアのおかげで不審にまでは思われなかった。全ての素材を査定し金額を提示した。買取額は四十八万七千ルタ。結構な額だった

「これでいいかい？中央ならもう少し高くなるだろうけどね」

「いや、この額で構わない」

ルピはバッグに入れる様にながら宝物庫へ貨幣を収納して、門番

の男から聞いた事を尋ねた

「ところで、門番の彼に、この町の簡易な地図を貰えると聞いたんだが……」

「ああ、ちよつと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

一枚の地図がルピに手渡されて、臯月も釣られる様に覗き込む。中々に精巧で有用な情報が簡潔に記載された素晴らしい出来で、これが無料……ちよつと信じられない位だ

「これが無料？本当に良いの？十分お金を取れる位精巧なレベルなのだけど……」

「構わないよ、あたしが趣味で書いてるだけだからね。書士の天職を持つてるから、それくらい落書きみたいなものだよ」

「そうか。まあ、助かるよ」

「ありがとうございます」

ハジメは一礼をしてギルドを出て行った

「さて宿をとるか」

「どんな宿があるんですか？」

シアが頭の上から覗き込んでいる

「……」

「・・・賛成」

「私もここがいいですう」

「きまりだな」

一向は宿に向けて歩き出す

ギルドを出てから宿に向かうときにも周囲の奴から色々な感情が入り混じった視線を感じながら歩くこと数分（大体がリア充爆発しろか、あらいい男♡おいしく食べようかしら）である

「いらつしゃいませー、ようこそ」マサカの宿へ！本日はお泊りですか？それともお食事だけですか？」

「宿泊だ。このガイドブック見て来たんだが、記載されている通りでいいか？」

「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか？」

テキパキと宿泊手続きを済ませる女の子から告げられ、マダムの名前を初めて知った。ハジメは何処か遠い目をしている・・・あのマダムの名前がキャサリンだった事が何となくシヨックだったらしい

「あの～お客様？」

「あ、ああ、済まない。一泊でいい。食事付きで、あと風呂も頼む」

「はい。お風呂は十五分百ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが」

女の子が時間帯表を見る。ハジメと俺としては、男女別でゆっくりと入りたいと思っっているので二時間必要の旨を伝えると「えっ、二時間も!？」と驚かれたが、日本人たるハジメ達としては譲れない

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか？二人部屋と三人部屋が空いてますが・・・」

好奇心含む目でハジメ達を見る女の子。お年頃な彼女は気になっ
ているし、周囲に居るお客もソワソワしている

「ん〜・・・二人部屋を2つだな」

「そうですね。ユエさんとハジメさんで1つ、残りの1つに私とルピ
さんでいいですよね？」

「・・・わかってる」

「いやいや待ってお二人さん」

「はい？」

「当たり前のような顔をしてないで、外だとかこういうのはご法度なん
だから」

「・・・つまりこういう場所じゃなければいいってことだよな。ハジメ
？」

墓穴を掘ったハジメに対して、満足そうな顔しているユエ。ユエの
感情を表すなら「してやったり」といった感じか、

「あーもうルピさん行きますよ！」

いつの間にやらカギを手に入れていたシアに首根っこをつかまれ
2階の部屋に入れられた、

「ルピさん逃がしませんよ♥」

やばい俺の本能が言っている、ハアハア言ってるしこいつはやば
い、、、しかしドアは塞がってる、、、いやある1つだけある！死中に活
ありとはこのことか

「ルピさん~~~~~」

「じゃあな」

シアを蹴り飛ばすと窓開け、飛び降り市街地を走り、この町を全速力で走る

それよりも温厚と言われていた兎人族は何処へ？あの顔は完全に肉食獣だ、、捕まったら、、いや想像すらしたくないな、、ハジメは生きてるかな？

※※※ルピside↓ハジメside

シアが強引にルピのことをひっぱりながら上がっていった、、というかいつの間にチエクインしてるの！

「あのくすいません仲間が粗相を起こして、何か壊れていたらベ
n、、」

僕は運がないのかな？ん？なんでかってそれはね

「こ、この状況で男女で2人部屋・・・つ、つまり、この人たちはお互いで？す、すごい・・・はっ、まさかお風呂を2時間も使うのはそういうこと!?!お互いの体で洗い合ったりするんだわ！それから・・・あ、あんなことやこんなことを・・・なんてアブノーマルなっ！」

こうなったから、、

ちなみに少女はなにやらどこかへとトリップしていた。顔を真っ赤にしてぶつぶつとなにかをつぶやいている。

それを見かねた女将さんらしき人物が、少女の首根っこを掴んでずるずると引きずっていき、代わりに父親らしき人物が手早く手続きを済ませた。

ただ、その途中で「うちの娘がすみませんね」と言ったのだが、その目には「男だもんね、わかってるよ？」などといううれしくない理解の視線を向けられた。きつと、翌朝になったら「昨日はお楽しみでしたね？」などと言ってくるに違いない。

とりあえず、今はなにを言っても泥沼にはまっついていきそうな気がしたため、鍵を受け取ってさっさと部屋に向かった。あのバカな2人の部屋はそのままの部屋にしてもらった。

2階の廊下の壁に埋まっているシアを発見した、、、なんで？
「シアどうしたの？」

「うう、はっ！あれ？ハジメさん？ユエさん？」

「…何があつたの？」

あ、ユエが少し引いてる

「聞いてくださいよ！ルピさんを食べようとしたら蹴られて壁に埋まっ、逃げられて、、、」

あれ？なんかルピの方に同情したくなつた、、、多分解放者の家でユエに食べられたからかな、まあいいやとりあえず

「これからどうする？」

「…私達は服を買いに行ってくる。その時にルピも回収してくる」

「じゃ僕は食料とかを担当するよ」

「お願いします」

「さ、行こシア」

「はいー」

※※※ハジメ side ↓ユエ side

私とシアで服に買いに来て、店に入ったまではよかつただが、接客してくれた店員が、、、

「あらくん、いらつしやくい♥可愛い子達ねえん。来てくれて、おねえさん嬉しいわあ、たくつぶりサービスしちゃうわよおくん♥」

一言で言うと、化け物オカマがいた。

身長2 m強、全身に筋肉という天然の鎧を纏い、劇画かと思うほど

濃ゆい顔、禿頭の天辺にはチョココンと一房の長い髪が生えており三つ編みに結われて先端をピンクのリボンで纏めている。動く度に全身の筋肉がピクピクと動きギシミシと音を立て、両手を頬の隣で組み、くねくねと動いている。服装は・・・いや、言うべきではないだろう。少なくとも、ゴン太の腕と足、そして腹筋が丸見えの服装とだけ言うておこう。

後ろにいるシアも、あまりの異様に硬直している。

「あらあらあくん？ どうしちやったの？ せつかくの可愛い顔がもつたないわよ？」

そして今まで生きてきた中で怒らせてはいけない化け物オカマを怒らせてしまった。

「ば、化け物」

それを聞いた濃ゆい店長は怒りの咆哮をあげた。

「だあくれが伝説級の魔物すら裸足で逃げ出す、見ただけで正気度がゼロを通り越してマイナスに突入するような化物だゴルアアア!!」

それほど、店員怪物の怒りはすさまじかった。

「ヒイ、す、すいません」

私は逃げたかった。あのギルド員のおすすめだと聞いてきたが、やはり知らない人は信用してはいけない！ただ化け物は機嫌を直し

「わかってくればいいのよん♥それでえ？ 今日、どんな商品をお求めかしらあくん？」

脅威は去った。私は及び腰の上半泣きになっているし、シアに至っては完全に腰を抜かしてしまっている。

「後ろで座り込んでいる2人の服を見繕ってほしい。組み合わせは、店長に任せる」

「!!」

なんとルピがいたがあの怪物にお願いをしたらしい、、、えっ

「わかったわ。任せてえくん。」

「金は言い分を払う、30分後に来る」

「あ、ちよつと！おろしてください！って、抜け出せない!？」

「ルピさん！ユエさん！助けてください！」

もう限界

」

「ユエさん!?!目を覚ましてください」

遠くでシアの声がする

「後で来る」

※※※ユエside↓三人称

30分後ある程度の買い物を済ませた、ルピが店を訪れていた

結論から言うと、店長のセンスは抜群だった。

また、店の奥に連れて行ったのも、シアが粗相をしたと気づいて着替える場所を提供するためだったらしい。

そんな店長が選んだ服は、あのおばちゃんがおすすすめするだけあって、見事の一言だった。

シアの服装は、以前と変わらない露出過多なものだったが、実用性に富んだもので、ミニスカートの中にホットパンツも着用して機動性を重視している。

ユエも機動性重視だが、シアほど露出は多くなく、タンクトップの上にバトルベストを羽織り、こちらもホットパンツとアウトドアブーツを着用していた。

「ほら代金だ」

「また来てねえくん」

「機会があればな、宿に帰るか」

まだ陽は高い

服屋に金を払い俺は町をうろついていた

道には露店が沢山並んであり、とても活気があり歩いているだけでも楽しいと思える。

そこの1つの店に目が行った。

「何だこれは？」

「ああこれかい、これは『エスプーマ』だ」

「聞いたことがないな」

「そりやそうさ、これは庶民向けの品だからな、王国なんかは売ってないと思うからな、もしかしてあんた王国出身か？」

「まずい適当に受け流すか」

「ああ、しばらくの間王国で働いていたからな」

「そうなのか、勇者を見たのか？」

「遠目だな」

「しかしよ、エヒト様は本当に我々を助けて下さるのか、噂によると勇者は子供らしいしな、俺も子どもを持っているからな、、自分の子がそうなる考えるとゾツとするよ」

「確かにな、俺も結婚してーな」

「ハハハ、お前さん若いんだから、これからあつるて」

「ありがとよ、エスプーマーダースくれ」

「まけてやるよ」

鉄もどきで出来たバケツと1ダースまけてくれた

「へへっ、ありがとうよ」

「なに、立ち話の礼さ」

※※※※※

「これうまいな」

試しに飲んでみたら、地球のラムネに似ていた、懐かしいな

「兄ちゃん買ってー」

「いいぞ、1本でいいか？」

「うん」

「おっちゃんラムネ2本くれ」

「250円だ」

「250ちようどな」

「あいよーおおきに」

夏祭りだっけ、こんな会話をしたのは、早く帰るからな

※※※※※

「ありがとうございますー」

鉱石屋があつたのでそこで適当に鉱石を買った。もし万が一俺の技能の~~魔法銃弾製造~~が使えなくなったら、まずいと思い鉱石を買っている。中でもまあまあ硬さを誇る鉱石もあつた、10段階で評価すると、「7」という、そのため店にあるだけ買って弾を作ろうと画策しているところだ

というか鉱石屋なんかあるんだな。ある物は利用しよう。

それより大勢の人がこちらに向かつてきてないか？

「いたぞー！シアちゃんの持ち主だー」

「俺が先に行く！」

「俺だー！」

「お前ら黙れ！おい！そこのお前シアちゃんをかけて勝負しろ！」

ああ、なるほど奴隷の持ち主に勝てば行けると思つたんだろうか、この町いろんな意味で活気がありすぎる。とりあえず黙らせるか

「おいかかつてこいよ」

「なめてんじゃねぞー！」

「ふんっ！」

思い切り殴り飛ばした、気が付いたらそいつは壁に埋まっていた「んで、俺とやりたい奴は？どいつだ？」

「」「」「いえなんでもございません！」「」「」

「ならどいてくれるか？」

「「「はい、申し訳ありません」」」

何だったんだ？流石にハジメに作ってもらった武器を使うと流石にやばいし、

というかシアのことを知ってるから俺の所に来たとする、

これハジメの方にも行ってね？これはあいつらに聞かないとだめだな

宿の向かうとするか

※※※ルピside↓ハジメside

さて色々と買い物したし帰るとしようかな。ん？なんか足音が沢山聞こえるし何かこの先にあつたのかな？

食い逃げとかかな、まあ自分に関係ないことだし「いたぞ！あいつだ！」

あ、自分ですかそうですか

流石に町で実弾を撃つほど馬鹿ではないからゴム弾にでもしようかな

「おいお前！ユエちゃんを掛けて決闘しろ！」

何だろう、勝手に決めないでもらえますか

とりあえず面倒くさいからどうしようか、

そういえばルピが

『戦いにおいて相手が男であれば男の印を撃つといいぞ、必ず悶絶するからな』

『『はい』』

って言ってたような気がするから、ちょうどいいや目の前には的が沢山あるしね

「いいですよかかって来てください」

「イクゾー——！！！！」

「ユエのせい?」

「まあ、話があるなら話してくれないか」

首をかしげるハジメと話してほしいと願うルピ

「わかりました、私が話します」

「おっ、シア頼む」

「任せてください!」

でかい胸を張りながら話し始めたシア。その内容は頭が行かれていますようにしか感じなかった

※※※※※

「ありがとう、ユエ、シア」

「おい、ユエちゃんとシアちゃんがいいよな?」

そんなこんなで楽しそうに目的のものを探していると、無粋にも一人の男が話しかけてきた。

振り向いてみれば、その男の後ろにも数多くの男がおり、いつの間にかユエたちを囲んでいる。

亜人族であるシアにも“ちゃん”をつけて呼んでいることに訝し気な表情を浮かべながらも、話を聞く2人

「合ってるけど、それがなに?」

すると、声をかけた男が後ろを振り向いて頷くと、覚悟を決めた目でシアたちを見る。後ろの男たちも、同じような目でシアたちに前に進み出て、

「」「ユエちゃん、俺と付き合ってください!!」「」

「「「シアちゃん！俺の奴隷になれ!!」」」

一世一代の告白をした。

シアだけ口説き文句が違うのは、シアが亜人だからだろう。

本来なら奴隷の譲渡は主人の許可が必要なのだが、シアを落としてから交渉すればいいと考えているようだ。

一応、本来なら奴隷が主人に逆らうなどありえないのだが、宿での出来事が強烈すぎたせいでスルーしているらしい。

そして、そんな告白を受けたユエたちはというと、

「・・・シア、道具屋はこっち」

「はい、そうですね」

何事もなかったように歩みを再開した。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！返事は?!返事を聞かせてく・・・」

「断る」「断ります」

「ぐう・・・」

まさに眼中にないという態度に、ほとんどの男がうめいたり、何人かは膝から崩れ落ちている。

だが、諦めが悪い奴というのもどこにでもいるものだ。

「なら、なら力づくで俺のものにしてやるう!!」

暴走男の雄叫びに他の男たちも瞳にギンツと光を宿し、逃がさないように取り囲んでじりじりと迫っていく。

そして、最初にユエに声をかけた男が雄叫びを挙げながらユエに飛び掛かる。

対するユエは、冷めた目つきで一言つぶやく。

「……『凍枢』」

直後、男が頭を残して全身を氷の枢に閉じ込められ、バランスを崩して地面に顔面から落ちる。

周囲の男たちは、ノータイムで放たれた水属性上級魔法『凍枢』を目の当たりにしてひそひそと話し合う。幸い、全員が的外れの解釈をしている。

氷漬けの男に、ユエがわざと大きめに足音を鳴らして近づいていく。

「ユエさん？」

シアがこの後怒ること感じ取り確認を取ろうとするが

「……ん」

肝心の本人は軽く相槌を打っただけであった

ユエが声をかけるのと同時に、男を包む氷が溶けていく。

「ユ、ユエちゃん。いきなりすまねえ！だが、俺は本気で君のことが……」

解放してくれるのかと男は期待してユエに目を向けてなお告白の続きをしようとするが、途中で溶かされていく氷がごく一部であることに気づく。

その場所は、

「あ、あの、ユエちゃん？どうして、その、そんな……股間の部分だけ？」

そう、ユエが溶かしたのは男の股間の部分だけだ。他の部分は完全

に男を拘束している。

男も嫌な予感を覚えたのか、冷や汗をダラダラと流すが、少しも動けない。

「まさか、ウソだよね？ そうだよね？ ね？」という表情をユエに向けるが、ユエは無表情のまま位置を調整し、

「漢女になって反省しなさい」

股間の部分を思い切り蹴りぬいた。

アーーーーッ!!

この瞬間、町中に男の心からの悲鳴、もとい第二の服屋の店長の誕生の産声が響きわたった。

ユエたちを狙っていた男たちは完全におびえた視線をむけているが、そんな視線を気にすることなく道具屋へと向かった。

※※※※

「つてことがあったんですよおー」

流石のハジメとルピでも引いている

「なんとというかその、お疲れさん」

「う、うんお疲れ様」

「お二人は何かあったんですか？」

「残党が襲い掛かってきた」

「同じく」

「!?!」

「まあ明日には出るしいいだろ」

「それもそうですね」

「じゃあ、明日の朝集合な」

「わかった」

「ん、了解」

「お休み」

「おやすみですう」

「お休み」

「お休み、、、ハジメ早くしよ♡」

「!?!」

「ほどほどにな」

「何言ってるんですか、私たちもですよ」

「!?!」

「あつ、また逃げられましたー!?!」
その後俺はその辺の家の屋根で寝た

生きているゴーレム

ミレデイの大迷宮を発見！レベルは不明だ

〈町を出る前〉

「あ、シアさん。これ」

そうやってハジメ君はシアさんに直径四十センチ長さ五十センチ程の円柱状の物体を渡した。銀色をした円柱には側面に取っ手のようなものが取り付けられている。

「な、なんですか、これ？ 物凄く重いんですけど……」

「シアさん用の新しい大槌だよ。重いほうがいいでしょう？」

「へっ、これが……ですか？」

シアさんの疑問はもつともだ。円柱部分は、槌に見えなくもないが、それにしても取っ手が短すぎる。何ともアンバランスだ。

「その状態は待機状態なんです。取り敢えず魔力流して見て」

「えっと、こうですか？ ツ!？」

言われた通り、魔力を流すと、カシュン！ という機械音を響かせながら取っ手が伸長し、槌として振るうのに丁度いい長さになった。

「今の僕にはこれくらいが限界、腕が上がれば随時改良していくつもりだから。これから何かがあるか分からないかね。訓練をしているとは言え、たったの十日だからね。その武器はシアさんの力を最大限生かせるように考えて作ったから」

「ハジメさん……ありがとうございます！」

シアは嬉しそうにドリユッケンを担ぐ

「さて次は俺からプレゼントだ」

宝物庫から取り出したのはちよつとでかめの靴だ

「へ？」

「まあ、そんな顔をするな！回履いてみる」

靴のサイズはちょうどいい感じだった

「魔力を流してみろ」

バン！

謎の音とともにシアの体が浮く

「ひゃあああああ」

「まだ慣れてなかったな、ははは」

「これは何ですか!?!」

「これか、特殊弾薬を破裂させて、その爆発力を利用して空中でも動ける世にしたものだ、片方の靴につき2回までだからな、かんがえてやれよ」

「こうですかね」

「そう言い残すと自由に空を飛んでいるが

カシューー——

という音とともに落ちてきた

「回数は覚えておこうな」

「は、はい、あとありがとうございます!」

「喜んでもらって何よりだ」

「これは私からのお礼です！」
頬に温かみがある？

「???'」

「どうですか、わたしのお礼は」

プシュー——！

「あ、」

「ハジメさん——ルピさんが気絶しました——！」

「あーシア、キスとかした？」

「はい！」

「ルピはあんまり女性と関わった事があるんで、こ、こういう事を急にすると

頭がパンクするんだよ」

「そうなんですね」

「まあ、すぐに起きるよ」

「???'」

「ほら起きた」

「なんかうれしいことがあった記憶がするけど、とりあえず町を出て

大渓谷に向かうか！」

※※※※

現在、ライセン大渓谷には『死屍累々』と言う言葉がぴったりな程の地獄絵図が広がっていた。ある魔物はひしやげた頭部を地面にめり込ませ、またある魔物は頭部を粉砕されて横たわり、更には全身を炭化させた魔物……自分で言うもんじゃないやねえけどエグい事してんな。

「一撃必殺ですう！」ズガンッ！

「……邪魔」ゴバツ！

「道をあけて」ドパアン！

一体一体は弱いがかなりの数で襲ってくるため面倒な事この上ない。

「ふう……今日はこの辺りで休むか」

「日も大分落ちてきたね」

ブルツクの町から出発して3日程が経っていた。未だに迷宮の入口らしきものは見つからず、立ち往生している。

「ライセンの何処かにあるってだけじゃあ、大雑把過ぎないか？」

「まあ、大火山に行くついでなんですし、見つければ儲けものくらいでいいじゃないですか。大火山の迷宮を攻略すれば手がかりも見つかるかもしれないし」

「まあ、そうなんだけどな……」

「ん……でも魔物が鬱陶しい」

「ユエには好ましくない場所だからね」

愚痴を言いながら、その日の野営の準備を始める。野営テントを取り出し、夕食の準備をする。町で揃えた食材と調味料と共に、調理器具も取り出す。この野営テントと調理器具、実は全てハジメ謹製のアーティファクトだったりする。

野営テントは、生成魔法により創り出した「暖房石」と「冷房石」が取り付けられており、常に快適な温度を保ってくれる。それで、冷房石を利用して「冷蔵庫」や「冷凍庫」も完備されている。さらに、金属製の骨組みには「気配遮断」が付加された「気断石」を組み込んであるので敵に見つかりにくい。

調理器具には、流し込む魔力量に比例して熱量を調整できる火要らずのフライパンや鍋、魔力を流し込むことで「風爪」が付与された切れ味鋭い包丁などがある。スチームクリーナーモードキなんかもある。どれも旅の食事を豊かにしてくれるハジメの愛し子達だ。しかも、魔力の直接操作が出来ないと扱えないという、ある意味防犯性もある。

「神代魔法超便利」

調理器具型アーティファクトや冷暖房完備式野営テントを作った時の言葉だ。まさに無駄に洗練された無駄のない無駄な技術力である。

「出来たぞ〜」

ちなみに、その日の夕食はクルルー鳥のトマト煮である。クルルー鳥とは、空飛ぶ鶏のことだ。肉の質や味はまんま鶏である。この世界でもポピュラーな鳥肉だ。一口サイズに切られ、先に小麦粉をまぶしてソテーしたものを各種野菜と一緒にトマトスープで煮込んだものだ。

そろそろ就寝時間なので寝る準備に入る。最初の見張りは俺だ。テントの中にはふかふかの布団があるので、野営にもかかわらず快適な睡眠が取れる。と、布団に入る前にシアがテントの外へと出ていこうとした。

「どこ行くんだ？」

「ちよつと、お花摘みに」

「ああ」

トイレの暗喩だとわかってるので適当に手を振る。

「み、皆さん〜！ 大変ですう！ こつちに来てくださあ〜い！」

と、シアが、魔物を呼び寄せる可能性も忘れたかのように大声を上げた。シアの声がした方へ行くと、そこには、巨大な一枚岩が谷の壁面にもたれ掛かるように倒れおり、壁面と一枚岩との間に隙間が空いている場所があった。シアは、その隙間の前で、ブンブンと腕を振っている。その表情は、信じられないものを見た！ というように興奮に彩られていた。

「こつち、こつちですう！ 見つけたんですよ！」

「わかったから、引っ張らないでくれ」

「……うるさい」

「シアさん、魔物が寄ってきちゃうからちよつと落ち着いて？ ね？」

シアに導かれて岩の隙間に入ると、壁面側が奥へと窪んでおり、意外なほど広い空間が存在した。そして、その空間の中程まで来ると、シアが無言で、しかし得意気な表情でビシッと壁の一部に向けて指をさした。

「「ちよつと」」

“おいでませ！ ミレデイ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪”

壁を直接削って作ったのであろう見事な装飾の長方形型の看板があり、それに反して妙に女の子らしい丸っこい字でこう掘られていた。“！” “や♪” “のマークが妙に凝っている所が何とも腹立たしい。

「ユエ、シア、ハジメどう思う？」

「……ん、多分本物」

「ああ、間違いないと思う」

「ミ・レ・デ・イ・って書いてあるね」

そう、ここに書かれているミレデイという名前。これはオスカアの隠れ家にあった手記に記された名前、正直に言うところな人が解放者と認めたくないと思う自分がいる

つまりこれを書いたのは真正正銘、本物の解放者の一人であるミレデイ・ライセンってわけだ。

「いやあ、それにしても本当にあつたんですねえ。おトイ……お花を摘みにきたかいました」

能天気なシアの声が響く。元気なのはいい事だが、この状況では命取りになる。

「でも、入口らしい場所は見当たりませんか？ 奥も行き止まりですし……」

シアは、入口はどこでしょう？ と辺りをキョロキョロ見渡したり、壁の窪みの奥の壁をペシペシと叩いたりしている。

「おい、シア。あんまり……」
ガコンツ！ 「ふきや!?!」

壁の一部が忍者屋敷の如く回転し、巻き込まれたシアはそのまま壁の向こう側へ姿を消した。

「……嘘でしょ?..」

虚しい眩きがやけに響く。とりあえずはシアの消えた辺りの壁を触る。扉の仕掛けが作用して、扉の向こう側へと通される。中は真っ暗で辺り一体が見えない……

ヒュヒュヒュ!

無数の風切り音が響いたかと思うと暗闇の中をこちら目掛けて何かが飛来した。飛来した物を血狂いで弾く。

「なるほど、入ったら飛んでくる仕組みか」

「かなりの速度だね、並の人間なら今ので蜂の巣だろうね」

周囲の壁がぼんやりと光りだし辺りを照らし出す。奥には真っ直ぐに整備された通路が伸びていた。そして部屋の中央には石版があり、看板と同じ丸っこい女の子文字でとある言葉が掘られていた。

「ビビった? ねえ、ビビっちゃった? チビってたりして、ニヤニヤ」

「それとも怪我した? もしかして誰か死んじゃった? ……ぶふっ」

わざわざ、
「ニヤニヤ」と「ぶふっ」の部分だけ彫りが深く強調されているのが余計腹立たしい。

「シアはどこに行つたんだ？」

とりあえず回転扉を半分ほどに留めてシアを回収する。

「うう、ぐすつ、ルピギン……見ないで下さいい、でも、これは取つて欲しいでずう。ひつく、見ないで降ろじて下さいい」

何というか実に哀れを誘う姿だった。シアは、おそらく矢が飛来する風切り音に気がつき見えないながらも天性の索敵能力で何とか躲したのだろう。だが、本当にギリギリだったらしく、衣服のあちこちを射抜かれて非常口のピクトグラムに描かれている人型の様な格好で固定されていた。ウサミミが稲妻形に折れ曲がって矢を避けており、明らかに無理をしているようでビクビクと痙攣している。もつとも、シアが泣いているのは死にかけた恐怖などではないようだ。なぜなら……足元が盛大に濡れていたからである。

「着替え置いて置くから……早く着替えてくれ」

「うう……優しいがしみますう……」

そして、シアの準備も整い、いざ迷宮攻略へ！ と意気込み奥へ進もうとして、シアが石版に気がついた。顔を俯かせ垂れ下がった髪が表情を隠す。しばらく無言だったシアは、おもむろにドリユツケンを取り出すと一瞬で展開し、渾身の一撃を石版に叩き込んだ。ゴギヤ！ という破壊音を響かせて粉碎される石版。

よほど腹に据えかねたのか、親の仇と言わんばかりの勢いでドリユツケンを何度も何度も振り下ろした。砕けた石板の跡、地面の部分に何やら文字が彫つてあり、そこには……

“ざんね〜ん♪ この石板は一定時間経つと自動修復するよお〜
ブークスクス!!”

「ムキィ——!!」

「落ち着けシア多分この迷宮自体が煽りに来てると思うぞ！」

シアが遂にマジギレして更に激しくドリユツケンを振り始めた。
が、俺の言葉により、冷静さを取り戻したようだ

「すいません、ちょっと頭に血が上っていました、、」

どうやら前途多難のようだ

「また、あの2人桃色空間を展開してますね」

「バカップルは今日の晩御飯なしと、代わりにユエが作ったご飯を食べること」

「すみません、なんでもするのでそれだけは」

ハジメがこんなにも理由がある、以前ユエが恋人に料理をふるうというところで、料理を作ったのだがその時の食卓に出てきたのは、、「暗黒物質」だった

となったので、ユエの料理は一種の拷問となっている

「それがいやだったら、迷宮の攻略を急ぐぞ」

「そうだね」

※※※※

一番最初にやらかしたのは、意外にもハジメだった。

周囲を見ながら進んでいると、いきなりハジメの足元の床がガコンツと音を立てて沈み込んだ。

その瞬間、左右の壁のブロックの間からシャアアア!!と円形のノコギリのようなものが回転しながら飛び出てきた。嫌らしいことにそれぞれ高さが違っており、右の壁からは首の高さで、左の壁からは腰の高さで前方から薙ぐように迫ってくる。

「回避!」

俺がとつさに叫び、ハジメはマトリクスさながらに、ユエは普通にしゃがんで、俺はシアを抱えて床に伏せた。

なんとかノコギリを回避してホツとするが、俺は天井を見て冷や汗が噴き出た。

「ハジメ！前に跳べ！」

「っ!？」

ハジメは即座にユエとシアを回収して俺の言ったとおりの前に跳び、俺もテシアを抱えてハジメと同じ場所まで退避した。

すると、天井からギロチンな刃が無数に射出され、まるでバターを切るかのようにスーと床に入りこんだ。

「・・・どうやら、完全な物理トラップみたいだね。よく考えてみれば、こんなところで魔法を使ったトラップなんてできないし」

「・・・」

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

そう言い、手に抱えているシアを見ると顔を真っ赤にしながら俺の胸に顔を埋めていた。それを見た、ハジメとユエがにやにやとした顔を向けてきた。解せぬ

※※※※※

その後も俺たちは、トラップに気を付けつつ、マーキングしながら先を進んでいる。

今は、下につながる階段を進んでいた。

「ううう、何だか嫌な予感がしますう。こう、私のウサミミにピンピンと来るんですよ」

階段の半ばまで進むと、シアがそんなことを言い出した。シアの言う通り、ウサ耳がせわしなく動いている。

「頼むから、変なフラグ立てるなよ。そういうこと言うと、大抵、直後

に何か……」

ガコンツ

「……逆にスゲーよ」

「わ、私のせいじゃないすうツ!？」

「……このフラグウサギ!」

話している最中に嫌な音が響いたと思うと、いきなり階段から段差が消えてスロープのようになった。丁寧なことに、スロープには細かい穴が空いていてそこから油のようなよくすすべる液体が出ていた。

「まずい!、グラップル射出!」

適当に天井に突き刺しハジメの方も、ユエを抱えて靴の底の鉱石と義手にスパイク作り出してなんとか掴まった。そしてウサギがやらかす。

「うきやああ!？」

バランスを崩し流されたと思ったらM字開脚のままハジメの顔面に突っ込んだのだ。

その衝撃でスパイクが外れ、ハジメとユエ共々流されてしまう。

「ハジメ!?!くっそ、しゃあねえ!」

俺は仕方なしにグラップルを引き抜き、ハジメたちの後を追った。ハジメたちの方は、速度のせいもあってなかなか止まれないようである。

そこでふと前を見ると、その先が途切れていた。

「ハジメ!前!」

「っ、ユエー！」

ハジメの呼びかけに、ユエもその意図を正確に読み取る。

「んっ！」

「シア掴まれ！」

グラップルでシアを回収したあと、見えた横穴に2段ジャンプを駆使し入った

「来翔ッ！」

その間に、ユエは風初級魔法の「来翔」を発動し、数秒の間だけハジメを浮かばせる。その間に、ハジメは義手からアンカーを射出して天井にぶら下がっていた

と、
なんとかなったことに息を吐きつつ、なんとなく下の方を見ていると、

カサカサカサ、ワシヤワシヤワシヤ、キイキイ、カサカサカサ

「」「」……「」「」

体調10cmくらいのサソリが、隙間なくびっしりとうごめいていた。

目のいい俺は、その様子がより鮮明に映ってしまい、思わずフラググレネードを投げかけた、そしてサソリから目をそらすために上を見上げてみれば、

『彼等に致死性の毒はありません』

『でも麻痺はします』

『存分に可愛いこの子達との添い寝を堪能して下さい、プギヤー!!』

リン鉱石（この迷宮に使われている、発光する鉱石）によって、そんな風に書かれていた。わざわざ、リン鉱石の比重を高くしているの

か、暗闇の中でもはつきりと見える。

俺たちは揃って「相手にするな、相手にするな・・・」と心の中で唱えたあと、もう1度考えてみると、とあることで合点がいく、それは後で考えるところでしょう

* * *

その後も様々なトラップ（毒矢、硫酸入り落とし穴、ワーム型魔物 e t c）とうざい文を乗り越えながら進むと、今度は広い通路に出た。急な坂と緩やかなカーブで下るスロープになっており、おそらく螺旋状になっているんだろうな、と考えていると、ガコンツという音が鳴った。

だが、ここまで来てもう慣れたし、むしろ俺はどのようなトラップがくるかもある程度予想がつくようになってしまった。

そして、このスロープのような場所に仕掛けられるトラップと云えば、某考古学者の映画に出てくるあれに間違いない。

ゴロゴロと重たい音が上の方から響いてくる。

その方を振り向くと、通路の幅いっぱいの大きさの岩の大玉が転がってくるのが見えた。

まったくもって、定番のトラップだな。

「ピッチャー投げた！」

投げたのはフラググレネードだけど

ドカン！という音とともに爆発四散した、

「ルピさくん！流石ですう！カツコイイですう！すつごくスツキリしましたあ！」

「・・・ん、すつきり」

「なにしろ、これでゆつくりこの道を・・・」

ハジメの言葉が途中で遮られた。

なぜか？再びゴロゴロと重い音が鳴り響いてきたからだ。

ハジメとシアは笑顔のまま固まり、俺とユエが頬を引きつらせて背後を振り返ると、

「うそん」

今度は黒い金属の球が転がってきた。
しかも、今回はそれだけではない。

「ハジメ。あれ、なんか変な液体ばらまいてるぞ。しかも、通路とか溶けてるし」

そう、金属球には細かい穴が空いており、そこらなにやらヤバめな液体が噴出されていた。しかも、液体が付着したところからシューと音を立てて煙をあげている。

「ふうく・・・」

俺とハジメはため息をつき、笑顔でユエたちの方を向いて、

「逃げるぞ！ちくしょう！」

全速力でスロープを下っていった。

ユエたちも慌ててそれについていく。

「いやああああ!! 轆かれた上に溶けるなんて絶対に嫌ですうく！」

「・・・ん、とにかく走って」

そうこうしているうちに、スロープの終わりが見えてきた。だが、その先は途切れている。

だいたい予想がついた。

「ハジメ！出たら思い切り上に跳ぶぞ！」

「了解！」

ハジメも俺の言葉にうなずき、ユエとシアを抱える。俺も、ティアを抱きかかえた。

「しつかり掴まってるよー!」

「きゃあっ!?!」

そして、俺とハジメは思い切り跳び上がった。ハジメはシアを思い切り放り投げてナイフを射出し、すぐにアンカーを射出して壁に撃ちこむ。俺も、先ほどと同じように魔法陣を展開して足場にし、ハジメの隣くらいに黒刀を壁に突き立てる。

下を覗いてみれば、やはり底は溶解液で満たされており、金属球も音を立てて溶けていった。

「『風壁』」

ユエは風魔法の『風壁』を展開して飛び散る溶解液を防いだ。

俺とハジメは辺りを警戒するが、とりあえずは落ち着いたようで一息つく。

とりあえず、俺たちは溶解液のプールを飛び越えて部屋の地面に着地した。

その部屋は長方形型の奥行きがある大きな部屋だった。壁の両サイドには無数の窪みがあり騎士甲冑を纏い大剣と盾を装備した身長二メートルほど像が並び立っている。部屋の一番奥には大きな階段があり、その先には祭壇のような場所と奥の壁に荘厳な扉があった。祭壇の上には菱形の黄色い水晶のようなものが設置されている。

「・・・なーんか、それっぽいところに出たな」

「いよいよミレディの住処に到着かな?それならそれで万々歳なんだが・・・」

「いやあ、そうはならんだろ。見てみるよ、周りの騎士甲冑。嫌な予感しかないぞ?」

「・・・大丈夫、お約束は守られる」

「それって、襲われるってことですよね？」

「全然大丈夫じゃないじゃない・・・」

そんなことを話しながら進むが、やはり約束は守られた。

もはやおなじみとなったガコンツという音が鳴ると、ガシヤガシヤと金属音をたてながら、壁の窪みから騎士たちが出てきた。

その数、およそ50体くらいか。

「ははっ、ホントにお約束だね。動く前に壊しておけばよかったか？」

「いや、今さらだろ。ともかく、やるしかなさそうだな」

「んっ」

「さ、さすがに数が多すぎませんか？いや、やるしかないんですけども」

俺とハジメ、ユエはやる気満々だが、シアとティアは少々腰が引き気味のようにだ。

そんな2人に、ハジメと俺が声をかける。

「大丈夫だ、シア。お前は強い。それは、俺が保証してやる、だから、下手なことは考えずに好きだけ暴れる。やばい時は必ず助けてやるさ」

「わかりました！」

そうして、俺たちは騎士たちに向かって突撃した。

「「へ？」」

扉にC4もどきつけて、少しだけ離れた場所で起爆した。扉は木っ端みじんになっており、何体かの騎士が巻き添えになっておりいい感じに道が開けている。

「全員あの扉に行ってくれ！殿は俺がやる！」

残弾はまだまだある、いい感じにフラットラインも異常はない

騎士たちは扉の向こうに行かせるかとは言わんばかりと言わんばかりの勢いでハジメたちに向かっていた。

「俺を無視するんじゃないよ！」

宝物庫からCARを取り出し近接戦に向いている状態になって撃ちまくる、近づかれても、殴ったり、蹴ったりするなど、残機無限騎士を相手どっていた。

ハジメたちを見るともう扉前にいた。あとは俺が行くだけだ。騎士たちにグレネードを5個ほどプレゼントしておいた、この迷宮の主に料金を請求しなくては、、、

扉の前からハジメの援護射撃を行ってくれていた。助かるな

そして扉前について。ユエとシアは扉の向こうの部屋に入っており、ハジメと俺は適当にグレネードをぶちまけておいた。そして部屋の中にいた2人が部屋の扉を閉めてくれた。

「ふう、なんとかあったか」

「そうだね、それにしては・・・」

部屋の中は、何もない四角い部屋だった。よく観察してみるが、手掛かりのようなものは何もなかった。

「これは、あれか？これみよがしに封印しておいて、実は何もありませんでしたっていうオチか？」

「・・・ありえる」

「ハハハ」

「けど、そうだとすれば、どうやってここから出るんだ？」

「せめて、他に扉のようなものがあればいいのだけど・・・」

4人がかりでなにか手掛かりがないか入念に調べる。

ガコンツ

すると、もう聞き飽きた例の音が聞こえてきた。

「」「ツ!」「」「」

仕掛けが作動すると同時に、俺たちの体に横向きのGがかかる。

「っ!?何だ!?!この部屋自体が移動してるのか!?!」

「・・・そうみたツ!?!」

「うきや!?!」

「うおっ!?!」

俺が推測すると同時に、今度は真上からGがかかる。

急激な変化に、ユエが舌を嚙んだのか涙目で口を押えてふるふるし、シアは転倒してカエルのようなポーズで這いつくばっていた。俺は壁走りや2段ジャンプをしながら

がんばった。

部屋はその後何度か方向を変えて移動しているようで、約40秒程してから慣性の法則を完全に無視するようにピタリと止まった。ハジメは途中からスパイクを地面に立てて体を固定していたので、急停止による衝撃にも耐えたが、シアは耐えられずゴロゴロと転がり部屋の壁に後頭部を強打した。方向転換する度に、あっちへゴロゴロ、そっちへゴロゴロと悲鳴を上げながら転がり続けていたので顔色が

悪い。どうやら、相当酔ったようだ。後頭部の激痛と酔いで完全にダウンしている。ちなみに、ユエは、最初の方でハジメの体に抱きついていたので問題ない。

俺の方も、揺れる部屋の中で上手くバランスをとったのでなんとか無事である。

ただ、体にかかるGが途轍もなかったこともあって、俺の方はしばらくはまともにも立てそうにない。この部屋のおかげでこの迷宮のコンプセクトがわかった。普通の人の目的と、パイロットの迷宮の目的の違いが分かった

「ふう、ようやく止まった・・・ユエ、大丈夫？」

「・・・ん、平気」

「俺は何とか無事だ」

「少し休憩する、あの部屋の中で壁走りやら2段ジャンプをやりまくったからな」

部屋の方を見てみると、特に変化はなかった。だが、扉から出たらそこは違う場所だろう。

「ルピさん。私に掛ける言葉はないの？」

そんなことを考えていると、シアが青い顔をしながら俺たちの方へと向かってきた。

「いや、今のお前に声かけたら弾みでリバースしそうだしな・・・それなら無理せず休んどけ」

「そうだね、少し休憩してからここを調べようか」

「すいまごごうつぶ」

「ほれみる、いいから少し休んでろ」

「うう、は、はい。うつぶ」

部屋の隅で四つん這いになってうずくまるシアを横目に、俺たちは部屋の中で休憩しながら部屋を確認したのだが、やっぱりなにもなかった。どうやら、扉の先に進まなければいけないようだ。

「どんな奴がいるんだろうか？」

「・・・操ってたヤツ？」

「もしかしたら、ミレディ本人って可能性もあるのかな？」

「いや、ミレディは死んでるはずだろ？」

「どうだろう。俺たちのわからない神代魔法がまだ5つはあるわけだし。もしかしたら、不老不死の秘法みたいな神代魔法もあるかもしれないしね？」

「・・・何が出ても大丈夫。ハジメは私が守る」

「ありがとうユエ、僕もユエを守る」

「イチヤイチャしとるなバカップル、シアいけるか？」

「まだしんどいですが、いけます」

とりあえず、俺の方も立てるくらいには回復したから、部屋の外に出る。

「さあ、何でも来い！」みたいな感じで扉を開け放つと、

「・・・ん？なんか見覚えがないか、この部屋？」

「・・・気のせい、ですよね」

「・・・たしかに見覚えがあるね、この部屋」

「・・・物凄くある。特にあの石板」

その部屋は、中央に石板のある部屋だった。左側には通路もある。ということは、つまりだ。

「最初の部屋・・・みたいですね？」

シアの言う通り、どこからどう見ても最初の部屋だった。

いや、そんなことがあるはずがないと周りを見渡すが、石板に書いてある内容にすごい見覚えがあった。

すると、床に光る文字が浮かび上がってきた。

まさか、と思いつながら読んでみると、

『ねえ、ねえ、今、どんな気持ち?』

『苦勞して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知った時って、どんな気持ち?』

『ねえ、ねえ、どんな気持ち? どんな気持ちなの? ねえ、ねえ』

『あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します』

『いつでも、新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの心遣いです』

『嬉しい? 嬉しいよね? お礼なんていいよお! 好きでやってるだけだからあー!』

『ちなみに、常に変化するのでマツピングは無駄です』

『ひよつとして作っちゃった? 苦勞しちやった? 残念! プギヤアー!』

「!!!」
「!!!」
「!!!」

ストレスが限界突破した俺たちは、迷宮全体に届けといわんばかりに叫んだ。

その後、この怒りを原動力にして俺たちはライセン大迷宮攻略を再開した。

ルピside↓??side

「まさかこの時代にあの子の意思を引く継ぐ者がいたんだ、」

モニター越しにそんな言葉こぼす小さな解放者は1筋の希望を見出していた

「粗削りだけどあの子の残した物をあそこまで使いこなすなんて、それに私が作り出した騎士たちを貫通するほど強力な弾丸、しかもそれを宝物庫に入れて持ち運びにも適している、、ん? なんで2人が宝物

庫を持っているの？、、おーちゃんの所をクリアしたの？そうだとしたら、かなりの時代が経つんだ、、あの子たちの怒るところは面白いなあ、久しぶりに笑ったなあ。もしここまで来るんだったら本気でやらないと、、このデバイスはどうするの？教えてよクーパー」

発見ミレデイ

ミレデイの大迷宮と思われる場所を攻略し始めて、1週間が過ぎた。

幾度となくリセットをされすぎたからか、パターンがわかり始めてきた。そのため今は、安全な部屋で休憩をしている。ハジメの足の中でユエが寝てたり、シアは俺の膝枕で寝ている。

「ルピ起きてる?」

「ああ」

「さつき考え事してたよね」

「おう」

「何を考えていたの?」

「この迷宮のトラップを考えているとなパイロットのためにあるような迷宮のような感じがする」

「?」

「わからなくなって当然だよな。例を挙げて言うとなればサソリとの添い寝ゾーンだな。あそこははつきり言って2つの突破手段がある。

1つ目はユエのように魔法を無理やり使って向こうの所に行く方法、多分これが一番

betterな方法だ。

2つ目は俺と同じ格好でなければできないと思う」

「つまり」

「パイロットの技能を使いここを突破せよ、という感じかもな。俺の感覚的には『リアルガントレット』って言った方がしっくりくるんだよな」

「ガントレット?」

「まあなんだ、めっちゃくちゃ簡単にいうなれば障害物レースだ」

「つまりここはルピからすれば障害物レースみたいな感じ?」
「ってこと」

「極端に言えばな。正直下にあるどのタイルを踏んだらどんな罠があるかもわからないから、イメージするなら地雷が埋まっているところを走りこんでいる的な」

「なるほど」

「正直に言うところここまでパイロットの対策をしているとすれば、ミレディは過去にパイロットにあったようにしか思えない、つまり迷宮の主と接敵するときにはタイタン対策、パイロット対策をしているように思う、今回の戦いで俺は足を引っ張るかもしれん、その時のリカバリを頼むぞ、ハジメ」

「わかった、でもルピも無茶しちやいけないよ」

「肝に銘じておく」

「むにや・・・あう、ルピしゃん、大胆ですう、お外でなんてえ・・・皆見てますよお」

「アハハ」

「こんな場所でこんな寝言を言える魂胆を俺は見習いたい、ほら起きろ」

「んんっ?」

「で?お前の中で、俺は一体どれほどの変態なんだ?お外で何をしでかしたんだ?」

「

「えっ?・・・はっ、あれは夢!?そんなあく、せつかくルピさんがデレた挙句、その逆るパトスを抑えきれなくなって、羞恥に悶える私を更に言葉責めしながら、遂には公衆の面前で、痛!?!」

お仕置き替わりの俺のチョップで勘弁しておいた

「お前の中での俺はどんな人物なのかを教えてほしいところなんだが」

愚痴を言わなきややつていけねえーとりあえず先に進むか

※※※ルピside↓三人称

再び様々なトラップを乗り越えてきた一向は、一週間前のゴーレムたちに襲われた部屋までやってきた。何気に、あの時から二度目だ。しかも、今度は最初から封印部屋の扉が開けられている。その向こう側も、大部屋ではなく通路になっている。

ちなみに、ハジメからゴーレムが再生したのは「感応石」というゴーレムに使われている素材が原因だと聞いた。これは魔力に反応

して定着・遠隔操作ができるらしい。

つまり、ゴーレムを遠隔操作している人物がこの大迷宮の主、ということだ。

「ここか・・・また包围されるのも面倒だし、一気に走り抜けるぞ！」

「幸い、扉は開いてるから、罠の可能性もゼロではないけど、他にやることもないからね」

「んっ！」

「はいですう！」

一向は最初から全速力で部屋の中を走り抜ける。

当然、部屋の中央辺りでゴーレムも反応して動き出すが、前方のゴーレムをハジメが銃撃で蹴散らす。

そうして一向はさらに加速しつつ一気に走り抜け、扉を潜り抜ける。

が、ここで予想外の事態が起きた。

「げっ!?入ってきた!？」

「天井を走ってる、だと!？」

「・・・びっくり」

「重力さん仕事してくださいー!」

ゴーレムの方も扉をくぐりぬけて追いかけて来て、さらに天井やら壁やらを走ってきているのだ。シアの言う通り、完全に重力が仕事していない。

だが、ルピだけが落ち着いて相手を解析し始めた。

(一つはゴーレムを操作している魔法だと考えれば、もう一つはあの変態機動を可能にしている魔法に違いない。そして、シアが言ったように重力が仕事していないのなら、重力に干渉する魔法だと考えてもおかしくない)

「・・・なるほど、魔法か」

「魔法って、どういうこと!?!」

「あのゴーレムたちに、ゴーレムの操作とは違う魔法がかかっている。状況から考えて、おそらく重力に作用しているみたいだな」

「でも、重力を操る魔法なんて聞いた事がない!?!」

ユエが珍しく声を大にして会話に入ってきた

「普通の魔法にないってだけ。おそらく、神代魔法だな。この迷宮のものかどうかは知らないけど」

ルピは『異世界だから無理難題なことは魔法のせい』と思っている節があるせいか、あるいはこの世界における物理演算がそこまで発達していないからか、こういうことはなぜかあたる

そんなことを話しているときもゴーレムたちは突撃してくるのだが、ハジメのドンナーや1週間で作り上げた『タドミール』がゴーレムを粉碎していく。

タドミールは対集団戦を考慮され作られた銃、毎分1600発をも発射することが可能なサブマシンガン、その特徴は驚異のマガジンサイズ、1マガジンに45発をも弾が入るといふ、ライトマシンガンもびつくりなマガジンとなっている

その代わり反動が強烈というデメリットを有しているが、サブマシンガンなのでそこまで、遠くの敵を狙い撃つことはないだろうという考えのもと作られた

粉碎されたゴーレムは、地面に落ちずに天井や壁に激突しながら転がっていく。

「ん・・・まるで“落ちた”みたい」

「なら、当たりだな。おそらく、壁や天井を起点に重力を発生させているんだろう」

「・・・なんていう分析力」

「やっぱり、ルピにはかなわないね」

「でも、どうして最初から使わなかったんですかね？」

(シアはの疑問ももつともだが、そこまではわからない。それを考えるには情報が不足しすぎている。)

「わからない。あの魔法を使うのに相当の魔力を使うのか、俺たちを見極めていたのか、あるいはその両方か。だが、考えても意味は分からない、それこそこの主に合わないとな。とりあえず前を向いた方がよさげだな」

俺の言葉にシアが前を向くと、そこでは先ほど落下したゴーレムたちが再構築されていた。さらに、盾を構えてい前列と盾役を支える後列のゴーレムが壁を作っていた。どうやら、一列だけでは突破されると学習したようだ。

「まあ、再構成できるなら当然だよね」

「ちっ、面倒だな」

「むう・・・ハジメ」

「は、挟まれちゃいましたね」

皆の答えは決まっている。

「ハジメ、任せた」

「ったく、わかってるっての!」

そうやってハジメは、手元に長方形のロケット&ミサイルランチャー・オルカンを出現させた。

十二連式の回転弾倉が取り付けられており、ロケット弾は長さが30cm近くあるため、その分破壊力は通常の手榴弾より高くなっている。弾頭には生成魔法で「纏雷」を付与した鉾石が設置されており、

この石は常に静電気を帯びているので、着弾時弾頭が破壊されることで燃焼粉に着火する仕組みだ。

「耳塞げ！ぶっぱなすぞ！」

「ん」

「ええ、何ですかそれ!？」

「馬鹿！早く耳塞げ！」

シアは何が起こるのかわからないようであったふたとしている横からルピが強引に耳を塞ぎこみ、ユエ、は言われたとおりに耳を塞ぐ。そして、ハジメはオルカンの引き金を引いた。

バシユウウ！という音とともにロケット弾が発射され、ゴーレムの隊列に直撃した。

次の瞬間、すさまじい轟音と爆発がおこり、ゴーレムは跡形もなく砕け散った。

ハジメの言う通りに耳を塞がなければ、鼓膜が破れていただろう。ちなみになのだがルピのヘルメットはフラググレネードの爆発音を近くで聞いても

音を調節してくれる。何だこのヘルメット

「あ、ありがとうございますう!!」

シアはウサ耳を真つすぐに伸ばしたままだった場合のことを考えて、ルピに感謝の念を唱えていた。

そんなこんなでさらに走り続けること5分、また新しい場所が見えた。

道自体は途切れているが、10m先に足場が見える。

「ここを抜けたら飛ぶぞ！」

ルピの言葉に、ハジメたちが頷く。

ともかく、俺たちは思い切り跳んだ。
が、またも予想外の事態が起こる。

正方形の足場が横にスライド移動したのだ。

「「は？」「」」

「来翔！」

「グラップル射出！」

「ジャンプブーツ起動！」

そこでユエがギリギリのタイミングで上昇気流を発生させ、ハジメはなんとか足場の端に手をかけることができた。

ルピは普通に足場の上に立っており、シアに至ってはジャンプブーツをヴォルと呼び始めた

「ナ、ナイス、ユエ」

「ルピさん、これすごいですよ！」

「・・・もつと褒めて」

「なんというか、いろいろとやばいな」

俺たちが入った部屋は、超巨大な球状の空間だった。直径2 km以上はありそうだ。

そんな空間には、様々な形、大きさの鉱石で出来たブロックが浮遊してスイーと不規則に移動をしているのだ。完全に重力を無視した空間である。

さらに問題なのが、この部屋に入ってからゴーレムの動き、重力操作がどんどん巧みになっているのだ。

俺1人だけでは、10体ものぎきれないくらいに。

「ここに、ゴーレムを操っている奴がいるのかな？」

「だろうな。となると、どこにいるのか・・・」

ハジメと話しながら、おそらくいるであろうゴーレムの操り主を探

すためにハジメは宝物庫から片眼鏡を取りだし、ゴーレム魔力の本流を探っていたのだが

「逃げてえー！」

「「「!?」」」

シアから絶叫が響いた。

「なにが?」と問い返す余裕もなく、全力でその場から離脱した。

直後、赤熱化する巨大な何かが落下してきて、ルピたちがいたブロックを破壊し、勢いのまま突き進んだ。

それを見た俺たちは、冷や汗を流す。もしシアの忠告がなかったら、あのブロックともども吹き飛ばされていただろう。

「シア、助かった。ありがとう」

「・・・ん、お手柄」

「さすがに、今のはやばかった、..」

「えへへ、*未来視*が発動して良かったです。代わりに魔力をこっそり持って行かれましたけど・・・」

どうやら、シアの固有魔法である*未来視*（言葉通り、未来を見ることができる固有魔法）のおかげで助かったようだ。

だが、このまま終わりではないようだ。

先ほどの隕石モドキを確認するために下を覗くと、猛烈な勢いで上昇してきた。それは瞬く間にルピ達の頭上に出ると、その場に留まりギンツと光る眼光をもって俺達を睥睨した。

「おいおい、マジかよ」

「・・・すごく・・・大きい」

「・・・ユエ、その言い方はどうかと思うよ」

「お、親玉って感じですね」

ハジメはどこでそのネタを知ったのかと疑問に思っていたりする、

ユエの発言は無視するにしても、実際かなりの大きさだ。

俺たちの前に現れたゴーレムは、全長が20m弱はある。右手はヒートナックルとでも言うのか赤熱化しており、左手には鎖がジャラジャラと巻きついていて、フレイル型のモーニングスターを装備している。

俺たちが巨体ゴーレムに身構えていると、周囲のゴーレム達がヒュンヒュンと音を立てながら飛来し、ハジメ達の周囲を囲むように並びだした。整列したゴーレム騎士達は胸の前で大剣を立てて構える。まるで王を前にして敬礼しているようだ。

すっかり包囲されハジメ達の間にも緊張感が高まる。辺りに静寂が満ち、まさに一触即発の状況。されにこの状況下でBTを宝物子からだし次の瞬間には戦闘が始まる緊張感にまで跳ね上がった空気を破ったのは、

「やほ、はじめまして！みんな大好きミレディ・ライセンだよお
〜」

「「「「・・・」」」」

巨体ゴーレムの、ふざけた挨拶だった。

迷宮の主との勝負

「やほ〜、はじめまして〜！みんな大好きミレデイ・ライセンだよお〜」

「「「「「」」」」」」

凶悪な装備と全身甲冑に身を固めた眼光鋭い巨体ゴーレムから、やたらと軽い挨拶をされた。

なんだ？この世界にAIが導入されたのか？

ただ、性格に関しては、あのうざい文を考えたやつだと考えればまだ納得できる。

問題なのは、あのゴーレムが名乗った名前だ。

「あのねえ〜、挨拶したんだから何か返そうよ。最低限の礼儀だよ？全く、これだから最近の若者は・・・もつと常識的になりたまえよ」
「あんな非常識なトラップを考えた奴に言われたくはない。それよりもだ、ミレデイ・ライセンだって？」
「そだよ〜」

「・・・マジで生きてる？、いや、違うと思う。魂とかを神代魔法でゴーレムに定着させた？、つてところかな」

「お、おおう。まさか1発でそこまでばれるとは思わなかったぞ」

「ハジメさすがだな」

「パイロット注意してください、ここはお茶会ではありませんよここは戦場です」

なんか注意された

「さすがタイタンだね、搭乗者のミスを補うのもあなたの任務？」

「おほめにお預かり光栄ですが、これは私の任務ではなく独自の思考

回路により導き出された答えです」

「え？お前思考回路なんかあったの？」

「ありましたよ」

マジか、まああっても問題なし

「話してるところ悪いけど、いろいろと聞きたいことがあるんだけど。どうしてゴーレムで延命なんてしたんだ？」

「そうだね、それは『もつと詳しく知りたければ、見事私を倒してみよー』って感じかな」

「なら、お前の使う神代魔法はなんだ？それくらいは教えてもらってもいいと思うが」

「それも教えなくい」

「・・・結局、碌な説明ももらってないだが」

「ははは、そりゃ、攻略する前に情報なんて貰えるわけないじゃん？迷宮の意味ないでしょ？」

・・・巨体のゴーレムが指をたててメツ！しているのが非常に腹が立つ。後ろからも、ユエが「・・・性格だけが問題」と呟いているが、俺も同感だ。

だが、押さえろ。ここでするだけ情報を引き出す必要がある。

「で？どこまで俺の質問に答えてくれるんだ？」

「そうだね、なら、その前にこっちの質問に答えなよ」

瞬間、背筋がぞわつとした。

最後の言葉だけ、いきなり雰囲気が変わった。先ほどまでの軽薄さを潜め、逆に真剣さを帯びる。

どうやら、真剣に答える必要があるようだ。

「なんだ？」

「目的は何？何のために神代魔法を求める？」

嘘偽りは許さないという意味が込められた声音で、ふぎけた雰囲気など微塵もなくミレディは問いかけてくる。もしかしたら、こつちが本来の彼女なのかもしれない。

そんなミレディに対して、俺たちも真剣に答える。

「元居た世界に帰るために神代魔法を集めている、だいたいこの世界に勝手に呼び出されて、戦争しろって言われてるんだ、勝手に呼ばれるぐらいなら勝手に帰っても問題はないだろ。これが俺たちが神代魔法を求める理由だ、どうだ審判者？」

「ん、そっかそっか。なるほどねえ、別の世界ねえ。うんうん。それは大変だよねえ。よし、ならば戦争だ！見事、この私を打ち破って、神代魔法を手にするがいい！」

「・・・脈絡がなさすぎない？なにがどうなって『ならば』になるのか教えてほしいよ」

「うるさいよ、中二病のくせに」

「「あ」」

ハジメに言っただけじゃない言葉、堂々の1位の言葉言いやがった

「ハジメ、怒ってる？」

「ユエさんそれは雰囲気で察しましょう」

「死ね」

戦いの火ぶたは小さい発砲音が切った

※※※※

バン！バン！

「ちっ！弾丸のサイズが小さすぎて効いていない！」

「落ち着け、銃を変えたらいいだけだろ。シユラーゲン構えて応戦してくれ。」

BTいくぞー！」

「やつとですか」

「やつとパイロット乗ったのを見れるのかー、早く見せて」

野郎、挑発しやがって腕一本はもうぞ

「イスナイン発砲！」

「え？何々そのロードアウト！そんなのあるのは聞いていないよ！」

「だって俺が作り出した物だからなあ！」

バキバキという音立てながら腕が壊れた

「すつきりしましたよルピさん、あともう一本も砕いてやりましょう！」

「やるねえー、でもこの程度対策してないとも？」

その辺に浮いている立方体から素材を吸収し、腕を再構築しはじめ5秒後には腕とモーニングスターを持ちながら無傷のミレディが立っていた

「What the f*ck！」

「どうしたの？そっか君たちの低能な脳ではわからないっかw」

「心折れるぐらいまで弾丸の雨を食らわせてやるよ！」

ダダダダダダダダダダ！

カチ！カチ！

「弾切れか、リロードする」

ここで弾切れか、イスナインはリロードに時間がかかるのが欠点
と思っていたが、こんな場面において隙をさらすのはやばいな

「ルピー！」

片眼鏡をかけたハジメが話しかけてきた

「あいつの魔力を見たから心臓部にコアがあると思う！」

「次のマガジンからは狙い撃つがまだリロード中だからな、だれか橋
頭保をやってくれないか？」

「わかりました！ユエさん行きますよ！」

「んっ！」

駆けだしていく2人、シアだけ愚直に直線的に走っていくが、ヴォ
ルやユエの魔法で

最短ルートでミレデイに接近し、ヴォルに残っている弾薬でミレ
デイの心臓部まで飛び上がり、力任せに振り下ろした。

その瞬間に俺たちは勝ちを確信したが、

「!？」

「どうしたの？w死んだと思った？残念生きてるよW」

声からでもわかる絶対にニヤニヤしてると思うあいつ

「表面は粉々に砕けたんですけど、中から変な装甲が出てきました！」

「シアさん多分それアザンチウムの装甲だと思う！」

「あれどうやって倒すんだ？」

「一つ案があるんだけど時間がかかるからカバー頼める？」

「任せろ」

「…、任せて」

「任せてください！」

しかし上を見た瞬間に死を悟った

上から大量の立方体が降り注ぎ始めていたから

「BT覚悟を…、決めるぞ」

「…、了解です」

立方体は俺たちの所を的確に狙ってきている、ベストは全員助かる

のがいいかもしれないが、間違いなく誰かは助からない。シアの固有魔法は少し先の危険を察知するかもしれないが、まだそのラインに達していないからかもしれない。というよりもどうするか、、、仕方がない

「お前ら恨むなよ」

「え？」

「、、？」

「何するんですか！ルピさん！」

「あそこに投げてるぞ、日本に帰れよ！」

「落ち着いて大丈夫だから——」

「待って——」

「ルピさん——」

「やれるところまでやりますか」

「そうですね」

上からの立方体にイスナインを撃ち始めたがすぐに弾切れになり、そのあと上からの立方体によって押しつぶされた

※※※ルピside↓シアside

「いてて、皆さん大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」

「、、なんとか」

「ルピさん、は、は、？」

目の前にある立方体が乱雑に積まれた山のようなものからバキバキに折れたBTの腕や足が出ているのを見て、ルピさんの最期を悟ってしまいました。

「嘘、ですよね」

「ル、ピ？」

「、、ほんとに？これは夢だと言うオチとかじゃないよね」

「この程度のパロットなんだ、残念」

「許さない！」

「待ってシアさん」

「、、シア止まって」

何も考えずに突っ込んでいきましたが

「怒りに身を任せるのは流だよ」

「うっ」

壁に勢いよく弾かれて、肺の空気が全部出て一瞬呼吸ができなくなっても、必ずあいつだけはあいつだけは！

「ミレディー——！」

「落ち着いてシア！」

「ユエさん？離してください！あいつだけは殺さないとじゃないとルピさんに顔向けできないんですよ！」

「わかってる、悔しいのは分かってる。けど今その怒りをぶつけるのは違う、それこそ生かしてもらったルピに失礼、それに今ハジメがこ

の話をするためだけにヘイトを全部買ってもらっているから、早く立ち直って！」

そうでした、私はみんなの足を引っ張るためについてきたんじゃないじゃない、

私の恋人はまだ生きてると信じて、目の前にいる敵を始末しないと「すいません、ユエさん、ハジメさん気が動転していました、まだルピさんはまだ生きています！少しの確立だけでも信じたいんです！」

「確かにそうだね、あのバグった人は生きてると思うよ」

「、、、 案外無事だったりして」

「確かにありえますね」

「私のことなめているようにしか思えないんだけど」

「とりあえずあなたは殺します」

「絶対に」

「、、、 殺す」

「その根性は認めてあげる」

モーニングスターを振りまっただけでも私達の行動に制限が、、多分私のドリュケンでしか砕けないと思います、しかもフルパワーで殴らないと、、ハジメさんとユエさんはここで戦うのは苦手なので、、私がかきつけをつかまないと

「ハジメさん、ユエさん作戦があるんですが」

「それでいいこう」

「…、了解」

「行きましょう！」

「死に行くものに最大限の敬意を」

「うっ」

「うっかしい」

「邪魔くさいです！」

ハジメさんは杭打ちみたいなのにエネルギーをチャージしている最中なので、ほぼ動けないのを分かってモーニングスターを振り回しているんでしょう。正直もう限界が近いです。

でもあいつは絶対に絶対に殺す！

※※※シアside↓ルピside

「く…、そが」

なんとか生きているが、長くはなさそうだな

「はは、俺は情けないな、なあBT」

「…、申し訳ありませんパイロット、私がもう少ししっかりしていたら」

「いいんだ、BTお前はよく頑張った」

ああ俺の人生はここで終わりか…、いやだいやだいやだ！

俺の目的は何1つ達成できていなのに諦めている？ここで折れたらパイロットとしても、友人としても、恋人としても、何1つ守り切れていない…、

ドクン！ドクン！ドクン！

まだ心臓は動いてるんだ！何ができるか考えろ！

宝物庫から試験管入りの神水を口元に出した、手は動かないからなバリバリ！という音とともに試験管をかみ砕き神水を飲む

「なんとか、、、危機は、、、脱したか」

ドクン！ドクン！ドクン！

「後はここから出るかだな」

ドク！ドク！ドク！

「？何だこの感じ？」

もつと力があればみんなを助けられる、もつと守る力があれば、俺が弱くなければ

もつと俺が強かったら、もつと力があればみんなを救えた、、、ならもつと力を、あいつらを守る力を！

ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！

俺に、、、みんなを守る力を！

ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！

何だこれ、魂の奥底から湧き出てきたちというよりもともとあったものが何かに押さえつけられていたものがあるべき姿になった感じだ、まるでご都合展開じゃないか、まあいいか皆を守れるかもしれないんだからな、

「BT、援護は可能か？」

「推定、右肩のミサイルは使えると推測」

「援護を頼む」

「リミットオーバー!」

そして手に結界で作った日本刀を片手に再び戦場に戻る

※※※ルピside↓ルピside

苦戦していた3人はまるで奇跡が起きたといわんばかりの顔で、
元々あつた瓦礫の山を見つめていた

「ええ、なんで生きてるの!?!」

「なんでだろうな?とりあえず、ハジメあとどれだけ時間がかかる?」

「2分あれば十分」

「わかった2分稼いでやる、シア・ユエお前らはハジメの守りだ!」

「了解(です)ー!」

「そんなことやらせないよ〜」

「隙だらけだ、このでくの坊」

「なんでここで魔法を堂々と使ってるの!?!」

「なんでって言われてもな、使えるもんは全部使うぞ戦場の鉄則じゃないか?」

「なるほどね〜でも忘れたわけじゃないよね?ここなら無限に体の再構築ができるということを」

「なら無限につぶすまで」

(BT足を狙って撃て)

(了解)

「再構築してる暇はあるかな！」

両腕を切り落とされ焦っているところにBTのミサイルをもろに受けてしまい、ミレディは一時的に行動できなくなってしまうた
「まだ動けるの!?そのタイタン」

「私のボディは特注なので、簡単にはつぶれません」

「ルピどいて、『破断』！」

「こんな魔法じゃ私は倒れないよ〜〜」

相も変わらずこんな状態で煽りやがって、まあすぐにこの余裕は崩れるはずだ

『「凍極」！』

「え？」

ミレディ自分に起こったことが理解できずに困惑している。ざまあw

「ユエありがとう！」

ハジメが手に持っているそれは全長2m半程の縦長の太筒で、外部には幾つものゴツゴツした機械が取り付けられており、中には直径20cmはある漆黒の杭が装填されている。下方は4本の頑丈そうなアームがつけられており、ハジメがレバーを引くと同時に連動して動き出した。

「パイルバンカー」。それがハジメがブルツクの町で作った最終兵器。

ハジメはそのまま、直下の身動きが取れないミレディ・ゴーレムをアームで挟み込み、更に筒の外部に取り付けられたアンカーを射出した。合計6本のアームは周囲の地面に深々と突き刺さると太筒をしつかりと固定する。同時に、ハジメが魔力を注ぎ込んだ。すると、

大筒が紅いスパークを放ち、中に装填されている漆黒の杭が猛烈と回転を始める。!!!!

「くたばれえ!!!!!!」

おそらくハジメの全魔力を使い込んだ1撃、これでおそらくミレデイも倒れるはず、、、

「ハ、ハハ。どうやら未だ威力が足りなかったようだねえ。だけど、まあ大したものだよお？4分の3くらいは貫けたんじゃないかなあ？」

ミレデイが若干固い声で余裕を装う。

「どうやら、この環境下で本来の威力を發揮できずに、惜しいところで貫通できなかったようだ。」

だが、それでもよかった。

「おらああああああ!!!!!!」

俺は咄嗟に日本刀の結界を解除して、どでかいハンマーを即席で結界を使って作り上げた!

ハジメのパイロバンカーに当たりミレデイの装甲を砕いたが、なぜか手には同じ感触が残っている

「よくやったね君たち、でも誰も全部の装甲が1枚と言っていないよ〜」

「シア後は頼んだ」

「ああああああ!!」

シアの絶叫が響き渡る。

その一撃に自分のすべてをかけるとでも言わんばかりに、ドリユツケンにありつただけの力を込めているのが見える。

そして、轟音と共に浮遊ブロックが地面に激突した。

その衝撃で遂に漆黒の杭がアザンチウム製の絶対防御を貫き、ミレデイの核に到達する。先端が僅かにめり込み、ビシツという音を響かせながら核に亀裂が入った。

地面への激突の瞬間、シアはドリユツケンを起点に倒立すると、くるりと宙返りをする。

そして、身体強化の全てを脚力に注ぎ込み、遠心力をたっぷりと乗せた蹴りをダメ押しとばかりに杭に叩き込んだ。

シアの蹴りを受けて更にめり込んだ杭は、核の亀裂を押し広げ……遂に完全に粉碎した。

ミレデイの目から、完全に光が消える。

戦いの後

「終わったか？」

「終わったね」

「、、頑張った」

「何とか勝てました、、ルピさん」

「なんだ？」

戦いが終わり俺はヘルメットを脱いで座っていた

パン！

まあ、ぶたれるのにも仕方がないか

「なんで、なんで、私達をかばうようにして死んでいったんですか！」

シアは泣きながら怒っていた、罪悪感を感じてしまう、、

「・・・」

返す言葉が見つからない

「本当に、本当に生きていて良かったです、、、」

シアが抱き着いてきた、俺が生きているのを確認して安心したからか抱きつきながら泣き始めてしまった

「わあああんうわあーん——ん」

シアの頭を撫で続けた

しばらくすると泣き止んだ、ただ泣き終わった後こっちに最高の笑顔に向けてきた、

こっちも笑顔を返しておいた

「あのおく、いい雰囲気悪いんだけどおく、そろそろヤバイんで、ちよつといいかなあ〜？」

そこに聞き慣れた声。

見下げると、ミレデイの瞳にいつのまにか光が戻っていた。
フラフラの体で再び構えるが、ミレデイの方からわたたと弁明する。

「ちよつと、ちよつと、大丈夫だつてええ。試練はクリア！あんたたちの勝ち！核の欠片に残った力で少しだけ話す時間をとっただけだよお、もう数分も持たないから」

言われて見てみると、体はピクリとも動いておらず、瞳の光も明滅を繰り返していた。

ミレデイの言う通り、本当に時間が残されていないのだろう。

「何を話すつもりだ？言っておくが、神を殺せて話なら聞かないぞ」「言わないよ。言う必要もないからね。話したい、というより忠告だね。訪れた迷宮で目当ての神代魔法がなくても、必ず私達全員の神代魔法を手に入れること・・・君の望みのために必要だから・・・」

ミレデイの言葉が、徐々に不鮮明で途切れ途切れになっていく。
だが、それよりも疑問がでてくる。

「全部、か。だったら、他の迷宮の場所も教えてくれないか。今の時代だと、失伝してほとんどわからなくなってるからな」

「ああ、そうなんだ・・・そっか、迷宮の場所がわからなくなるほど・・・長い時が経ったんだね・・・うん、場所・・・場所はね・・・」

いよいよ声が弱々しくなってきたミレデイは、どこか感傷的な声でポツリポツリと語っていく。ここで氷雪洞窟も裏付けが取れ、中には驚くような場所にあるものもあった。

「以上だよ・・・頑張つてね」

「・・・ずいぶんとらしくないね。そんなしおらしいキャラだったの？」

さっきまでのうざい口調は？」

今のミレデイの口調は、先ほどまでの軽薄なものとは違い、戦う前に質問してきたときのような真面目さで話している。

やはり、こっちが素なのだろうか。

「あはは、ごめんね。でもさ……あのクソ野郎共って……ホントに嫌なヤツらでさ……嫌らしいことばかりしてくるんだよね……だから、少しでも……慣れておいて欲しくてね……」

「そいつはありがとう、ただ神とは戦わないぞ」

さすがに無視できなかったのか、俺が横やりを入れたが、それでもミレデイは真剣なまま話した。

「……戦うよ。君が君である限り……必ず……君は、神殺しを為す」

「……意味がわからん。そりゃあ、帰るのが邪魔されたらな……」

「ふふ……それでいい……君は君の思った通りに生きればいい……君の選択が……きつと……この世界にとつての……最良だから……」

困惑する俺に、なおも語りかけ、とうとうミレデイの体が青白い光に包まれていた。おそらく、タイムリミットなのだろう。

そこに、ユエが近くに寄って、ミレデイのほとんど光を失った目を覗き込んだ。

「……何かな？」

ささやくような声に、ユエが言葉を送った。

「……お疲れ様。よく頑張りました」

「・・・」

それは、ミレディと比べればはるかに幼い俺たちが言うには、少々不適切かもしれないが、まぎれもない労いの言葉だった。

「・・・ありがとうね」

「・・・ん」

「じゃあなミレディ、安らかに眠れ」

「おやすみなさい」

「お疲れ様です」

「・・・さて、時間の・・・ようだね・・・君達のこれからが・・・自由な意志の下に・・・あらんことを・・・」

そう言いながらミレディは淡い光となって天へと消えていった。

辺りを静寂が包み、余韻に浸るように俺たちが光の軌跡を追って天を見上げた。

「・・・最初は、性根が捻じ曲がった最悪の人だと思っていたんですけどね。ただ、一生懸命なだけだったんですね」

「せめて、これで今までのことが報われてほしい」

「・・・ん」

「さようなら、..」

それはさておき、向こうを見てみれば、壁の一角が光っている。見た限り、おそらくは魔力の光だ。

光ってる場所に向かい、ブロックを足場に跳んでいこうと着地すると、俺たちが飛び乗った浮遊ブロックが滑らかに動き出し、光っている部分まで俺たちを運んで行った。

「わわっ、勝手に動いてますよ、これ」

「これは、、便利だな」

「・・・サービス？」

「あの激戦の後だしサービスだと思いたいね」

「ミレデイのことだしトラップがあったり」

「さすがにないと思いますが、」

10秒もかからず光る壁の前まで進むと、その手前5m程の場所でピタリと動きを止めた。すると、光る壁は、まるで見計らったようなタイミングで発光を薄れさせていき、スッと音も立てずに発光部分の壁だけが手前に抜き取られた。奥には光沢のある白い壁で出来た通路が続いている。

浮遊ブロックは、そのまま通路を進んでいく。どうやら、このまま奥まで運んでくれるようだ。

そうして進んだ先には、ハルツィナ樹海で見た紋様と同じものが彫られた壁があった。

俺たちが近づくと、これまた勝手に壁が動いて奥へと誘う。

誘われるままに進んでいくと、そこには、

「やつほー、さつきぶりー！ミレデイちゃんだグベツ!？」

思わず殴ってしまった、さらにハジメが思いつき握りつぶしている

「やめてー！痛いー！つぶれるーイダダダダ！」

「なんでお前に痛覚があるんだ？」

「やめてやめて！本当にこの世から消えちやう！」

「さすがにやめてやれ、」

「えーでも」

「すべて終わったら何やってもいいから、待て！」

「はーい」

犬に命令した気分だ、なんで友達に命令してるんだ？

雑談しながら俺たちが魔法陣の上に立つと、ミレデイが何やら操作し始めた。

すると、俺の脳内に直接、神代魔法の知識や使用方法が刻まれていくのを感じた。さすがにハジメとユエと俺は経験済みなのか動揺しなかったが、シアは慣れない感覚に思わずビクリツと震えてしまっ

た。

そんなこんなで、ものの数秒で刻み込みは終了し、あっさりと俺達はミレディ・ライセンの神代魔法を手に入れた。

「これは・・・やっぱり重力操作の魔法か」

「そうだよくん。ミレディちゃんの魔法は一・応・重力魔法。上手く使ってね・・・って言いたいところだけど、白髪君とウサギちゃんは適性ないねえ。もうびつくりするレベルでないね！」

「・・・」

「ハジメ、、、」

明らかに悲しんでいた、やっと攻撃的な魔法を手に入れたと思ったら、、、これだからなあ、南無

「まあ、ウサギちゃんは体重の増減くらいなら使えるんじゃないかな。白髪君は・・・生成魔法使えるんだから、それで何とかしなよ。金髪ちゃんとパイロット君は適性ばつちりだね。修練すれば十全に使いこなせるようになるよ」

「なるほど」

「あとこれは私からのご褒美だよ！」

目の前に大量の鉱石が現れた、おそらく宝物庫からだ

「これの確認しといてねえ、パイロット君ちよつといいかな」

「ああ」

少し離れたところにて

「で、なんだ？」

「色々聞きたいことがあるけど、あの戦いの中で急に結界魔法を使えるようになったの？あと間違いなくほかにも何か開花してると思う」

「正直、わからないただ、、、」

「ただ？」

「蓋をされていた何かが、もとにあった形になった感じがする」

「なるほどねえ、ちよつとタブーだけど魂魄魔法を手に入れたら自分

の魂を見て、そこに答えがあると思う」

そこからはどうやってこの兵装を手に入れたか、この世界に来たなどの話をして終わった

「さて、皆さんそろそろお別れの時間だよ〜」

「これどうやって帰るんですか？」

「こうだよ〜」

「てめえ！これはっ！」

「嫌なものは、水に流すに限るね☆」

そう、明らかに便器だった。

このまま流されるのは、これ以上になく屈辱だ！

「このっ・・・！」

「来・・・」

「ヴォル・・・」

「させなあ〜い！」

「ごぼっ・・・てめえ、俺たちや汚物か！いつか絶対破壊してやるからなあ〜！」

「ケホッ・・・許さない」

「殺つてやるですう！ふがっ」

「くっそ、首洗つて待つてろよ！がぼっ」

「頑張つてね、みんな」

※※※※※

「どうわああああー！！」

「おわああああー！！」

「んっーっー！！」

ミレディによって流された俺たちは、ようやくどこかにでてきた。

どうやら、かなり遠くに流されたようで、森の中の湖らしき場所のようだ。

俺たちは、ほうほうの体で岸へと上がる。

「ゲホツ、ガホツ、くくつ、ひでえ目にあつた」

「みんな大丈夫？」

「ケホツケホツ・・・ん、大丈夫」

なぜかシアからの返事が返ってこない。

「シア？どこだ！」

「シア、どこ？」

「まさか・・・」

まさかと思いつつ湖の方を見てみると、シアが底の方に沈んでいくところだった。

気を失っているということと、ドリユツケンの重さのせいで浮くことができないのだ

湖に飛び込み、シアを岸にあげ救命活動を開始するが、ハジメが「あつ」的な顔してた、解せぬ

心臓マツサージと人工呼吸を繰り返し、そして何度か目の人工呼吸の後、遂にシアが水を吐き出した。顔を横に向け器官に水が入らないようにしておく。

「大丈夫か？」

「・・・」

気が付いたようで安心していたが、いきなり顔を持たれ口づけされた

この後の記憶はない

新たな街へ

ハジメ side

うわーシアさんって思ったより大胆なんだ、横で見ているユエも顔を真っ赤にしながら今日の前の光景を見てるよ。

「hふおうあshふおいあほfvほほ」

ほらね

僕は知っている、過去にルピの妹に会ったことがある。その時ルピの頬つぺたにキスをしていた、多分僕の予想だけど妹は軽いスキンスリップの感じでしたと思うけど、やられた肝心の人は脳の処理が追いつかず立ち尽くしていた。

それも軍人顔負けの立ち方だった。そのあとすぐに意識はこつちの世界に帰ってきたけどその時に発した第一声は、

「へ？俺にき、キスしたのか」

それに対し妹も首を縦に振るもんだからルピの頭がショートしてその場で気絶するもんだから、いったん僕の家まで運び込んで起きるまで寝かしといた思い出があるなあー

さて思い出はいったん置いておいて、目の前に置かれている状況を整理しよう

目の前にはキスされて脳の処理が追い付かなくなったルピ、おそらく気絶している

そしてそれをやったシアさん、、、なんか顔が赤くなってない

あつ（察し）良かったねシアさん

「…これどうするの？」

「多分2人とも動けないと思うから町の近くまで車で向かって、近くの森らへんで降りて門番の人には冒険者の依頼帰りという設定にしておこう」

「車の目撃者はどうする?」

「新種の魔物をタイムしたことにしておこう」

「ん、了解」

※※※※ハジメside↓ユエside

ふーなんとか町について宿まで帰ることができた、、シア大胆だった、今度ハジメにも試してみよう。それはさておき、さつきシアが起きてきた。ハジメに何かを頼んでいる感じだった、、なんだか嫌な予感がする、、こういう勘というものはよく当たる、なんでだろう?

今日の夜もハジメニウムを摂取しないと、フッフ誰にもハジメは渡さない

ただ神聖な夜は邪魔されたくないから罨でも仕替えておこうかな、、獲物は引つかかるかな、、掛かったら子の町は狂ってる、、あとシアは頑張ってる

※※※ユエside↓三人称

さて、色々と問題?があつたが時刻は夜になった。

この宿の受付も終了し、各々が眠る時刻である。しかしこの時刻に起きる者もいる。

「ん、、ん?ここは?」

服を脱がされシャツとパンツだけの状態になっているルピ

(なんだこれ?)

手に違和感があり見てみると

(手錠?とそれを括り付けている金属の柱、、あいつらが黒幕か?それともあいつらやられたのか?だけどこの手錠を見る感じハジメだよな、何やってるんだ)

手錠を無理やり引きちぎろうとするが

(硬すぎるだろ、、これどんな鉱石使ったんだよ、、とりあえずこの後に期待だな、、なぜか嫌な感じがするんだがな、、頼むぞ)

尚、この手錠とそれを括り付けている柱はハジメが作り、括り付けている縄はユエが魔法で補強したものである

ガチャという音とも何か部屋に入ってくる

「誰だ」

この部屋は明かりがついておらず、窓もカーテンによって外の明かりも入ってこない

本来であれば技能によって見えているが、気絶しすぎたせいかもしれないが、体が使えておらず、本調子とまではいかないようである

「ルピさん、大丈夫ですか？」

「シアか、ああ大丈夫でも今まで寝てたせいで本調子とまではいかなかったが」

「ルピさんは覚えてないんですか？」

「気絶間際のことか？」

「はい、そうです」

「すまん、よく覚えてない、、、なにかあったのか？」

(本当に覚えてないって言うのは本当なんですわ、、、なんでこんなに耐久性がないんでしょうか、、、ここまでお膳建してもらったんです。ここまで来たら最後までやり切ってやります！)

「ルピさん」

「なんツ!!!」

言葉を返そうとしてシアの方に顔を向けたルピの顔をがっちりつかんで口づけをした

「何を？」

「何ってキスです、私のファーストキスはなんかその場の成り行きで取られちゃったので」

顔が赤くなり、普段はピーンとしているうさ耳は、今は恥ずかしからか折れている

「あッ、そうかお前がなんか溺れてたから助けるために人口呼吸をして、あー思い出した。シアあれはお前の命を救うために必要な行動だったってことを分かってくれ」

「それでも私の初めてを奪ったんですから、」

「まあ、それは…仕方ないとは言え…申し訳ないと思っている…」

「それでこの機会に一気に距離を詰めたくて、それで私が今からルピさんのことを食べようと思つて、」

もはや最後の方は声が小さすぎてなにを言っているかがわからな
いほどである

「は？」

しかしここにいるのはチートそのものであるのできちんと聞こ
えている

「いやいや流石にまずい、逃げないと。あ…」

「そうです、そのための手錠なんですから」

「さて、シア。よく考えてみろここでそんな行為をやって子どもでも
出来たらどうする」

「大丈夫です！ユエさんにそういう魔法をかけてもらいましたし、もしかして私のことを思って、逃げていたんですか」

「そうだ」

「じゃあ、キスされて気絶するのは？」

「それは…俺が女性に対する耐性がないから…」

「ルピさんってそういうところが苦手なんですね」

「詳しいところはハジメに聞いてくれ…、俺からは言いたくない」

「さて、話がずれましたが食べてもいいですよね」

シアの口からハアハアと吐息が漏れている、『待て』をされている犬みたいである

「…わかった本当に俺でいいんだな、初めての相手が」

「問題ないですよ、私が好きになった相手が初めての相手なんですから、嫌な気分になるはずがないじゃないですか」

「この手錠さえといてくれたら、あとは流れに身を任せようと思う」

「わかりました」

そう言いカギで手錠を外し、

「シアおいで」

「はっ」

2人の影が1つの影となり、その影は朝まで1つだった

※※※三人称↓ハジメside

「あ、ルピおはよう」

「おはよう、ハジメ」

「そういえば昨日シアさんが

『ハジメさんちよつといいですか?』

『いいけど、どうしたの?』

『ルピさんが暴れてもち千切れない手錠を作ってほしいんです』

『その理由は?』

『ルピさんと一緒に夜を過ごそうとすると逃げられるので、その』

『なるほど、まあ人外の領域片足突っ込んでいるルピは止められるかわからないけど、頑張って作ってみるよ』

『ありがとうございます!!でもなんで作ってくれるんですか?』

『ルピって毎回こういう時に逃げるけど、昔は妹にキスされるだけで倒れてたからこの先も考えて慣れてもらおうと思って』

『なるほどですね』

『後で取りに来てね』

『わかりました、なんか我儘みたいなのを言ってますいません』

「おーいハジメ聞いてるか?」

「ああごめんごめん、つでなんだっけ?」

「いや昨日俺の手錠作ったのお前か?」

「うん、怒ってる?」

「まあ、言いたいことは山ほどあるけど、ありがとう
?」

「なんで頭に『?』浮かぶんだよ」

「てつきり説教が始まるもんだと思っていたから、、」

「まあ確かに説教をしてやろうと思ったけど、いつまでもシアを待たせるのもダメだったのかもしれないから、そこを押してくれたのは感謝してるから今回は説教はなし」

まあ実際にルピは奥手なところがあるからこつちから発破をかけるのと何もしないことが、長年の経験からわかっていたから今回のことを利用したけど成功したし、なにより

親友が彼女との進展があったことには素直に祝福をしようつと

「おめでとう、ルピ」

「?」

「関係が進展したことを祝っただけだよ」

「ああ、ありがとう。シアは俺の特別な存在だ」

おめでとうシアさん、思い人から『特別』って言われたよ

※※※※ハジメside↓ユエside

「…おはようシア」

「おはようございませす、ふあ〜〜眠いです」

そうか昨日は初夜だった、、これを見る感じ成功したっぽい?

「聞いてくださいよ、ユエさん」

「？」

「ルピさんのスイッチをオンにすると、獣でした」

「う、うん」

まさかのそっち側の人!?なんかルピは奥手だからもつと丁寧な感じがしたけどスイッチが入るとそういう感じになるの、、、知らなかった

でもそういうえば模擬戦の時も戦闘スイッチが入って容赦がなかった、、、つまりオンとオフを切り替えているのかな?今度聞いてみよう

「それでお二人は？」

「…食堂で話してた気がする」

※※※ユエside↓三人称

「あ、いましたいました」

「ん。」

「お、おはよう」

「2人ともおはよう」

「今からキャサリンの所行くけど来るか？」

「この町でお世話になったから、最後に挨拶をしに」

「私はいきます!ユエさんは?」

「私も行く」

「決まりだな」

「あ、そうだそうだこれ」

そういつてハジメからルピに渡されたのは腕輪のようなものが渡された

「何だこれ？」

「それをつけていると『錬成』ができるようになるものだよ、ただ僕の劣化版になっちゃけど」

「助かる、これでさらに進むな」

「なにか言いましたか？」

「いやなんでも、それよりも向かうか」

宿からギルドに向かう際、色々な変態・変人・狂人がいたが目的のギルドに到着した一行

「おや、今日は4人一緒かい？」

受付カウンターに近づくと、すつかり顔なじみになった受付嬢のおばちゃんことキャサリンが声をかけてきた。

ちなみに、なぜキャサリンが意外そうに聞いてくるのかは、最近はギルドに行くときは男女で別れることがほとんどだったからだ。

「ああ、今日には町を出るからな。世話になったところに一通り挨拶をしにいつてるところだったからな。ついでに、目的地関連で依頼があれば受けるが、どうだ？」

ちなみに、ギルドに世話になったというのは、ハジメが生成魔法の組み合わせの試行錯誤のために、ギルドの大部屋を貸してもらったことがあったから。しかも、このことをキャサリンに相談した時に、無償

で使ってもいいと提案されたのだ。キャサリンには、この町に来てから世話になりっぱなしだ。

その他俺たちの重力魔法の鍛錬は郊外で行った。その際にミレデイの戦いで壊れたBTの修理もしておいた。その時にほとんどの工程を終えて秘密兵器は実戦投入も視野に入れている状況である。

「そうかい。行っちゃまうのかい。そりゃあ、寂しくなるねえ。あんた達が戻ってから賑やかで良かったんだけどねえ」

「勘弁してくれ。宿屋の変態といい、服飾店の変態といい、ユエとシアとに踏みたいとか言って町中で突然土下座してくる変態どもといい、〃お姉さま〃とか連呼しながら2人をストーキングする変態どもしかも殺そうとしてきたやつもいたな、、碌なヤツいねえじゃねえか。出会ったヤツの7割が変態とかどうなってるんだ？」

「ついでに言えば、僕とルピに突っかかってくる狂人も2割くらいいたかな？」

この町に戻って来てから、いつの間にか4つの派閥が生まれていった。

〃ユエちゃんに踏まれ隊〃、〃シアちゃんの奴隷になり隊〃、〃お姉さまと姉妹になり隊〃である。この3つの派閥が、それぞれの目標を達成できた人数で競っているらしい。

ただ、目標の達成のために、なりふり構わず往来で「踏んでください！と叫んで土下座をするありさまは、ドン引きの一言しかでなかった。

シアに至っては、「亜人族は被差別種族じゃなかったか？普通、奴隷になるのはシアの方じゃないのか？」と全員で首をひねったが、深く考えないことにした。

この中でも、最も過激だったのが最後の集団で、前に一度、ナイフを持った少女が「お姉さまに寄生する害虫が！玉取ったらあああー！！」と突っ込んできたこともあったくらいだ。

ちなみに、その少女は流石にやばかったので思いつきりルピに投げ

飛ばされた。そこからは直接的な関わりは消えたが、なぜかルピの水が若干紫色の水にすり替えられたりもしていた。

それはさておき、これらが7割の変態で、後の2割の馬鹿どもが懲りずにユエ・シアを手に入れようとルピとハジメに決闘を申し込む輩のことだ。

後に聞いた話で、前にブルツクの町に滞在した時にも言い寄らており、その時は一人の男の股間をユエが蹴り飛ばしたことで沈下したのだが、一部の男たちは今度は外堀を埋めようとハジメとルピに話しかけてきたのだ。

もちろん、彼らに渡す気はさらさらないので、「決闘」の「け」を発音した時点でハジメは錬成を行い落とし穴に、ルピに至っては相手を物理で黙らせたり、空に向かって投げ飛ばしていた。

一部では賭けがあったらしい、、、この町は頭のネジが飛んでいるようである

そんなこんなで、ユエも言い寄ってくる男の股間をつぶすことをやめなかったため、ユエが「股間スマッシュシャー」という不名誉な通り名、ルピとハジメで「決闘スマッシュャーズ」と呼ばれるようになり、ひとくくりで「プレデター」と呼ばれるようにもなった。

シアが「私の存在感が薄いですう・・・。」と泣いていた、、、

「まあまあ、何だかんだ活気があったのは事実さね」

「こんな活気は御免だ、」

キャサリンは苦笑いしながら言うが、当事者の俺たちからすればいい迷惑だ。

「で、どこに行くんだい？」

「フューレン」

こんな雑談をしながらもテキパキと仕事をこなすキャサリンは、やはり優秀なのだろう。

フューレンとは、中立商業都市のことだ。俺達の次の目的地は「グリュエン大砂漠」にある七大迷宮の一つ「グリュエン大火山」である。そのため、大陸の西に向かわなければならぬのだが、その途中に中立商業都市「フューレン」があるので、大陸一の商業都市に一度は寄ってみようという話になったのである。

「うーん、おや。ちょうどいいのがあるよ。商隊の護衛依頼だね。ちょうど空きがあと2人分あるよ・・・どうだい？受けるかい？」

キャサリンが差し出した依頼書を俺が確認する。

依頼主は中規模な商隊のようで、十五人程の護衛を求めているらしい。

ユエたちは冒険者登録をしていないので、俺とハジメの分でちょうど埋まるのだが、もしかしたら大所帯になると言われるかもしれないな。

「連れは同伴してもいいのか？」

「ああ、問題ないよ。あんまり大人数だと苦情も出るだろうけど、荷物持ちを個人で雇ったり、奴隷を連れている冒険者もいるからね。まして、ユエちゃん、シアちゃんも結構な実力者だ。2人分の料金でもう2人優秀な冒険者を雇えるようなもんだ。断る理由もないさね」
「なるほど、どうする？」

確認のためにハジメたちに意見を聞いてみると、

「いいんじゃない？」

「・・・急ぐ旅じゃない」

「そうですねえ、それに、他の冒険者方と一緒にいうのもいいかもしれませんが。ベテラン冒険者のノウハウというのものもあるかもしれませんよっ。」

「それもそうか。この依頼を受ける」

「あいよ。先方には伝えとくから、明日の朝一で正面門に行つとくれ」
「わかった」

俺が依頼書を受け取るのを確認すると、キャサリンが俺の後ろにいるユエたちに目を向けた。

「あんた達も体につけて元気でおやりよ？この子たちに泣かされたら何時でも家においで。あたしがぶん殴ってやるからね」

「・・・ん、お世話になった。ありがとう」

「はい、キャサリンさん。よくしてくれて、ありがとうございました
！」

「またいつか会いましょう」

キャサリンの人情味あふれる言葉にユエたちの頬が、特にシアが緩む。

この町では、シアのことを、少なくとも亜人族だからという理由で差別するものはほとんどいなかった。

もちろん全員が全員ではないが、それでもこの町のそういうところが気に入ったようだ。

「あんたらも、こんないい子達泣かせんじやないよ？精一杯大事にしないと罰が当たるからね？」

「・・・ったく、世話焼きな人だな言われなくても承知してるよ」

「まっ、精進するよ」

キャサリンの言葉に、俺とハジメは苦笑しながら返す。とことん人がいいおばちゃんだ。

「ああ、そうそう、これ」

すると、キャサリンが俺に一通の封筒を渡した。

「これは？」

「あんた達、色々厄介なもの抱えてそうだからね。町の連中が迷惑かけた詫びのようなものだよ。他の町でギルドと揉めた時は、その手紙をお偉いさんに見せな。少しは役に立つかもしれないからね」

(・・・このおばちゃん、一体何者なんだろう。)

ルピが秘密を抱えていることを看破していることもさることながら、キャサリンが言ったことが正しければ、おばちゃんはそんじよそこのギルドのお偉いさんに口が利く、ということになる。

スペックの高さから只者ではないと察してはいたが、ここまでとなると、元中央勤務なのは間違いないだろう。

「おっと、詮索はなしだよ？いい女に秘密はつきものさね」

「・・・わかった。これはありがたく貰っとく」

「素直でよろしい！色々あるだろうけど、死なないようにね」

彼らはギルドを後にした

新たな街

俺たちが正門前に向かうと、すでにほかの冒険者たちが集まっていた。

そして、俺たちの姿を確認するとざわめきだす。

「お、おい、まさか残りの5人って プレデター”なのか!？」

「マジかよ！嬉しさと恐怖が一緒くたに襲ってくるんですけど！」

「見ろよ、俺の手。さつきから震えが止まらないんだぜ？」

「いや、それはお前がアル中だからだろ？」

どうやら、この数日間で俺たちはずいぶんと有名人になったらしい。決して、いい意味ではないだろうが。

複雑な気分になりながら商隊に向かうと、まとめ役らしき人物が声をかけてきた。

「君たちが最後の護衛かね？」

「ああ、これが依頼書だ」

俺が依頼書を見せると、それを確認したまとめ役の男が納得したように頷く。

「私の名はモットー・ユンケル。この商隊のリーダーをしている。君達のランクは未だ青だそうだが、キャサリンさんからは大変優秀な冒険者と聞いている。道中の護衛は期待させてもらうよ」

「ああ、期待してもらっても構わないさ」

・・・もつとユンケル・・・商隊のまとめ役も大変なのか？

「それと、俺はルピで、あとは右からハジメ、ユエ、シアだ」

「それは頼もしいな・・・ところで、この兎人族・・・売るつもりはな
いかな？それなりの値段を付けさせてもらおうが」

「悪いが売る気はない、俺たちの仲間だし、、俺の女だし例え、どこぞ
の神が欲しても手放す気はない・・・理解してもらえたか？な」

「・・・ええ、それはもう。仕方ありませんな。ここは引き下がりましたよ
う。ですが、その気になったときは是非、我がユニケル商会をご贖
に願いますよ。それと、もう間も無く出発です。護衛の詳細は、そち
らのリーダーとお願いします」

モットーは何でもないように引き下がるが、よく見てみれば冷や汗
をかいている。

実際、俺の言ったことは相当危険なものだ。下手をすれば、教会に
神敵と判断されかねないくらいには。

だからこそ、モットーもハジメの意志の固さを察して引き下がった
のだろう。

まあ、その後に自分の商会を売ってくる辺りは、なかなか凶太い神
経を持っていると言えるが。

「すげえ・・・女一人のために、あそこまで言うか・・・痺れるぜ！」

「流石、決闘スマツシャーと言ったところか。自分の女に手を出すや
つには容赦しない・・・ふっ、漢だぜ」

「いいわねえ、私も一度くらい言われてみたいわ」

「いや、お前、男だろ？誰が、そんなことッあ、すまん、謝るからつや
めっアッー!!」

「お前は俺の女だ、お前の居場所はここだからな」

「、はい」

顔を赤くして耳を垂れながら小さい声で答えが返ってきた。くさい言葉を吐いた気がするが、気に留めないことにおこう

※※※※

「カッター、うめえ！ホント、美味しいわあ、流石シアちゃん！もう、巫人とか関係ないから俺の嫁にならない？」

「ガツツガツツ、ゴクンツ、ぷはっ、てめえ、何抜け駆けしてやがる！シアちゃんは俺の嫁！」

「はっ、お前みたいな小汚いブ男が何言ってるんだ？身の程を弁えろ。ところでティアちゃん、町についたら一緒に食事でもどう？もちろん、俺のおごりで」

「な、なら、俺はユエちゃんだ！ユエちゃん、俺と食事に！」

「ユエちゃんのスプーン・・・ハアハア」

「・・・・・・・・」

どうしてこうなった

まず、俺たちはフューレンに向かう商隊の護衛の依頼を受けて、今は日程の半分を消化したところだ。

フューレンまでは馬車でおよそ6日の長旅となるため、冒険者は各自で野営の準備をすることになる。

他の冒険者は基本的に干し肉や乾パンといった質素な保存食を別々で食べていたのだが、俺たちは宝物庫があるため、野宿でも問答無用で料理ができる。

そこに、俺やシアが作る料理の匂いにつられて冒険者たちが血走った目でよだれを垂らしながら見てきたため、さすがに居心地の悪くなったシアと俺がほかの冒険者たちの料理を作ることになったのだ。

さすがにハジメやユエもこの視線には耐えがたかったようで、今の料理当番は俺とシアが受け持っているため、シアのお裾分けのお願いを了承した。

しかし、結果はこうだ。変態は湧くうえに口説こうとする馬鹿、、、、もうどうにでもなれ

「すいません、私はルピさんのお嫁になる予定なので」

「うらやましごこの野郎」

「ははは、とりあえず口説くのはご法度だぞ、次口説いたらわかるな」
少しだけ威圧を解放しながら釘をさす

「二」「調子に乗ってすんませんっしたー」「二」

冒険者共がきれいなシンクロとハモリで土下座する。

一応、こいつらは俺たちよりも年上なのだが、ブルツクでやったことがここでも効果を発揮しているからか、基本的に俺たちに対して下手だ。

「とりあえず口説いたやつは今後の飯抜きな」

「二」それだけは、、勘弁を「二」

「ならわかるな」

「二」YES Sir!!!!「二」

※※※※

それからさらに2日後、俺とシアは馬車の上でのんびりしていたが、シアが耳をピコピコと動かして、突然起き上がった。

「敵襲です！数は100以上！森の中から来ます！」

シアの警告に、周りの冒険者たちに緊張の糸が走る。冒険者たちから聞いた話だが、大陸一の商業地への街道なのでそれなり以上に安全整備がされている。そのため、魔物が群れで襲うにしても多くて40頭ほどらしい。

俺もシアの言う方向に目を凝らせば、たしかに不自然な木々の揺らぎとわずかな砂ぼこりが見えた。まだ森の中なので姿は見えないが、砂ぼこりと揺らぎから判断するに、だいたいシアの言った通りの数だろう。

本当に100頭の魔物を見逃していたのならば、調査隊はなにをやっているんだという話になるが、今それを気にしたところで意味はない。

「ハジメ、どうする?」

「そうだね、僕たちでやっとくか」

「え?今、なんて?」

「迷っているようなら、俺たちで片付けるってことだ」

「い、いや、それは確かに、このままでは商隊を無傷で守るのは難しいのだが・・・えっと、出来るのか?このあたりに出現する魔物はそれほど強いわけではないが、数が・・・」

「たかが数なんて問題じゃないと思う。ユエ頼める?」

「ん・・・」

「ちよっと待ってくれ、俺がやる。うち漏らしはユエがやってくれ」

「ん・・・わかった」

ユエは突然話を振られたにも関わらず、特に気負うこともなくうなずく。

ガリテイマも、やはりブルックでの所業を知っているからか、すぐに頷く。

・・・本当に、有名人になったもんだな、俺たち。

「わかった。初撃はルピに任せよう。そしてユエちゃんの魔法で更に追撃をする。仮に殲滅できなくても数を相当数減らしてくれるなら問題ない。我々の魔法で更に減らし、最後は直接叩けばいい。みな、わかったな!」

「了解!」

「どうやら、俺とユエがすべて殲滅するということは、あまり信じていないらしい。」

「まあ、この世界の基準で考えたら、当然ではあるが。」

「そうこうしているうちに、魔物が森からでてきて、肉眼で確認できるところまで近づいてきた。」

「ユエ、一応、詠唱を。後々、面倒だと思うから」

「・・・詠唱・・・詠唱・・・？」

「・・・もしかして知らないとか？」

「・・・大丈夫、問題ない」

「いや、そのネタ・・・」

「じゃあいくぞ」

「夜の星々のきらめきをこの地に、星の力を我に“降星”！」

詠唱が終わると同時に結界魔法で作られた結晶体が重力魔法によつてありえない速度で地面と衝突し、衝撃波や飛び散った結界の破片が魔物を殺していく。森も消し飛んだが

「ユエいくつかうち漏らした、頼む」

「りよ、了解」

「彼の者、常闇に紅き光をもたらさん、古の牢獄を打ち砕き、障碍の尽くを退けん、最強の片割れたるこの力、彼の者と共にありて、天すら呑み込む光となれ、*“雷龍”*」

詠唱を唱え、魔法のトリガーが引かれると、詠唱の途中から現れていた雷雲から、雷でできた竜が飛び出してきた。

「竜と言っても、西洋のドラゴンではなく、どちらかといえば日本のものに近いが。」

そんなことを考えている間にも、ユエの放った「雷龍」は魔物の群れを殲滅し、森も焦土と化してしまった。

周りの冒険者たちも、あまりの衝撃に啞然としている。

「……ん、やりすぎた」

「おいおい、あんな魔法、俺も知らないんだが……」

「ユエのオリジナルだと。ハジメから聞いた竜の話をもチーフにして、雷魔法と重力魔法を組み合わせたんだってさ」

「僕色々やっている間にそんなことしてたの……ていうかユエ、さっきの詠唱って……」

「ん……出会いと、未来を詠ってみた」

ユエにしては珍しく、見るからにどや顔を浮かべていた。

それにしても、さっきの詠唱がハジメとユエの出会いなのか。

余計なことは考えない方がいいな、うん。

ちなみに、先ほどの「雷龍」は上級雷魔法「雷槌」と重力魔法を「複合魔法」で組み合わせたもので、龍を自在に操れるだけでなく、罅の部分は重力魔法が展開されており、標的を吸い寄せることができるという、凶悪なものだ。さらに、上級魔法の消費魔力で最上級レベルの威力を出せるため、ユエが結構気に入っている魔法でもある。

その後、冒険者たちの正気を（ガリティマが）戻し、フューレンへの移動を再開した。

※※※※

魔物の襲撃があった日の翌日、俺たちは目的地であるフューレンにたどり着いた。あれ以降は特に大きな問題も起こらず、穏やかに過ごせた。

ただ、小さい問題は出てきたが。

モットーが、俺たちの宝物庫をよこせと言ってきたのだ。

べつに脅されているわけではなく、あくまで「売ってくれないか?」という言葉遣いだが、宝物庫を見る目は「殺してでも手に入れる」と

でも言わんばかりだ。

もちろん、商談を持ち掛けられているハジメは渡す気はないのだが、

「何度言われようと、何一つ譲る気はない。諦めな」

「しかし、そのアーティファクトは一個人が持つにはあまりに有用過ぎる。その価値を知った者は理性を効かせられないかもしれないぞ？ そうなれば、かなり面倒なことになるでしょなあ……例えば、彼女達の身にツ！」

モットーが放った脅しに、ハジメはドンナーと「威圧」をもって答えた。ハジメたちの様子は馬車の陰で見えないし、「威圧」もモットーのみにピンポイントで向けているため、他の冒険者たちは気づいていない。

「それは、宣戦布告と受け取っていいのですか？」

「ち、違います。どうか……私は、ぐっ……あなたが……あまり隠そうとしておられない……ので、そういうこともある……と。ただ、それだけで……うっ」

ハジメに殺気を向けられながらも気丈に話そうとするモットーは、商人としてはさすがと言うべきなのだろうが、先ほどの脅しはハジメには逆効果だとわからなかったのか、あるいは宝物庫の価値に目が眩んだのか。

ハジメの方は、モットーの弁明に一応納得し、ドンナーと殺気を収めた。

「そうですか、今回はそういうことにおきます」

「ったく、ハジメもちよいとやりすぎな気はしなくもないが、まあ、これに懲りたらこれ以上、俺たちに手を出さないことだ。俺たちに敵意を向けるなら、そのときは容赦なく蹂躪させてもらうからね」

「はあ、はあ・・・なるほど。割に合わない取引でしたな・・・」

やはり、モットーは優秀な商人のようだ。青ざめた表情ながらも氣丈に答えようとしている。

他の商隊員からも慕われていたようだったし、普段は先ほどのような強硬な姿勢はとらないのかもしれない。

「まったく、私も耄碌したものだ。欲に目がくらんで竜の尻を蹴り飛ばすとは・・・そう言えば、ユ工殿のあの魔法も竜を模したものでしたな。詫びと言ってはなんです、あれが竜であるとは、あまり知られぬがいいでしょう。竜人族は、教会からはよく思われていませんからな。まあ、竜というより蛇という方が近いので大丈夫でしょうが」「そうなのか？」

「ええ、人にも魔物にも成れる半端者。なのに恐ろしく強い。そして、どの神も信仰していなかった不信心者。これだけあれば、教会の権威主義者には面白くない存在というのも領けるでしょう」

「言われてみれば、たしかにな。ていうか、ずいぶん言い様だな。不信心者だと言われるぞ？」

「私が信仰しているのは神であって、権威をかさに着る“人”ではありません。人は“客”ですな」

「・・・あなたは根っからの商人ですね、」

俺の素直な評価にハジメも頷き、モットーはバツの悪そうな表情と誇らしげな表情が入り混じり、実に複雑な表情をする。先ほどのような危ない雰囲気は、もはや感じられない。

「とんだ失態を晒しましたが、ご入り用の際は、我が商会を是非ご鼻屑に。あなた方は普通の冒険者とは違う。特異な人間とは繋がりを持っておきたいので、それなりに勉強させてもらいますよ」

「・・・ほんと、商魂たくましいな。ま、俺としても、それくらいのことなかりはあつた方がいいと思うしいけどな」

そんな会話をした後、モットーは「では、失礼しました」と言っ
て商隊の列に戻っていった。

いろいろとあったが、少なくとも最後はそれなりにいい結果で終
わったか。

そして俺たちは新たな街『フューレン』についた

面倒ごとからの面倒ごと

町についた俺たちは案内人を雇い今日泊まる宿を探している

そして案内人からフューレンの街についての簡単な説明を受けた

この都市における様々な手続関係の施設が集まっている中央区、娯楽施設が集まった観光区、武器防具はもちろん家具類などを生産、直販している職人区、あらゆる業種の店が並ぶ商業区だ。

そして、これらの区画を結ぶメインストリートが存在し、このメインストリートと町の中心部に近い店ほど信用があるらしい。逆に、メインストリートからも中央区からも遠い場所は、かなりアコギでブラックな商売、言い換えれば闇市的な店が多い。が、その分、時々とんでもない掘り出し物が出たりするので、冒険者や傭兵のような荒事に慣れている者達が、よく出入りしているようだ。まあ俺たちの武器はハジメか俺が作るから行く必要ないな。

案内人に意識を向けると宿の要望について聞いていた

「ひとまず宿をお取りになりたいのでしたら観光区へ行くことをオススメしますわ。中央区にも宿はありますが、やはり中央区で働く方々の仮眠場所という傾向が強いので、サービスは観光区のそれとは比べ物になりませんから」

「なるほど、なら素直に観光区の宿にしとくか。どこがオススメなんだ？」

「お客様のご要望次第ですわ。様々な種類の宿が数多くございますから」

「そうですか。ご飯が美味くて、あと風呂があればいいですね。立地とかは考慮しなくて大丈夫です」

「俺からの追加注文だが責任の所在が明確なところがいいな」

ハジメの要望をにこやかに聞き入れながら頷いていたが、俺の追加注文で「ん？」と首を傾げた。

「あ、責任の所在ですか？」

「ああ、俺たちは仲間が目立つからな。いくら治安が良くても騒ぎを

起こすやつらもいる。ただその時にこっち側が完全な被害者なのに、吹っ掛けてくる奴らもいる可能性があるから、責任の所在がはっきりしたところがいいんだ」

「しかし、それなら警備が嚴重な宿でいいのでは？　そういうことに気を使う方も多いですし、いい宿をご紹介できますが・・・」

「警備している奴らは人間だ。欲に目がくらめば立場をわきまえず暴走する可能性がある、それなら物理的な説得をはなから考えた方が早いからな」

「ぶ、物理的説得ですか・・・なるほど、それで責任の所在なわけですか」

「あくまで”できれば”だ」

死人がでるということはスルーし、”できれば”という要望に案内人魂を燃やしたのか、やる気に満ちた表情で「お任せ下さい」と了承する。

「そーいやお前らは要望はあるか？」

「僕はでかめなお風呂があればいいかな、；、ただし落ち着いて入れるところで」

「：ダメ、混浴で貸し切り」

「でかめなベッドがあればいいですう」

少し考えたあとに出てきた要望は、別になんてことのない普通なものに聞こえるが、ユエが付け足した条件と、シアの要望を組み合わせると、自然とある意図が透けて見える。リシーも察したようで、「承知しましたわ、お任せ下さい」とすまし顔で了承するが、頬が僅かに赤くなっている。そして、チラツチラツと俺とハジメ、そしてユエ達を交互に見ると更に頬を染めた。

いったい、この人の頭の中ではどのような妄想が繰り広げられているのか。

と呑気に考えていると、この町に入ってから一番ねっとりとした視線を感じた。

しかもその視線の先はシアとユエだ。その視線の先を見てみると肉塊がいた。なんの誇張もなく肉塊だ。動物で例えるなら丸々太った豚だ。

その肉塊は100キロは軽々と超えているふくよかな体に脂ぎつた顔、豚鼻と頭部にちよこんと乗っているベツトリした金髪、しかも着ている服はこの世界でもかなり上質な服ということから、どこかの貴族かもしれないということを入れた方がいい。

リシーを見てみると「げっ!？」と声を漏らしたことから、少なくとも面倒なやつであることに間違いないだろう。

面倒だと思っていると、そのブタ男は逃げる暇も与えないと言わんばかりに近寄ってくる。しかも近づいてくると同時に顔面から汗を拭きながら

ブタ男は俺たちのそばまで近づくと、ニヤニヤしながらじろじろとユエを見やり、視線がシアの首輪に向いたところで不快そうに眼を細めた。

そして、今まで一度も俺たちに目を向けていない俺たちに、さも今気がついたような素振りを見せると、これまた随分と傲慢な態度で一方的な要求をしてきた。

「お、おい、ガキ。ひゃ、100万ルタやる。この兎を、わ、渡せ。それとそっちはわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

これまた見た目通りの不快なきいきい声でそう告げて、ユエに触れようと手を伸ばす。

そこに、ハジメがブタ男に「威圧」を放つ。

周りの客も、ハジメの殺意に腰を抜かし、慌てて俺たちから距離を

取ろうとする。

そして、そんなハジメの「威圧」をまともに受けたブタ男は、「ひい!？」と情けない悲鳴を上げると尻餅をつき、後退することも出来ずにその場で股間を濡らし始めた。

一応、本気でぶつければ意識を刈り取るくらいはできるが、それだと性懲りもなく近づいてくるだろうことは想像に難くないから、ハジメも手加減したのかもしれない。

「リシーさんすいませんが場所をかえませんか？」

地面に這いつくばっているブタは無視して、俺たちは席を立ちあがってギルドを出ようとする。

が、このブタはどこまでも面倒だった。

「そ、そうだ、レガニド！そのクソガキを殺せ！わ、私を殺そうとしたのだ！鬨り殺せえ！」

「坊ちゃん、流石に殺すのはヤバイですぜ。半殺し位にしときましようや」

「やれえ！いいいからやれえ！お、女は、傷つけるな！私のだあ！」

「了解ですぜ。報酬は弾んで下さいよ」

「い、いくらでもやる！さっさとやれえ！」

先ほどから後ろで待機していた大柄の男が、俺たちの進路をふさぐようにして立ちはだかつたのだ。

その視線は、珍しくユエたちではなく、俺たちに向けられている。どうやら、シア達ではなく報酬目当てのようだ。

「おう、坊主。わりいな。俺の金のためにちよつと半殺しになってくれや。なに、殺しはしねえよ。まあ、嬢ちゃん達の方は・・・諦めてくれ」

レガニドと呼ばれた男はそう言うと言と拳を構えた。腰に長剣をぶら下げているのだが、どうやら場所を考えて使わないようだ。

「お、おい、レガニドって『黒』のレガニドか？」

「『暴風』のレガニド!? 何で、あんなヤツの護衛なんて・・・」

「金払じゃないか? 『金好き』のレガニドだろ?」

周りのざわめきを聞き取るに、どうやらそれなりの実力を持つようだ。

冒険者ランク『黒』。要するに、上から三番目の実力を持つということか。ただ、基本的に金目当てで動いており、素行はそれほどよくはない、と。

まあ、これなら俺たちが被害者になるのだろうか、半殺しくらいにしても問題はないだろう。

俺とハジメが前に出ようとすると、意外なところから声がかかった。

「・・・ハジメ、待って」

「ルピさん、ちよつと待ってください」

「どうしたの、ユエ?」

「シア?」

ユエとシアが俺たちをひきとどめる。ああ、なんとなくわかった。

「・・・私達が相手をする」

「ガッハハハ!!」

すると、俺とハジメが返答する前にレガニドが爆笑した。

どうやら、完全にシアたちをなめているらしい。

「嬢ちゃん達が相手をするだって？ 中々笑わせてくれるじゃねえの。何だ？ 夜の相手でもして許してもらおうって……」

「……黙れ、ぐみくず」
「ッ!？」

※※※ルPside↓三人称

下品な言葉を口走ろうとしたレガニドに、辛辣な言葉と共に、神速の風刃が襲い掛かりその頬を切り裂いた。プシュと小さな音を立てて、血がただらだと滴り落ちる。かなり深く切れたようだ。

詠唱もなしに魔法を放ったユエに、レガニドが冷や汗をかいて困惑しながらも分析している。

「私達がただ守られる存在だけじゃないことを証明します!!」

素晴らしいながらドリユケンを肩に担ぎながらそんなこと言っている、ちなみに普通の人なら兔人族が戦えるわけがないと思っっているからか

「おいおい、兔人族の嬢ちゃんに何が出来るってんだ？ 雇い主の意向もあるんでね。大人しくしていて欲しいんだが？」

半分煽りのような口調で話している。

「腰の長剣。抜かなくていいんですか？ 手加減はしますけど、素手だと危ないですよ？」

しかしシアは相手を心配するがレガニドからすると戦えない兔人族に心配されるという、屈辱を受けてしまった。そのせいか顔に青筋を浮かべながら

「ハッ、兔ちゃんが大きく出たな。坊ちゃん！ わりいけど、傷の一つや二つは勘弁ですぜ！」

どうやらわからせてやろうということなのか、肉塊に一言を入れてシアに肉薄するが

「やあ!!」

「ッ!？」

結果はシアによる手痛いカウンターを受け壁にめり込んでしまった。しかしシアの攻撃は止まらない、壁にめり込んだレガニドに追撃を仕掛けようとレガニドに肉薄する。

「吹っ飛べ!!ヴォール!!」

なんと本来ならば機動力を上げるはずのヴォールが武器に代わっていた。『物は使いよう』というがこの結果にさすがのシアを除く3人は顔を引きつらせていた

レガニドは腕をクロスさせて防御の姿勢をとったが結果として腕は使い物にならなくなり、シアを空中に浮かせるだけの力があるヴォールを0距離で受けたため、吐血する。

そして、最後のとどめにユエが気を失ったレガニドの股間にめがけて風魔法を放ち、男の象徴をつぶした。

ぶっちゃけ、ユエの最後の一撃は必要なかったのだが、最初の下品な言葉が気に触れたのか。

今やギルド内には何とも言えない静寂が満ちていたのだが、ルピとハジメが肉塊に近づいた。

「ひい！く、来るなあ！わ、私を誰だと思っている！プーム・ミンだぞ！ミン男爵家に逆らう気かあ！」

「・・・ユエに詫びろ、ブタが」
「プギヤ!?!」

・・・ちなみにこのブタの名前がどつかのゆるキャラを連想させたせいで、ハジメの機嫌がさらに下降する。

そして、ハジメはブタの顔を踏みつける。もちろん、殺してはいない。

結果、ブタは最初は悲鳴をあげたが、次第に大人しくなって悲鳴もあげなくなった。

「おい、ブタ。二度と視界に入るな。直接・間接問わず関わるな・・・」

次はない」

ハジメの忠告に、ブタは小刻みに震えながら頷く。ハジメはすつきりしたためユエの方に向かうが、今度はルピが近づく

「俺の彼女に手を出すなこの肉塊」

そういいながら馬乗りになりながら顔面を殴り続ける、、、

ーーーーーしばらくたった後ーーーーー

「二度と俺たちの目に映るな、さてリシーさん話の続きを、、、」

「あの、申し訳ありませんが、あちらで事情聴取にご協力願います」

だが、やはり騒ぎ過ぎたようで、ギルドの職員がルピたちに事情聴取を求めてきた。

(・・・これの対応、また俺がするのかな。)

ルピは頭を抱えることになってしまった

依頼

「あの、申し訳ありませんが、あちらで事情聴取にご協力願います」

「待て待て、俺たちはあくまで被害者だと思っただが」

「そうですよ、僕たちだって時間が惜しいんですから」

「とは、いつでも規則なので、」

「そこまで言うなら周りいたやつらに話を聞いてくれば、ほとんどのやつは一致すると思うが」

そう話をしているとマ話ありから話を聞いていた職員がこつちに
来た

「二応周りの方から話を聞いて聞いてきましたが、ほとんどの方が一致していたので確証は取れたのですが、」

「規則か？」

「申し訳ありませんがその通りです、ですのでこの町にいる間の滞在先とステータスプレートを」

「滞在先は、ここにいるリシーさんに聞いてくれ」

その途端にリシーの顔が暗くなる。その後ろ姿は日本でも時々見る嫌な仕事を押し付けられた、仕事人の哀愁が漂ってくる

「ステータスプレートですね」

と言いながらハジメはステータスプレートを渡した、俺もそのあと

に出したが

「・・・青ですか。向こうで伸びている彼は『黒』なんですけどね・・・」

まあ魔物のお金を高く買い取りに出すためだけに登録をしたため、ランクの概念を忘れていた

青、赤、黄、紫、緑、白、黒、銀、金の種類があり、左から1、5、10、50、100、500、1000、5000、10000、100000ルタとなっている。意外にも、貨幣価値は日本とおおよそ同じらしい。

そして冒険者にもランクと言うものがあり、通貨の色と同じランクが設定されている。

早い話、青ランクの冒険者は「所詮てめえの価値は一ルタしかねえんだよ」ということだ。わかりやすいが、ちよつとこれを考えた人間の性根を疑う。おそらく、よっぽど捻くれた人間だったんだろう。

つまり1ルタの人間が10000ルタに該当するやつを吹っ飛ばしたということは異常ということなのだろう、職員の話にも納得がいく

「そちらの方達のステータスプレートはどうしました？」

やはり、そのことについて聞いて聞いてくるか。

「ごつちの彼女たちは、旅の途中で紛失してしまつてな・・・再発行しようにも、高いだろ？」

もちろん、これは嘘だ。

もしここで2人のステータスプレートを発行しようものなら、隠すべき固有魔法や神代魔法のあれこれまでギルドの職員に見られてしまう。

どうせ、いつかはバレるとわかつてはいるが、今はまだ早い。

「しかし、身元は明確にしてもらわないと。記録をとっておき、君達が頻繁にギルド内で問題を起こすようなら、加害者・被害者のどちらかに関係なくブラックリストに載せることになりますからね。よければギルドで立て替えますが？」

これは困った、もしここで渋れば面倒くさい手続きを行わなくてはならないということだ、そして早く終わらすにしても2人のステータスが見られてしまう、、、八方塞がりか、、、、

「…ルピあの手紙は？」

「あーあの手紙か」

懐から手紙を出すふりをし、手紙を渡す。それを受け取った職員は

「すいませんがこのような手紙は私のような一職員が判断してはいけないものなので

上の者に聞いてきます」

「あ、ああ」

キャサリンって何者なんだ？

「ユエ助かった、ありがとう」

「ん」

言葉は端的だがどこか嬉しそうだ、多分ハジメに頭を撫でられているからだろう

「すいません私はこのギルド長の補佐を担当させてもらっている者ですが、、、、」

「[[[?]]]」

「あの手紙が本当なら確かな身分証明になりますが……この手紙が差出人本人のものか私1人では少々判断が付きかねます。支部長に確認を取りますから少し別室で待っていてもらえますか？そうお時間は取らせません。10分、15分くらいで済みます」

「わかった」

「ルピさん、キャサリンさんって何者なんですか？」

「むしろ俺が聞きたいレベル」

――――――――――
15分
後――――――――――

ルピside↓三人称

「初めまして、冒険者ギルド、フューレン支部支部長イルワ・チャングだ。ルピ君、ハジメ君、ユエ君、シア君……でいいかな？」

簡潔な自己紹介の後、俺達の名前の確認がてらに握手を求める支部長イルワ。俺も握手を返しながら返事をする。

「ああ、構わない。名前は手紙に？」

「その通りだ。先生からの手紙に書いてあったよ。随分と目をかけられている……というより、注目されているようだね。将来有望、ただしトラブル体質なので、出来れば目をかけてやって欲しいという旨の内容だったよ」

「トラブル体質ね。それなりに自覚はあるが……まあ、それはともかくとして、身分証明としてはどうなんだ？それで問題ないか？」

「ああ、先生が問題のある人物ではないと書いているからね。あの人の人を見る目は確かだ。わざわざ手紙を持たせるほどだし、この手紙を以て君達の身分証明とさせてもらおうよ」

本当に、キャサリンの言う通り、ギルドのお偉いさんに話が通ってしまった。

しかも、この支部長はキャサリンのことを「先生」と呼んでいた。まさかとは思うが……

そこに、シアが思わずといったようにおずおずと尋ねた。

「あのう、キャサリンさんって何者なのでしょう？」

「ん？本人から聞いてないのかい？彼女は、王都のギルド本部でギルドマスターの秘書長をしていたんだよ。その後、ギルド運営に関する教育係になってね。今、各町に派遣されている支部長の5、6割は先生の教え子なんだ。私もその一人で、彼女には頭が上がりなくてね。その美しさと人柄の良さから、当時は、僕らのマドンナ的存在、あるいは憧れのお姉さんのような存在だった。その後、結婚してブルツクの町のギルド支部に転勤したんだよ。子供を育てるにも田舎の方がいいって言ってね。彼女の結婚発表は青天の霹靂でね。荒れたよ。ギルドどころか、王都が」

「……マジかい」

「はあ、そんなにすごい人だったんですね」

「……キャサリンすごい」

「只者じゃないとは思っていたけど……思いつきり中枢の人間だったんだ、そんなにモテたのに……今は……」

ハジメ、気持ちにはわからなくもないが、それはさすがに失礼だと思うな。

だが正直、結果は俺の予想の斜め上を行った。そりゃあ、ギルドのお偉いさんに口添えできるわけだよ。

「実は、君達の腕を見込んで、一つ依頼を受けて欲しいと思っている」「断る」

イルワが依頼を提案した瞬間、ルピは被せ気味に断りを入れ席を立ちとうとする。

ハジメとユエとシアも続こうとするが、続くイルワの言葉に思わず足を止めた。

「ふむ、取り敢えず話を聞いて貰えないかな？ 聞いてくれるなら、今回の件は不問とするのだが……」

「……」

それは言外に、「話を聞かなければ今回の件について色々面倒な手続きをするぞ？」ということだ。

周囲の人間による証言で、ルピ達がプーム（お貴族様）達にしたことに関し罪に問われることはないだろうが、いささか過剰防衛の傾向はあるので、正規の手続き通り、当事者双方の言い分を聞いてギルドが公正な判断をするという手順を踏むなら相応の時間が取られるだろう。

結果は、ルピ達に非がないということになるだろうが、逆に言えば、結果のわかりきった手続きをバカみたいに時間をかけて行わなければならぬということだ。

そして、この手続きから逃げると、めでたくブラックリストに乗るということだろう。

今後、町でギルドを利用するのに面倒なことこの上ないことになるのだ。

ルピは、しばらくイルワを睨んでいたが、「依頼を引き受ければ」ではなく「話を聞けば」と言っていることから話くらいで面倒事を回避できるならいいかと思いつき、座席に座り直した。

「聞いてくれるようだね。ありがとう」

「……流石、大都市のギルド支部長。いい性格してるよ」

「君も大概だと思っけだね。さて、今回の依頼内容だが、そこに書いてある通り、行方不明者の捜索だ。【北の山脈地帯】の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎても戻ってこなかったため、冒険者の一人の

実家が搜索願を出した、というものだ」

イルワの話を要約すると、つまりこういうことだ。

最近、【北の山脈地帯】で魔物の群れを見たという目撃例が何件か寄せられ、ギルドに調査依頼がなされた。

【北の山脈地帯】は、一つ山を超えるとほとんど未開の地域となっており、大迷宮の魔物程ではないがそれなりに強力な魔物が出没するので高ランクの冒険者がこれを引き受けた。

ただ、この冒険者パーティーに本来のメンバー以外の人物がいささか強引に同行を申し込み、紆余曲折あつて最終的に臨時パーティーを組むことになった。

この飛び入りが、クデタ伯爵家の三男ウィル・クデタという人物らしい。

クデタ伯爵は、家出同然に冒険者になると飛び出していった息子の動向を密かに追っていたそうなのだが、今回の調査依頼に出た後、息子に付けていた連絡員も消息が不明となり、これはただ事ではないと慌てて搜索願を出したそうだ。

「伯爵は、家の力で独自の搜索隊も出しているようだけど手数は多い方がいいと、ギルドにも搜索願を出した。つい、昨日のことだ。最初に調査依頼を引き受けたパーティーはかなりの手練でね、彼等に対処できない何かがあつたとすれば、並みの冒険者じゃあ二次災害だ。相応以上の実力者に引き受けてもらわないといけない。だが、生憎とこの依頼を任せられる冒険者は出払っていてね。そこへ、君達がタイミングよく来たものだから、こうして依頼しているというわけだ」

「前提として、俺達にその相応以上の実力つてやつがないとダメだろう？ 生憎俺は『青』ランクだぞ？」

ルピは、言外に、そこまでの実力はないと伝えるもイルワはまるで

取り合わない。

「さっき『黒』のレガニドを瞬殺したばかりだろう？ それに……ライセン大峡谷を余裕で探索出来る者を相応以上と言わずして何と云うのかな？」

「何故知って……手紙か？ だが、彼女にそんな話は……」

ハジメ達が「ライセン大峡谷」を探索していた話は誰にもしていない。

イルワがそれを知っているのは手紙に書かれていたという事以外には有り得ない。

しかし、ならば何故キャサリンは、それを知っていたのかという疑問が出る。

ルピが頭を捻っていると、おずおずとシアが手を上げた。

「何だ、シア？」

「えくと、つい話が弾みまして……てへ？」

「……」

「!? ユ、ユエさんもいました!」

「……シア、裏切り者」

「……」

「二人とも……」

どうやら、原因はユエとシアのようだ。

ルピはハイライトを消した目で二人を見る

ハジメは憐れなものを見るような目で二人を見る。

そんな様子を見て苦笑いしながら、イルワは話を続けた。

「生存は絶望的だが、可能性はゼロではない。伯爵は個人的にも友人でね、できる限り早く捜索したいと考えている。どうかな。今は君達しかないんだ。引き受けてはもらえないだろうか？」

懇願するようなイルワの態度には、単にギルドが引き受けた依頼と
いう以上の感情が込められているようだ。

伯爵と友人ということとは、もしかするとその行方不明となったウイ
ルとやらについても面識があるのかもしれない。個人的にも、安否を
憂いているのだろう。

「そう言われてもな、俺達も旅の目的地がある。ここは通り道だった
から寄ってみただけなんだ。【北の山脈地帯】になんて行つてられな
い。断らせてもらう」

ルピとしては、そんな貴族の三男の生死など心底どうでもいいので
躊躇いなく断りを入れた。

しかし、それを見越していたのか、ルピが席を立つより早くイルワ
が報酬の提案をする。

「報酬は弾ませてもらうよ？ 依頼書の金額はもちろんだが、私から
も色をつけよう。ギルドランクの昇格もする。君達の実力なら一氣
に『黒』にしてもいい」

「金は要らないし、ランクもどうでもいいから……」

「なら、今後、ギルド関連で揉め事が起きたときは私が直接、君達の後
ろ盾になるというのはどうかな？ フューレンのギルド支部長の後
ろ盾だ、ギルド内でも相当の影響力があると自負しているよ？ 君達
は揉め事とは仲が良さそうだからね。悪くない報酬ではないかな？」
「大盤振る舞いだな。友人の息子相手には入れ込み過ぎじゃない
か？」

ルピの言葉に、イルワが初めて表情を崩す。

後悔を多分に含んだ表情だ。

「彼に……ウイルにあの依頼を薦めたのは私なんだ。調査依頼を引き

受けたパーティーにも私が話を通した。異変の調査といっても、確かな実力のあるパーティーが一緒なら問題ないと思つた。実害もまだ出ていなかったしね。ウィルは、貴族は肌に合わない、昔から冒険者に憧れていてね……だが、その資質はなかった。だから、強力な冒険者の傍で、そこそこ危険な場所へ行つて、悟つて欲しかった。冒険者は無理だと。昔から私には懐いてくれていて……だからこそ、今回の依頼で諦めさせたかったのに……」

ルピはイルワの独白を聞きながら、僅かに思案する。

ルピが思っていた以上に、イルワとウィルの繋がりは濃いらしい。すまし顔で話していたが、イルワの内心はまさに藁にもすがる思いなのだろう。

生存の可能性は、時間が経てば経つほどゼロに近づいていく。無茶な報酬を提案したのも、イルワが相当焦っている証拠なのだろう。

ルピの口角が上がる

「そこまで言うなら考えなくもないが……二つ条件がある」

「条件？」

「ああ、そんなに難しいことじゃない。ユエとシアにステータスプレートを作つて欲しい。そして、そこに表記された内容について他言無用を確約すること、更に、ギルド関連に関わらず、アンタの持つコネクションの全てを使つて、俺達の要望に応え便宜を図ること。この二つだな」

「それはあまりに……」

「出来ないなら、この話はなしだ。もう行かせてもらう」

一つ目の条件は特に問題ないが、二つ目に関しては、実質、フューレンのギルド支部長が一人の冒険者の手足になるようなものだ。

責任ある立場として、おいそれと許容することはできない。

しかしこの先北の大山脈を捜索できる冒険者が必ず来るという確証がない、つまりルピは『受けてほしいなら無茶な要求を呑め』ということを遠回しに言っていることになる

「何を要求する気かな？」

「そんなに気負わないでくれ。無茶な要求はしないぞ？　ただ俺達は少々特異な存在なんで、教会あたりに目をつけられると……いや、これから先、ほぼ確実に目をつけられると思うが、その時、伝手があつた方が便利だなっと思っただけだ。面倒事が起きた時に味方になつてくれればいい。ほら、指名手配とかされても施設の利用を拒まないとか」

「指名手配されるのが確実なのかい？　ふむ、個人的にも君達の秘密が気になつて来たな。キャサリン先生が気に入っているくらいだから悪い人間ではないと思うが……そう言えば、そちらのシア君は怪力、ユエ君は見たこともない魔法を使ったと報告があつたな……その辺りが君達の秘密か……そして、それがいずれ教会に目を付けられる代物だと……大して隠していないことからすれば、最初から事を構えるのは覚悟の上ということか……そうなれば確かにどの町でも動きにくい……故に便宜をと……」

流石、大都市のギルド支部長。

頭の回転は早い。

イルワは、しばらく考え込んだあと、意を決したようにルピに視線を合わせた。

「犯罪に加担するような倫理にもとる行為・要望には絶対に応えられない。君達が要望を伝える度に詳細を聞かせてもらい、私自身が判断する。だが、できる限り君達の味方になることは約束しよう……これ以上は譲歩できない。どうか」

「まあ、そんなところだろうな……それでいい。あと報酬は依頼が達成されてからでいい。お坊ちゃん自身か遺品あたりでも持って帰ればいいだろう？」

ルピとしては、ユエとシアのステータスプレートを手に入れるのが一番の目的だ。

この世界では何かと提示を求められるステータスプレートは持っていない方が不自然であり、この先、町による度に言い訳するのは面倒なことこの上ない。ならこの機会を生かした方がいいと考えた

問題は、最初にステータスプレートを作成した者に騒がれないようにするにはどうすればいいかという事だったのだが、イルワの存在がその問題を解決した。

ただ、条件として口約束をしても、やはり密告の疑いはある。

いずれ、ルピ達の特異性はばれるだろうが、積極的に手を回されるのは好ましくない。

なので、ルピは、ステータスプレートの作成を依頼完了後にした。どんな形であれ、心を苛む出来事に答えをもたらしたルピを、イルワも悪いようにはしないでだろうという打算だ。

イルワもルピの意図は察しているのだろう。

苦笑いしながら、それでも搜索依頼の引き受け手が見つかったことに安堵しているようだ。

「本当に、君達の秘密が気になってきたが……それは、依頼達成後の楽しみにしておこう。ルピ君の言う通り、どんな形であれ、ウイル達の痕跡を見つけてもらいたい……ルピ君、ハジメ君、ユエ君、シア君……宜しく頼む」

イルワは最後に真剣な眼差しで正彦達を見つめた後、ゆっくり頭を下げた。

大都市のギルド支部長が一冒険者に頭を下げる。そうそう出来ることではない。

キャサリンの教え子というだけあって、人の良さがにじみ出ている。

そんなイルワの様子を見て、ルピ達は立ち上がると気負いなく実に軽い調子で答えた。

「了解」

「頑張りますか」

「……ん」

「はいっ」

その後、支度金や【北の山脈地帯】の麓にある湖畔の町への紹介状、件の冒険者達が引き受けた調査依頼の資料を受け取り、正彦達は部屋を出て行った。

バタンと扉が締まる。

その扉をしばらく見つめていたイルワは、「ふう〜」と大きく息を吐いた。

部屋にいる間、一言も話さなかったドットが気づかわしげにイルワに声をかける。

「支部長……よかったですか？ あのような報酬を……」

「……ウイルの命がかかっている。彼ら以外に頼めるものはいなかった。仕方ないよ。それに、彼等に力を貸すか否かは私の判断でいいと彼等も承諾しただろう。問題ないさ。それより、彼らの秘密……」

「ステータスプレートに表示される『不都合』ですか……」

「ふむ、ドット君。知っているかい？ ハイリヒ王国の勇者一行は皆、とんでもないステータスらしいよ？」

ドットは、イルワの突然の話に細めの目を見開いた。

「！ 支部長は、彼が召喚された者……『神の使徒』の一人であるか？」

しかし、彼はまるで教会と敵対するような口ぶりでしたし、勇者一行は聖教教会が管理しているでしょう？」

「ああ、その通りだよ。でもね……およそ四ヶ月前、その内の二人がオルクスで亡くなったらしいんだよ。奈落の底に魔物と一緒に落ちたってね」

「……まさか、その者が生きていたと？ 四ヶ月前と言えば、勇者一行もまだまだ未熟だったはずでしょう？ オルクスの底がどうなっているのかは知りませんが、とても生き残るなんて……」

ドットは信じられないと首を振りながら、イルワの推測を否定する。

しかし、イルワはどこか面白そうな表情で再びルピ達が出て行った扉を見つめた。

「そうだね。でも、もし、そうなら……なぜ、彼は仲間と合流せず、旅なんてしているのだろうね？ 彼は一体、闇の底で何を見て、何を得たのだろうね？」

「何を……ですか……」

「ああ、何であれ、きつとそれは、教会と敵対することも辞さないという決意をさせるに足るものだ。それは取りも直さず、世界と敵対する覚悟があるということだよ」

「世界と……」

「私としては、そんな特異な人間とは是非とも繋がりを持つておきたいね。例え、彼が教会や王国から追われる身となっても、ね。もしかすると、先生もその辺りを察して、わざわざ手紙なんて持たせたのかもしれないよ」

「支部長……どうか引き際は見誤らないで下さいよ？」

「もちろんだとも」

スケールの大きな話に、目眩を起こしそうになりながら、それでもイルワの秘書長として忠告は忘れないドット。

しかし、イルワは、何かを深く考え込みドットの忠告にも、半ば上の空で返すのだった。

意外な人物との再会（前編）

イルワからの依頼を受け、車で目的地に向かっている

「…どうしてそんなに急いでいるの？」

「お米が食べられるかもしれないからかな」

「欲望に忠実だな」

「そういうルピは？」

「食いたいに決まっている」

「すいませんそのお米というのは？」

「俺たちの故郷での主食だったんだけど、この世界にはお米の元の稲作があまり盛んで無かったから食べれなかったけど、これから行く街ウルはその稲作が盛んにおこなわれているという情報があったからな、それで急いでるんだと思う」

「そうそう、あの白米をまた食べたいんだよね」

「…ハジメの故郷の味楽しみ」

「そうですね私も楽しみです」

「そういえば気になってたんだけどなんで毎回敬語で喋ってるんだ？」

「えーと、私の家族を助けてくれたんで敬意を払うのは、イテツ」

シアの頭にチョップを落とした

「あのな、シアお前は俺たちの仲間、そんな仲間には敬語で喋るな。それに」

「？」

「俺の、、恋人なんだしな」

「・・・ハジメ聞いた？」

「うん、聞いたよ」

「とうとうルピがシアのことを」

「恋人って言った」

「何か問題でも？」

「何も問題ありません」

「ルピこんな感じ？」

「そうそう、そっちの方が楽」

「僕たちも楽に話して」

「私も」

「これからもよろしく」

「ああ」

「うん」

「ん」

「それじゃ飛ばすよー！ー！」

「急げ急げ、俺たちの米が消える前に！」

「早く早く」

「私も早く食べたい！」

「ok飛ばすよー！ー！」

※※※ルピside↓??side (三人称)

「はあ、今日も手掛かりはなしですか… 清水君、一体どこに行っちゃったんですか…。」

肩を落とし、ウルの中の表通りをトボトボと歩くのは召喚組の一人にして教師、畑山愛子だ。普段の快活な様子がなりを潜め、今は不安と心配に苛まれて陰鬱な雰囲気を漂わせている。

作農師として、各地の農村や未開拓地を点々とする中。突如行方不明となってしまうた生徒の清水幸利を探して2週間ほど経過した。ウルの内辺にある町や村にも使いを出したが、全てが空振りに終わった。

「愛子、あまり気を落とすな。まだ何も分かっていないんだ。無事と

「いう可能性は十分にある。お前が信じなくてどうするんだ」
「そうですよ、愛ちゃん先生。清水君の部屋だって荒らされた様子はなかったんです。自分で何処かに行った可能性だって高いんですから、悪い方にばかり考えないでください」

元氣のない畑山に、その声をかけたのは愛子専属護衛隊隊長のデビッドと生徒の園部優花だ。周りには他にも、護衛の騎士たちと生徒たちがいる。彼等も口々に畑山を気遣うような言葉をかけた。

守るはずだった生徒たちに慰められている。そのことに気づいた畑山は何度か深呼吸をした後、両手で自身の頬を叩き気持ちを立て直す。

「皆さん、心配かけてごめんなさい。そうですよね。悩んでばかりいても解決しません。清水君は優秀な魔法使いです。きっと大丈夫。今は、無事を信じて出来ることをしましょう。取り敢えずは、本日の晩御飯です！ お腹いっぱい食べて、明日に備えましょう！」

「「「はい」」」

明らかに無理をしているが、それを指摘する無粋な者はここにはいない。そして全員は最近利用している『水妖精の宿』のレストランへ行き、そして全員が一番奥の専用となりつつあるVIP席に座り、その日の夕食に舌鼓を打つ。

「ああ、相変わらず美味しいいゝ異世界に来てカレーが食べれるとは思わなかったよ」

「まあ、見た目はシチューなんだけどな... いや、ホワイトカレーってあったけ？」

「いや、それよりも天井だろ？ このタレとか絶品だぞ？ 日本負けてんじゃない？」

「それは、玉井君がちゃんとした天井食べたことないからでしょ？
ホカ弁の天井と比べちゃだめだよ」

「いや、チャーハンモドキ一択で。これやめられないよ」

和やかな空気で、故郷のものに似た料理を食べる畑山たち。するとそこに、オーナーのフォス・セルオが現れた。

「皆様、本日のお食事はいかがですか？ 何かございましたら、どうぞ、遠慮なくお申し付けください」

「あ、オーナーさん。いえ、今日もとてもおいしいですよ。毎日、癒されてます」

「それはようございました」

畑山の言葉に、フォスは微笑みを浮かべながら会釈をする。しかし、その笑みを消して表情を申し訳なさそうに曇らせた。

「実は、大変申し訳ないのですが… 香辛料を使った料理は今日限りとなります」

「えっ!? それって、もうこのニルシツシル（異世界版カレー）食べれないってことですか？」

カレーが大好物の園部優花がショックを受けたように問い返した。

「はい、申し訳ございません。何分、材料が切れまして… いつもならこのような事がないように在庫を確保しているのですが… ここ1ヶ月ほど北山脈が不穏ということで採取に行くものが激減しております。つい先日、調査に来た高ランク冒険者の一行が行方不明となりました。当店にも次にいつ入荷するかわかりかねる状況なのです」

「あの… 不穏ってというのは具体的には？」

「何でも魔物の群れを見たとか… 北山脈は山を越えなければ比較的

安全な場所です。山を1つ越えるごとに強力な魔物がいるようですが、わざわざ山を越えてまでこちらには来ません。ですが、何人かの者がいるはずのない山向こうの魔物の群れを見たのだとか」

「それは、心配ですね…。」

畑山たちが表情を暗くすると、フォスは申し訳なさそうに頭を下げた後。場の雰囲気盛り返すように明るい口調で話を続けた。

「しかし、その異変ももしかするともう直ぐ収まるかもしれませんよ」「どういうことですか?」

「実は、今日のちょうど日の入り位に新規のお客様が宿泊にいらしたのですが、何でも先の冒険者方の搜索のため北山脈へ行かれるらしいのです。フューレンのギルド支部長様の指名依頼らしく、相当な実力者のようですね。もしかしたら、異変の原因も突き止めてくれるやもしれません」

畑山たちはピンと来ないようだが、食事を共にしていたデビッド達護衛の騎士は一樣に「ほう」と感心半分興味半分の声を上げた。フューレンの支部長と言えばギルド全体でも最上級クラスの幹部職員である。その支部長に指名依頼されるというのは、相当どころではない実力者のはずだ。同じ戦闘に通じる者としては好奇心をそえられるのである。騎士達の頭には、有名な『金』クラスの冒険者がリストアップされていた。

愛子達が、デビッド達騎士のざわめきに不思議そうな顔をしていると、二階へ通じる階段の方から声が聞こえ始めた。男2人の声と少女2人の声だ。何やら少女の1人が男の1人に文句を言っているらしい。それに反応したのはフォスだ。

「おや、噂をすれば。彼等ですよ。騎士様、彼等は明朝にはここを出るそうなので、もしお話になるのであれば、今のうちがよろしいかと」

「そうか、わかった。しかし、随分と若い声だ。『金』に、こんな若い者がいたか？」

デビッド達騎士は、脳内でリストアップした有名な『金』クラスに、今聞こえているような若い声の持ち主がいないので、若干、困惑したように顔を見合わせた。

そうこうしている内に、4人の男女は話ながら近づいてきており、その内容が聞こえてきた。

「よっしゃついた！」

「席に座って早く米を食べよ」

「…待って”ハジメ”早い」

「”ルピ””ハジメ”ユエが置いていかれてる」

「ごめん」

「すまん、”日本”の飯が食えるのは今後難しいかもしれないから少しはしゃいでた」

「いいよ、私もその”ルピ”の故郷の”日本”料理食べたくて少し興奮してたし」

「まあとりあえず飯食おう」

尋常ではない愛子や生徒達の様子にフォスや騎士達は一体何事だと顔を見合わせる。そうこうしているうちに声は段々と愛子達のテーブルから遠ざかっていく。それに気が付いた愛子は慌てて立ち

上がって、転びそうになりながらもカーテンを引きちぎる勢いで開け放った。

シャアアア!!

存外に大きく響いたカーテンの引かれる音にギョツとして立ち止まる4人の男女。驚いた様子で音のした方を振り返っており、愛子とばっちり目が合った。

「南雲君、ルピ君ですか……?」

「え……先生?」

「はあ」

愛子の目の前にいたのは、記憶の中にある彼らとは大きく異なった外見をした2人の生徒だった。

意外な人物との再会（後編）

「南雲君、ルピ君ですか……？」

「え………先生？」

「はあ」

まさか先生がいるとは、しかもクラスメイトまで、めんどくさいな

「本当にルピ君と南雲……君なんですね……良かった。2人とも生きていたんですね……」

「ええ。お久しぶりです、畑山先生」

「なんとか生き残っています」

「良かった。本当に良かったです」

愛子先生が、感動して涙目になっている。どうやら感動しすぎて言葉が出てこないようだ。こういうことは逃げると逆に騒ぎが大きくなるものだ。もし俺たちが逃げようとしていたら愛子は必死に問い詰めていただろう。堂々としていた方がイニシアチブを取れることもある。

だが流石にこれは予想できなかった。

「本当に。本当に良かった」

そういつて俺とハジメに抱きついてきたのだ。その愛子の行動に固まる俺とハジメ。

愛子のすすり泣く声がレストランに響き渡る。幾人かいた客達も

噂の「豊穰の女神」が男二人に寄りかかって泣いている姿に、「すわっ、女神に男が!？」「修羅場きたー」と愉快的勘違いと共に好奇心に目を輝かせている。生徒や護衛騎士達もぞろぞろと奥からやって来た。

俺とハジメは身動き一つ取れなかった。流石に泣きだす愛子の姿にどうしていいのか内心パニックになっていた。心なしか後ろの目が痛いような気がする。

しばらくそうしていたがとうとう我慢できなくなったのかユエが行動する。

「離れて……ハジメが困っている」

ユエナイス!

そう見知らぬ美少女に言われて自分の姿を顧みたのか、すみませんと謝りながらハジメと俺から離れる。生徒とはいえ公衆の面前で男に、それも二人に抱きついて泣きだす自分の姿を想像して恥ずかしくなったのか顔を赤くしている。その姿に騎士達が僅かに殺気立つ。

ルピside↓三人称

「すみません、取り乱しました。改めて、南雲君とルピ君ですよね?」

その言葉にようやく覚悟を決めたハジメが答えた。

「はい先生」

「やっぱり、やっぱりそうなんですネ……生きていたんですネ……」

再び泣きそうになる愛子にルピがフォローを入れる。

「まあ、色々あったけど生きてます。心配かけてすみません先生」

その言葉にまた何もいえなくなった愛子。

そして席に座り注文を開始する

まるで昨日別れて今日出会ったという雰囲気醸し出し始めたハジメ達にようやく落ち着いた愛子がハジメ達に追及を開始する。

「南雲君、まだルピ君まだ話は終わっていませんよ。なに、物凄く自然に注文しているんですか。大体、こちらの女性達はどちら様ですか？」

愛子の言い分は、その場の全員の気持ちを代弁していたので、漸くハジメが四ヶ月前に亡くなったと聞いた愛子の教え子であると察した騎士達や、愛子の背後に控える生徒達も、皆一様に「うんうん」と頷き、ハジメの回答を待った。ちなみに蓮弥はさりげなく視線から外れていた。

「依頼のせいで一日以上ノンストップでここまで来たんです。腹減ってるんだから、飯くらいじっくり食べさせてください。それと、この人たちは……」

「…ユエ、ハジメの女」

「シアです、ルピの女！」

愛子が若干どもりながら「えっ？ えっ？」と正彦と二人の美少女を交互に見る。

上手く情報を処理出来ないらしい。

愛子の後ろでは、女子陣が「ええ!？」と驚愕の声を上げつつ、ユエとシアを交互に忙しなく視線をやり、淳史達男子陣はあり得ないものを見たかのように愕然としている。

「ははは、……」

「……」

「ハジメは私の救世主で思っている人」

「確かにルピは私達からすれば救世主だしね。それに私の“私のファーストキス”を奪ったからね／＼／＼」

シアの“ファーストキスを奪った”という発言で、遂に情報処理が追いついたらしく、愛子の声が一段低くなる。

愛子の頭の中では、2人が美少女を侍らているように見えてしまった

顔を真っ赤にして、ルピとはハジメにその顔を向ける。その顔にハジメとルピは「「やっべ」」という顔をしていたが時すでに遅しである。その顔は、非行に走る生徒を何としても正道に戻してみせるという決意に満ちていた。

そして、“先生の怒り”という特大の雷が、「ウルの町」一番の高級宿に落ちた。

「女の子のファーストキスを奪った挙句、女遊びだなんて！もしそうなら……許しません！ ええ、先生は絶対許しませんよ！ お説教です！ そこに直りなさい、南雲君・ルピ君！」

————— 少年たち 説教 中—————

説教後、他の客の目もあるからとVIP席の方へ案内された正彦達。

そこで、愛子や優花達生徒から怒涛の質問を投げかけられつつも、一向は、目の前の今日限りというニルシツシル（異世界版カレー）に夢中で端折りに端折った答えをおぎなりに返していく。

Q 橋から落ちた後、どうしたのか？

A 這い上がってきた

Q なぜ白髪なのか

A ストレスによるものだと仮定している

Q なぜ、直ぐに戻らなかったのか

A ほかのやるべきことができたから

そこまで聞いて愛子が、「真面目に答えなさい！」と頬を膨らませてぷりぷりと怒る。全く、迫力がないのが物悲しいが。

ハジメとルピは「本当のことなんだけど、…」という顔になっているが美味そうに2人と感想を言い合いながらニルシツシルに舌鼓を打つ。表情は非常に満足そうだ。

その様子に、もう我慢ならんと怒りをあらわにしたのは、愛子ラブのデビッドだ。

愛する女性が蔑ろにされていることに耐えられなかったのだろう。目をギンツと吊り上げて、拳をテーブルに叩きつけながら大声を上げた。

「おい、お前！ 愛子が質問しているのだぞ！ 真面目に答えろ！」

「いやいや、ありのままのことを話しているぞ、むしろこれ以上話すこともない。それに食事中だ静かにしてくれ」

全く相手にされていないことが丸分かりの物言いに、元々、神殿騎士にして重要人物の護衛隊長を任されているということから自然とプライドも高くなっているデビッドは、我慢ならないと顔を真っ赤にした。

ルピに怒りの視線を向けたがルピはどこ吹く風だ、その矛先をシアに変えた

「ふん、行儀だと？ その言葉、そっくりそのまま返してやる。薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるなど、お前の方が礼儀がなっていないな。せめてその醜い耳を切り落とすたらどうだ？ 少しは人間らしくなるだろう」

侮蔑をたつぷりと含んだ眼で睨まれたシアはビクツと体を震わせた。

「ブルックの町」では、宿屋での第一印象や、キャサリンと親しくしていたこと、ルピの存在もあって、むしろ友好的な人達が多かったし、「フューレン」でも蔑む目は多かったが、奴隷と認識されていたからか直接的な言葉を浴びせかけられる事はなかった。

つまり、ルピ達と旅に出てから初めて、シアは亜人族に対する直接的な差別的言葉の暴力を受けたのである。

有象無象の事など気にしないと割り切ったはずだったが、少し、外の世界に慣れてきていたところへの不意打ちだったので、思いの他ダメージがあつた。

そのため、シユンと顔を俯かせるシアだったが、直後に頭に手が置かれた。

俯かせた顔を上げると心配した顔をしたルピがいた。

「大丈夫か？」

「はい、」

それを見たハジメとユエは非難の目を聖騎士たちに向けた

よく見れば、デビッドだけでなく、他の騎士達も同じような目でシアを見ている。

彼等がいくら愛子達と親しくなろうと、そこは神殿騎士と近衛騎士である。

聖教会や国の中枢に近い人間であり、それは取りも直さず、亜族に対する差別意識が強いということでもある。何せ、差別的価値観の発信源は、その聖教会と国なのだから。

デビッド達が愛子と関わるようになって、それなりに柔軟な思考が出来るようになったといっても、ほんの数ヶ月程度で変わる程、根の浅い価値観ではないのである。

最高級ビスクドールのような美貌の少女と逆らってはいけないよ
うなオーラをまとう『無能』に、体の芯まで凍りつきそうな冷ややか

な眼を向けられて、デビッドは一瞬たじろぐも、見た目幼さを残す少女と『無能』と呼ばれていた少年に気圧されたことに逆上する。

「何だ、その眼は？ 無礼だぞ！ 神の使徒でもないのに、神殿騎士に逆らうのか！」

思わず立ち上がるデビッドを、副隊長のチェイスは諫めようとするが、それよりも早く、ユエの言葉が騒然とする場にやけに明瞭に響き渡った。

「……小さい男」

たかが種族の違い如きで喚き立て、少女の視線一つに逆上する器の小ささを嗤う言葉。

唯でさえ、怒りで冷静さを失っていたデビッドは、よりによって愛子の前で男としての器の小ささを嗤われ完全にキレた。

「……異教徒め。そこの獣風情と一緒に地獄へ送ってやる」

無表情で静かに呟き、傍らの剣に手をかけるデビッド。

突如の修羅場に、優花と淳史が咄嗟に自らのアーティファクトに手を伸ばし、愛子やチェイス達は言葉でデビッドを止めようとする。

だが、デビッドは周りの声も聞こえない様子で、遂に鞘から剣を僅かに引き抜いた。

「死ねえー！異教徒ー！」

そのままルピ達の席まで接近し剣を振り下ろそうとしたが、剣はルピの張った結界にはじかれてしまう。

「なっ」

言葉を失うデビッド、そこでルピが口を開いた

「先にそつちが手を出したからな、後悔させてやる」

そう言い終わると同時にデビッドの体が開いている窓か外に放り出された。

愛子たちはデビッドに集中しており、ルピに視線を移すとそこにい

なかった

「どこに!?!」

愛子がルピを探していると

「ルピは外にいきました先生」

ハジメがそう伝えるがさらに付け加える

「正直先生たちが見に行くのは止めた方がいいと思います」

「どうしてですか!?!」

「・・・後悔してしりませんよ」

そう言いながらハジメを先頭にしながら店から少し離れたところに行くところ

「・・・来たのか」

と言葉いうルピと

「・・・」

血だらけになっているデビッドだった

愛子たちは思わず口を押えた

「シア、気にするなよ」

「うん、..」

「大丈夫だって、シアお前のうさ耳はチャームポイントだから」

「ほんと?」

「ん、私が保証する。シアが寝た後ルピがモフツているから」

「・・・ばれてたか」

「寝ぼけて間違えってか行ったときに」

「ル、ルピ・・・私のウサミミ好きだったんだ・・・えへへ」

「はいはい、その辺にしてとりあえず宿に帰ろうよ」

「それもそうだな」

4人が去ったあと残された人たちは思いつめた顔をしていた

夜中の密会／搜索作戦

三人称

深夜を周り、一日の活動とその後の予想外の展開に精神的にも肉体的にも疲れ果て、誰もが眠りついた頃、しかし、愛子は未だ寝付けずにいた。

愛子の部屋は一人部屋で、それほど大きくはない。

木製の猫脚ベッドとテーブルセット、それに小さな暖炉があり、その前には革張りのソファアが置かれている。

冬場には、きつと揺らめく炎が部屋を照らし、視覚的にも体感的にも宿泊客を暖めてくれるのだろう。

愛子は、今日の出来事に思いを馳せ、ソファアに深く身を預けながら火の入っていない暖炉を何となしに見つめる。

愛子の頭の中は整理されていない本棚のように、あらゆる情報が無秩序に並んでいた。

考えねばならないこと、考えたいこと、これからのこと、ぐるぐると回る頭は一向に建設的な意見を出してはくれない。

大切な教え子が生きていたと知ったときの事を思い出し頬が緩むも、その後の非友好的ですらない無関心な態度に眉を八の字にする。

デビッドの言動とはいえ神殿騎士いや、人を傷つけることに忌諱感を抱かったルピ。

それを何も思わず見ていたハジメ、それを見た愛子は心が砕けるようなものを感じたが

その後の二人の少女との掛け合いを思い出し、信頼できる仲間を得ていたのだと思い、再び頬を緩める。

コンコンという音が愛子の部屋に響き渡る

「は〜い今出ます」

扉を少し開け廊下をのぞき込むが誰もおらず首をかしげる愛子だったが

「先生どこを見てるんですか?」

という背後からの声に驚きドアから逃げようとしたが聞き覚えのある声に振り返ってみると

「ルピ君？」

「はい、夜分に失礼します。」

昼間とほぼ変わらない姿をしているルピだった、少し変わっている点を言えば変なバイザーをつけているところぐらいだろうか

「こんな時間に、しかも女性の部屋にノックもなくいきなり侵入とは感心しませんよ。」

「ノックはしましたが」

「なるほど先ほどのノックはルピ君が、でもどうやって姿を見せずこの部屋に？」

「少し気配を薄くして、、、というよりも自分の部屋の付近にあの騎士たちがいたもんですから、事を荒立てたくないように」

「わかりました、それで私に何の用ですか？」

「単刀直入に言うならばこの世界の真実です」

「!!」

この発言に今日何度目かわからない驚きを見せる

ルピはオスカーから聞いた“解放者”と狂った神の遊戯の物語を話し始めた。

「そんな、、」

「おそらくですが、仮にクラスメイト全員が地球に帰ればエヒトは地球を侵略しに来るでしょう」

「え、それって」

「はい、おそろくですがエヒトはどうやらこの地に降臨できないらしく、どこからか指示を行いこの世界を暇つぶしのおもちやとも思っているんでしょう」

「でも、地球は」

「考えてみてください、私達が呼ばれたのが戦争にアクセントを加えるためならば辻褄が合いませんか？この盤面をかき回すジョーカーが勝手に消えるんです。間違いなくエヒトは地球に干渉してきます。今回は高校生でしたが次はどんな人がこの被害者になるかもわかりません」

「・・・」

情報を咀嚼し、自らの考えを持つに至るには、まだ時間が掛かりそうである。

「今回の話を嘘だと思うならば思っても構いません。また真実だと思うならば行動しても構いませんがこの話は他言無用でお願いします」

「ル、ルピ君は、もしかして、その『狂った神』をどうにかしようとして・・・旅をっ」

「いいえ、とりあえずはこの世界から脱却を目的として動いています。が、邪魔をするならばすべてを壊し道をあげ、もしあの3人に何かあれば行動を起こした首謀者を地獄へと送る覚悟を持って行動します」

「もしかして3人の中にエヒトから狙われている人がいるんですか

「？」

「どうしてそう思ったんですか？」

「なんかそのルピ君の雰囲気が変わったので」

「はあ、先生は先生ですね」

「当然です！」

ものすごくドヤっているが無視して話が続く

「先生はユエを覚えていますか？」

「ああ、あのハジメ君の女と言っていた」

「はい、そうです。ユエがなぜかエヒトに狙われています」

「どうして？」

「おそらくエヒトはこの世界に降臨できないと言いましたが、依り代に憑依するという形を取れば、」

「なるほど、でもなぜあの子が？」

「ユエは地下深くで封印されていました、その部屋を探索した際に手記がありどうやらユエは昔に魔法の天才と称されていました。おそらくそれで目を付けたのでしょう」

「あんな小さい子を封印!?すごく大変な子だったですね」

(まあ完全に【幼女】だからな外見はそれ以上は考えないでおこう)

「それでルピ君はどうするんですか？」

「皆を地球に返した後、

エヒトを殺します例え刺し違えても」

「っ!!」

「少し話過ぎましたね。それではおやすみなさい」

「八重樫さんたちは諦めていませんでしたよ」

「……」

愛子から掛けられた予想外の言葉にルピの歩みが止まる。

愛子は、背中を向けたままのルピにそつと語りかけた。

「皆があなた達は死んだと言っても、彼女たちは諦めていませんでした。自分の目で確認するまで、あなた達の生存を信じると。今も、オルクス大迷宮で戦っています。天之河君達は純粹に実戦訓練として潜っているようですが、彼女たちはあなた達を探すことが目的のようです」

「……………雫は無事ですか？」

長い沈黙の後、ルピは愛子に尋ねる。

自分達を案じることはあっても基本的に無関心な態度をとっていたルピが他者を心配するような言葉に、愛子は、まだルピが完全に人の心なくしかけていたと感じたがそれは杞憂に終わったようで顔に喜びを表した

「は、はい。【オルクス大迷宮】は危険な場所ではありますが、順調に実力を伸ばして、攻略を進めているようです。時々届く手紙にはそうありますよ。やっぱり気になりますか？ ルピ君と八重樫さんは仲がよかったですもんね」

「先生私の言うことを彼女たちに伝えてください、警戒すべきなのは味方だと」

「え？ それはどういう……………」

「ベヒモスを弱らせ皆の元まで帰ろうとしましたが、あの時に魔法がタイタンに命中しました。正直タイタンだからよかったものの、生身の人間が食らえば奈落の底いきだっただけでしょう、」

「……………」

「もしそいつにあつたならそいつにつけを払わしてやる、それでは」
シンとする部屋に冷気が吹き込んだように錯覚し、愛子は両腕で自らの体を抱きしめた。

大切な生徒が仲間を殺そうとしたかもしれない。
生徒が何より大切な愛子には、受け入れ難い話だ。

だが、否定すればルピの言葉も理由もなく否定することになる。
そして、何も言わなければ生徒が傷つく。

生徒を信じたい心がせめぎ合う。

愛子の悩みは深くなり、普段に増して眠れぬ夜を過ごした。

※※※三人称↓シアside

朝目が覚めると、横にルピさんがいる、、へっ？

部屋割りは私とユエ

ハジメ・ルピだったんだけど、、しかも抱きつかれてる／／／／／
食べちゃいたいけど、朝だから、、そうだ今度食べよう

ルピ、兔の性欲は強いんだよ♡

chu♡

今はこれで我慢するね

「んっ、おはようシア」

「おはようルピ」

「じゃあ行くか」

「うん」

朝宿から出ていくときにオーナーがおにぎりを握ってくれた、断るのも失礼だからという理由で貰っていった、そしてハジメ達の道合わせ場所に行く人と人影を多い

「……何となく想像つくけど一応聞きます……何してるんですか？」

ルピは半ばあきらめた声で聴いている、、なんか疲れている？

愛子先生？が、毅然とした態度を取るとルピと正面から向き合っ

た。

少し離れた場所で移動用に用意したらしい馬を撫でながら、何やら話し込んでいた人たちも私達がやってきたことに気が付いて愛子の傍に寄ってくる。

「私達も行きます。行方不明者の搜索ですよ。人数は多いほうがいいです」

「却下します。」

「な、なぜですか？」

「単純に足の速さが違うので、ここは下がってくれませんか」

「足の速さが違うって……ねえ、南雲。まさか、馬に乗るより、走った方が速いとか言うんじゃないわよね？ 私等のことはどうでもいいからって、流石に、それは断りの言葉として適當すぎない？」

「はあ、ハジメもう実物見せた方が早くないか？」

「そうだね」

なんかこの人たちなんか上から目線でなんかこう、うーん
なんかごたごたしている間にハジメが車を出してた

それでもついてくる先生、生徒思いの良い人なのかも

尚先生がついてくる理由は 一つは、昨夜のルピの発言の真偽を探るためだ。

「クラスメイトに殺されかけた」という愛子にとって看過できないその言葉が、本当に正彦の勘違いでなく真実なのか、そして真実だとして正彦は相手に心当たりはないのか。

もしかするとこの先起こるかもしれない不幸な出来事を回避するためにも正彦からもっと詳しい話を聞きたかった。

搜索が終わった後、もう一度ルピ達と会えるかはわからない以上、この時を逃すわけには行かなかったのだ。

もう一つの理由は、現在、行方不明になっている清水幸利の事だ。八方手を尽くして情報を集めているが、近隣の村や町でもそれらし

い人物を見かけたという情報が上がってきていない。

しかし、そもそも人がいない【北の山脈地帯】に関しては、まだ確かな情報収集をしていなかったと思いたい当たったのだ。

事件にしろ自発的失踪にしろ、まさか【北の山脈地帯】に行くとは考えられなかったので当然ではある。

なので、これを機に自ら赴いて、ルピ達の搜索対象を探しながら清水の手がかりもないかを調べようと思ったのである。

先生とルピがなにか言いあっているけど折れた、ルピが折れた珍しい、ルピってこういうのには強いイメージがあったから、何とか珍しい

「ルピ、連れて行くの？」

「ああ、この人は、どこまでも『教師』なんだな。生徒の事に関しては妥協しない。そこは普通に尊敬している。放置しておく方が、後で絶対面倒になる」

「いい先生なんだね」

「でも、この車じゃ乗れても6人でしょ？ どうするの？」

「俺は別のつてがある、俺以外のやつらはでかめの車出すからそれに乗れ」

「ルピはどうするの？」

「それは後のお楽しみ、じゃ先に行ってな後で追いつくから」

山の探索

ルピside

さーと先生たちを見送ったし、とりあえず人目が見つからないところまで来たしここらへんでいいか

「おーい出てこいBT」

「・・・やつとですか」

「不機嫌か？」

「そうですよ！いつまで私のことを放置してたんですか！」

「2種間ぐらい？」

「最近宝物庫からでも周りのことを見てましたけど、」

「なんかすまん」

「いいんですよ、今度から宝物庫にいてもサポートが可能になりましたから」

「とりあえず荒れだすか」

「やっとあれを使うんですね」

「それより気になることあるけど、」

「何か？」

「お前そこまで自立意識あったか？」

「・・・」

「凶星だな、特に何もする気もないから安心しろ。今の方がやりやすいからな」

「よ、良かった」

「ははは、機械がなんか安心するモーションは面白いな」

「とりあえず、私のコアを【ノーススター】に」

「……………少　し　経　つ
た……………」

「なじむか？」

「はい、問題なく行動可能です。BT-001オンライン」

「ここで軽く解説【ノーススター】」

中々長距離からの狙撃を得意とする軽量型タイタン。デフォルトのダッシュ回数は2回。

主兵装のプラズマレールガンは全武器中でもトップクラスの単発火力と射程を持つため、位置取りさえしつかりしていれば遠距離から一方的に大ダメージを押し付けることが可能な機体

尚ルピが開発したのは、キャンペーンで悪夢を見せてきた【バイパー】と同じ機体なため、無限ホバリングが可能

解説終わり！詳しくは後書きにて

「それじゃ行くか」

タイタンのコックピットに乗り込むがなぜか落ち着く、まあいい

「全機能オンライン、いつでも出発が可能です」

「じゃいくぞ、テイクオフ！」

ルピside↓ハジメside

僕たちが山の麓につくと紅や黄という葉が僕たちを歓迎してくれました。もつと見てたかったけど、今は仕事次に来る時があるならばその時に楽しもう。車を宝物庫に直して、あれを出さないと

ハジメが取り出したのは全長三十センチ程の鳥型の模型と小さな石が嵌め込まれた指輪と片眼鏡だった。模型の方は灰色で頭部にあたる部分には水晶が埋め込まれている。

「さてどうまくいきますかね」

指輪を嵌めて、模型を空に投げて動けばおk、ダメだったら改造して使えるように、

『生まれつきの能力の問題もまったく無視はできない。それでもやはり、これはおまけみたいなものだ。絶え間なく、粘り強く努力する。これこそ何よりも重要な資質であり、成功の要といえる。』

これがこの世界における僕のモットーだから僕はめげない、諦めない、必ず生きて地球へ、関係ないことを考えていたけど、とりあえずは今の仕事に集中しよう

尚、放り投げた偽物の鳥達は重力に引かれ地に落ちるかと思われた、しかし、空中でふわりと浮く。

四機の鳥は、その場で少し旋回すると山の方へ滑るように飛んでいった。

ハジメたちは山の中に進む

「どうかしましたか先生？」

「あの、あれは……」

先生たちは僕が作ったものに疑問を浮かべながら聞いてくる、多分だけど先生が代表して聞いてきた感じかな？

「あれですか？あれは無人偵察機です、〔無人偵察機オルニス〕
そこからオルニスの解説が始まった

——重力制御式無人偵察機 “オルニス”

ハジメが「無人偵察機」と呼んだ鳥型の模型は、「ライセン大迷宮」で遠隔操作されていたゴーレム騎士達を参考に、ミレディから快く贈ってもらった材料から作りだされたものだ。

生成魔法により、そのままでは適性がないために使い物にならない重力魔法を鉱物に付与して、重力を中和して浮く鉱物「重力石」を生成した。

それに、ゴーレム騎士を操る元になっていた「感応石」を組み込み、更に、「遠透石」を頭部に組み込んだのだ。

「遠透石」とは、ゴーレム騎士達の目の部分に使われていた鉱物で、感応石と同じように、同質の魔力を注ぐと遠隔にあっても片割れの鉱物に映る景色をもう片方の鉱物に映すことができるというものだ。そしてハジメの片眼鏡に共有されている。

「とにかくすごいですね!」

はっ!少しオタク口調が出てきたしまった、どうもこうも自分の性というのが出てきてしまう。周りを見渡すとみんな頭に?マークが浮かんでいる。

「少し喋りすぎましたね、少し飛ばしますがいいですか?」

このままいくと山を登るのだけで1日過ぎてしまう、僕たちだけで野宿する分には大丈夫だけど流石に先生たちを守りながら野宿するのはかなり難しい。

少し先生たちの体力が不安だけどこのままだと絶対に時間が足りない、先生たちには悪いけど飛ばしてある程度までは行かないと

「はい私は大丈夫ですが、皆さんは大丈夫ですか?」

みんなは先生の質問に首を縦に振った

「わかりました、それでは少し飛ばします」

※※※※

「はあはあ、きゅ、休憩ですか……けほっ、はあはあ」

「ぜえー、ぜえー、大丈夫ですか……愛ちゃん先生、ぜえーぜえー」

「うえつぷ、もう休んでいいのか? はあはあ、いいよな? 休むぞ?」

「……ひゅうーひゅうー」

「ゲホゲホ、南雲達は化け物か……」

やっぱりといった感じになってしまった、確かに先生たちはこの世界においてはチート級の能力値をしているけど、僕たちはステータスが4桁に突入している。

ユエも息切れしているけどまだまだいけるといった顔をしているし、シアに関しては余裕といった表情をしている

でもルピはどこに？と考えていたところに上に見たことのない物体がとどまっている

「…ハジメあれ何？」

「確かにあれ何？少なからず攻撃する気はないことだけはわかるけど」

「わからない、でもあれこっちに来てない？」

先生たちはまだあれに気が付いていない…、もしあれがミレディ級の力があると仮定すれば先生たちを守りながら戦うのは分が悪い…、

「どうする？」

「ちよっと待って」

「どうしたのシア？」

「なんとなくなんですがあれタイタンに見えませんか？」

「…確かに、よく見てみるとタイタンに見えるけど本当にルピ？」

「一応警戒しておこう」

対応を決めた後に急に念話が届いた

『あーこちらルピだ、通信できているか?』

思わずユエとシアの顔を見てみると2人とも驚いた顔していた。

『えっと、ハジメだけどそれ何?』

『そうだよ、それ何?なんで空を飛んでいるの?』

シアは興味津々といった感じだった、、なんか多分だけど空を飛びたいのかな?

『…負けた』

ユエは勝手に負けたと思っているし、、はあ

『まあなんだ、これまでどこそそと作っていたやつの正体だ。あと念話はどこからでも通るから』

『上空から探索を任せても?』

『おk』

『それじゃ頑張って』

『お前らもな』

そう言い終わると空からの捜索に行ってしまった、何かあればこちらからの念話で連絡は取れるということを書いてたし頑張っていますか

「先生、今から動いていきます。大丈夫ですか?」

「大丈夫です」

「そうですか、今から動いていきます」

※※※※ハジメ side ↓ 三人称

「川の上流に……これは盾？ それに、鞆も……まだ新しいみたい。当たりかもしれないよ、そっちの方に動くよ」

「…ん」

「うん！」

ハジメ達が、阿吽の呼吸で立ち上がり出発の準備を始めた。

愛子達は本音で言えばまだまだ休んでいたかったが、無理を言っただけで来た上、何か手がかりを見つけた様子となれば動かないわけにはいかない。

疲労が抜けきらない重い腰を上げて、再び猛スピードで上流へと登っていくハジメ達に必死になって追従した。

ハジメ達が到着した場所には、ハジメがオルニスで確認した通り、小ぶりの金属製のラウンドシールドと鞆が散乱していた。ただし、ラウンドシールドは、ひしゃげて曲がっており、鞆の紐は半ばで引きちぎられた状態で、だ。

ハジメ達は、注意深く周囲を見渡す。すると、近くの木々の皮が剥がれているのを発見した。高さは大体二メートル位の位置だ。何かを擦れた拍子に皮が剥がれた、そんな風に見える。高さからして人間の作業ではないだろう。

ハジメは、シアに全力の探知をお願いしながら、自らも集中して気配を探り、傷のある木の向こう側へと踏み込んでいった。

先へ進むと、次々と争いの形跡が発見できた。半ばで立ち折れた木や枝。踏みしめられた草木、更には、折れた剣や血が飛び散った痕もあった。それらを発見する度に、愛子達の表情が強ばっていく。

特に、死の恐怖に一度は心を折られた優花達は、「オルクス大迷宮」

で死にかけてた時のことを思い出したのか、一見して分かるほど顔色が悪くしている。震えそうになる体を、必死に抑えようとしているのが分かった。

そんな愛子や優花達を尻目に、しばらくの間、点在する争いの形跡を追っていると、シアが前方になにか光るものを発見した。

「ハジメ、これ、ペンダント?」

「ん? ……遺留品かも。確かめよう」

シアからペンダントを受け取り汚れを落とすと、どうやら唯のペンダントではなくロケットのようだと思がつく。留め金を外して中を見ると、女性の写真が入っていた。

おそらく、誰かの恋人か妻と言ったところか。大した手がかりではないが、古びた様子はないので最近のもの……冒険者一行の誰かのものかもしれない。なので、一応回収しておく。

その後も、遺品と呼ぶべきものが散見され、身元特定に繋がりそうなものだけは回収していく。どれくらい探索したのか、既に日はだいぶ傾き、そろそろ野営の準備に入らねばならない時間に差し掛かっていた。

未だ、野生の動物以外で生命反応はない。ウィル達を襲った魔物との遭遇も警戒していたのだが、それ以外の魔物すら感知されなかった。位置的には八合目と九合目の間と言ったところ。山は越えていないとは言え、普通なら、弱い魔物の一匹や二匹出てもおかしくないはずで、ハジメ達は安堵どころか逆に不気味さを感じていた。

しばらくすると、再び、オルニス異常のあった場所を探し当てた。東に三百メートル程いったところに大規模な破壊の後があったのだ。ハジメは全員を促してその場所に急行した。

尚、ルピは山の麓から5合目あたりを搜索している

そこは先ほど休憩した小川よりも大きな川だった。上流に小さい滝が見え、水量が多く流れもそれなりに激しい。本来は真っ直ぐ麓に向かって流れていたであろうが、現在、その川は途中で大きく抉れ

ており、小さな支流が出来ていた。

まるで、横合いからレーザーか何かに抉り飛ばされたようだ。

そのような印象を持ったのは、抉れた部分が直線的であったのと、周囲の木々や地面が焦げていたからである。更に、何か大きな衝撃を受けたように、何本もの木が半ばからへし折られて、何十メートルも遠くに横倒しになっていた。

川辺のぬかるんだ場所には、三十センチ以上ある大きな足跡も残されている。

「ここで本格的な戦闘があった……この足跡、大型で二足歩行する魔物……確か、山二つ向こうにはブルータルって魔物がいた。だけど、この抉れた地面は……」

ハジメの言うブルータルとは、RPGで言うところのオークやオーガの事だ。大した知能は持っていないが、群れで行動することと、「金剛」の劣化版「剛壁」の固有魔法を持っているため防御力が高く、中々の強敵と認識されている。普段は二つ目の山脈の向こう側におり、それより町側には来ないはずの魔物だ。それに、川に支流を作るような攻撃手段は持っていないはずである。

ハジメは、しゃがみ込みブルータルのもものと思しき足跡を見て少し考えた後、上流と下流のどちらに向かうか逡巡した。ここまで上流に向かつてウイル達は追い立てられるように逃げてきたようだが、これだけの戦闘をした後に更に上流へと逃げたとは考えにくい。体力的にも、精神的にも町から遠ざかるという思考ができるか疑問である。従って、ハジメは、念の為、オルニスを上流に飛ばしながらも自分達は下流へ向かうことを提案した。ブルタールの足跡が川縁にあるということは、川の中にウイル達が逃げ込んだ可能性が高いということだ。ならば、きつと体力的に厳しい状況にあった彼等は流された可能性が高いと考えたのだ。

今度は下流へ向かって川辺を下っていった。

すると、今度は、先ほどのものとは比べ物にならないくらい立派な滝に出くわした。

ハジメ達は、軽快に滝横の崖をひよいひよいと降りていき滝壺付近に着地する。滝の傍特有の清涼な風が、一日中行っていた探索に疲れた心身を優しく癒してくれる。と、そこでハジメの「気配感知」に反応が出た。

「！ これは……」

「見つかったの？」

「ハジメ？」

ユエとシアが、直ぐ様反応し問いかける。ハジメはしばらく、目を閉じて集中した。

そして、おもむろに目を開けると、驚いたような声を上げた。

「……気配感知に掛かった。感じから言ってみれば人間だと思おう。場所は……あの滝壺の奥にある」

「生きてる人がいるってことですか！」

愛子の驚きを含んだ確認の言葉にハジメは頷いた。

「ユエ、お願い」

「……ん」

ハジメは滝壺を見ながら、ユエに声をかける。ユエは、それだけでハジメの意図を察し、魔法のトリガーと共に右手を振り払った。

「――『波城』―― 『風壁』」

すると、滝と滝壺の水が、紅海におけるモーセの伝説のように真つ二つに割れ始め、更に、飛び散る水滴は風の壁によって完璧に払われた。高圧縮した水の壁を作る水系魔法の「波城」と風系魔法の「風壁」である。詠唱をせず陣もなしに、二つの属性の魔法を同時に応用して行使したことに、愛子達は、もう何度目かわからない驚愕に口をポカンと開けた。きつと、かつてのヘブライ人達も同じような顔をしていたに違いない。

魔力も無限ではないので、ハジメは、愛子達を促して滝壺から奥へ

続く洞窟らしき場所へ踏み込んだ。洞窟は入って直ぐに上方へ曲がっており、そこを抜けるとそれなりの広さがある空洞が出来ていた。天井からは水と光が降り注いでおり、落ちた水は下方の水溜りに流れ込んでいる。溢れないことから、きつと奥へと続いているのだろう。

その空間の一番奥に横倒しになっている男を発見した。

黒と白

ハジメ side

僕たちは滝の裏の洞窟らしき場所に足を進めたが、そこに男性が寝転がっていた。

しかし、その男の顔色は優れなさそうに見える。服もかなり汚れている、、頭の方に目を向けるとカバンがあり、食料があった。

僕が寝転がっている男性に近づき

「大丈夫ですか？」

「と言いなながら体を揺さぶってみるが、返事がなく先ほどよりも力を込めて揺さぶってみながら

「返事をしてください！大丈夫ですか!？」

少し息があるがかなり衰弱している、、早くウルへと運ばないといけないかもしれない、、

『こちらハジメ、おそらく救助対象を確認したけど、かなり衰弱してて、、』

『とりあえずその救助対象対象を保護しながらウルに帰ってほしいけど、、』

『けど?..』

『山にしては静かすぎないか?鳥の鳴き声とかも聞こえてない、魔物も一匹も出てきていない、、上空から探してもだ』

『つまりよくないことが起こっているということ?..』

『多分な、だから無理無理にでもそいつを起こした方がいいぞ。さすがに意識不明のやつ背負いながら遭遇戦はかなりきついだろう、それに先生たちもいるから、、その辺を考えたらそいつをたたき起こして最低限の自衛はしてもらおう、のが丸いと思う』

『ちなみにルピの方は何かあった?』

『一部の木が凍っていた、それにレーザー痕もそこにあった』

『僕たちの方にはレーザー痕はあったけど凍っている木はなかったよ、もしかして厄介なのが2匹いる感じ?』

『その認識で間違いないと思う、とりあえず俺もその周辺区域に向かうからそれまでに救助対象を起こしておいてくれ、周辺区域に近付いて何かあれば連絡する』

『了解』

「すみません!起きてください!」

さつきよりも力を入れて揺さぶってみると

「う、うーんここは?」

「いきなりですいませんがあなたはクデタ伯爵家三男のウィル・クデタさんですか?」

「は、はい」

「良かったです、私たちはフューレンのギルド支部長イルワ・チャングからの依頼で捜索しに来たものです。生きていて良かったです」

「イルワさんが!? そうですか。あの人が……また借りができてしまったようだ……あの、あなたも有難うございます。イルワさんから依頼を受けるなんてよほどの凄腕ですね」

「つらいことを思い出させてしまうかもしれませんが何があったお聞きしてもよろしいですか」

何があったのかをウィル達から聞いた。そして要約するところだ。

――――― 回 想 開

始―――――

ウィル達は五日前、ハジメ達と同じ山道に入り五合目の少し上辺りで、突然、十体のブルータルと遭遇したらしい。流石に、その数のブルータルと遭遇戦は勘弁だと、ウィル達は撤退に移つたらしいのだが、襲い来るブルータルを捌いているうちに数がどんどん増えていき、気がつけば六合目の例の川にいた。

そこで、ブルタルの群れに囲まれ、包囲網を脱出するために、盾役と軽戦士の二人が傷を負ったのだという。それから、追いつてられながら大きな川に出たところで、前方に絶望が現れた。

漆黒の竜と純白の竜だったらしい。

その黒竜は、ウィル達が川沿いに出てくるや否や、特大のブレスを吐き、その攻撃でウィル達は吹き飛ばされ川に転落。純白の竜は特に何もすることなくただ一向の様子を見ていただけと言っていた

流されながら見た限りでは、そのブレスはウィル達を吹き飛ばすように地面に向けて放たれ、全員、川に叩き込まれたのだ。ウィルは、流されるまま滝壺に落ち、偶然見つけた洞窟に進み空洞に身を隠していたらしい。

何となく、ルピとハジメの境遇に少し似ていると思わなくもない。

ウィルは、話している内に、感情が高ぶったようですり泣きを始めた。無理を言って同行したのに、冒険者のノウハウを嫌な顔一つせず教えてくれた面倒見のいい先輩冒険者達。

そんな彼等の手助けをすることが出来ずに、助けが来るのを待つことしか出来なかつた情けない自分、救助が来たことで気が緩んだよう

だ。

—————
回 想 終

「わ、わだじはなざげない。うう、みんなきずづいでしまったのに、何のやぐにもただない、ひつく、わたじだけぶじで……それを、ぐす……よろこんでる……わたじはっ！」

「坊ちゃん……」

洞窟の中にウイルさんの慟哭が木霊する。誰も何も言わなかった。顔をぐしゃぐしゃにして、自分を責めるウイルさんにクラスメイトは憐れむような表情でウイルを見つめ、先生はウイルの背中を優しくさする。

ユエは何時もの無表情、シアは困惑しているように見える、

正直な話をするならば限りなく僕と同じ状況だ、僕1人では何もできない、ルピのがいたからこそあそこで『ドンナー』を作れた、ユエがいたから最後の番人を殺せた、まるでウイルさんの話を聞いていると『お前が生きるのは間違っている、他人のおかげで生きている癖に』と言われた気分になった

だからウイルさんには悪いけど八つ当たりさせてもらおう、自分の言葉も向けて

「情けないと思うことの何が悪いんですか？ 何の役にも立たない？

周りが傷ついて自分だけが無事？ それを喜んでるのがダメだつて？ 馬鹿にもほどがありますよ！ いいかですか？ あなたは1人だけ今この世界に立っています、その死んでいった人たちを思うなら最後まであがいて生きてください！それがあなたにできる贖罪です」

「だ、だが……私は……」

「何ですか？まだ私のせいで死んでいったとでも思ってるんですか？死んでいった人達に思いをはせるのは自由ですが、いつまでもそんな過去にとらわれていては何もできません！過去を思い返すことはい

つてもできます、でもこの瞬間は今しかないんです！そしてあなたがその方々にできるのはこの世の中で生き続けること、それはあなたにしかできないんです！」

「……生き、続ける」

「…、そうです、それがあなたにできる最大の贖罪です」

かなり熱くなってしまった、正直に言うとな僕がルピのできることはほとんどのないし、実際ルピを上回るのは錬成だけ、でもルピにこのこと言ったときは『そう深く考えるな、ただがむしゃらに生き続ける、生きてさえいれば何か幸せなことがある』だから生きるこの先に何かがあると信じて、…、

だからウィルさんの言葉・境遇を自分に重ねしまったのかもしれない、

「……大丈夫、ハジメは間違っていない」

「……ユエ、ありがとう」

「……全力で生きて。生き続けて。ずっと一緒に。ね？」

「……うん。何が何でも生き残る……一人にはしないよ」

「すいませんがお二人さんここから先は宿でお願いしても？」

「あああ、ごめんシア急いで山を下りようか」

「…もう少ししかかった」

「さすがにこれ以上はまずかったから、その今度なにかあったとき何かするからそれでお相子にしてくれない？」

「…わかった、今度何かあったときは」

そして僕たちは滝つぼから出ると、BTがいた。そして漆黒の竜と純白の竜がいた

なんか残念なやつ

俺はノーススターに乗ってハジメ達がいる洞窟付近で飛行していたが、2つの影が近づいてきたのに気づいた

「は？」

その魔物を見て思わず素っ頓狂な声が出た、その魔物は身体を鱗に覆われ、4つの足を持ち、尾をもち、1対の翼と頭角を持った、白龍と黒龍だった。

「BTあの魔物について情報はあるか？」

「い、いえデータベースにもないです。パイロット最大限の警戒を」
「了解」

しかも奈落の底であった魔物のような強さを感じた、思わずここが奈落の底だと錯覚した。

しかし、2頭の龍は洞窟を見続けている、まるであそこの中に用があると言わんばかりだ。するといきなり黒龍が口を開き魔力を集め始めた、やがてその魔力は熱を帯び始めた。BTの中にいるのに暑いと思えるほどの熱量だ。あんな滝は一瞬で蒸発するだろう。

なぜかミレディ戦から使えるようになった結界魔法を貼っておくが1枚ではなく10数枚作ったが、正直にいうと耐えられるかはわからない、ただここで失敗すればあの中にいるやつは死ぬ。いきなりの実践での結界魔法は不安しかないが、パイロットはその辺にある物でも使いこなすなら俺も使いこなしてやる

その瞬間結界にブレスがぶつかり合った、まず接触した瞬間に2枚の結界がバリバリと音を立てて割れた、さらに時間が経つにつれ結界が1枚また1枚と割れていったがこちらも何もなしに諦めるわけにはいかない、結界の間結界を張り続けているが、向こうに火力が上がり続けているつまりどっちが先に力尽きるかの根比べだ、

結果として黒龍のブレスが先に切れた後にハジメ達が出てきた。

この状況に驚いているが、敵を前に動かないのは死を意味する。

「ハジメ！黒龍を相手取ってくれ！シアとユエも援護を！」

「ルピは？」

「白龍を相手取る！」

「了解！」

「ルピー！無茶したらダメだよ！」

「おう」

軽く一言返したが、あの目は疑っているしかも3人ともだに、確かにミレディ戦でかなり無茶したしなあ、心配させないようにしないと

ノーススターを最高速度で白龍にタックルし、白龍ごと離脱する。

『グルアアアアアア！』

「ちよつと黙ってる！」

ミサイルを発射し白龍にもダメージが入るがBTにもダメージが入った正直問題ない

「損傷は軽微、行動には何の問題もありません」

「了解、また修理するか」

「また今度も新しい機能をつけてください」

「余裕があればな」

そんな軽口を言い合っているが白龍は口元にミサイルが着弾したようでブレスは使えない、体制も悪く肉体攻撃もできず俺たちがひたすらに黒龍から離しているがおそらくそろそろ問題ない位置まできた、白龍の尻尾を掴みそのまま地面に叩きつける。

叩きつけられた地面には放射状のヒビが入っている、しかし白龍は何事もなく立ち上がる。耐久面では奈落の魔物以上か、考えれば考えるほどこの魔物の生態がわからん。こんな魔物がいたら伝承や本に書いてあるはずが、王宮の中にこの魔物のことは何も書いていなかった。新種か突然変異かもしれないが、ハジメ達の方にしか興味がないのか向こうに戻ろうとしている

白龍はその体に見合わない翼をはためかせながら空中へこようとするが、プラズマレールガンで撃墜する、さらにテザートラップを投げ白龍の飛行能力を完全に奪った、しかし白龍はいまだに洞窟を見続けている。上空からクラスターミサイルを叩き込む、子爆弾の爆発をもろに喰らっていたが流石にこれは効いたのかこつちを向いた。

「グルウウウウウ」

低い唸り声と共にこちらを睨みつけている、さらに白龍はテザートラップを引きちぎりながら上空へと飛んできた、その目は獲物を見つけた目であり、こちらをようやく敵と理解してくれたようだ

「とっと終わらすぞ」

「そうですね、コアは発動可能です」

「あいつを地上に落としたりコアで勝負を決めるぞ」

「了解しました」

俺はそう言い終わるとプラズマレールガンのチャージを開始するようにBTを操作するが、先程と同様には撃たせてはくれず、白龍はタックルをするためかBTに向かって突進をするがプラズマレールガンが直撃した。しかし急所には当たらず胴体に当たった、しかし少しよるめいた程度だった。

「グルアアアアアア！」

いきなり吠えたが口元に魔力が集まっている、しかし先程の黒龍とは違い冷気を感じた。だがこちらも黙ってブレスを受けるわけもないのでクラスタミサイルを白龍へ向けて撃つが、白龍はブレスのチャージが終わったのかブレスを吐いた、射線上にならないように移動しブレスを見ると違いがわかる。黒龍は広範囲に攻撃をするブレスならば白龍は一点集中のブレスだった。

まるでレーザーのようなブレスだった、クラスタミサイルは凍りつき地上へと落下していった。つまりあのブレスを喰らえばBTは戦闘不能にまで追い詰められるだろう、しかし向こうはブレスを吐いたがそこまで持続性はなくもうブレスを吐き終わっていた。その瞬間にチャージしたプラズマレールガンを撃った。

命中箇所は白龍の翼だった、大きく体制を崩しかろうじて飛べているという状態になったがすぐさま白龍まで接近させ踵落としを喰らわせる。地面に落ちていた。流星に頭を完全に捉えていたからか経つことすらできないらしい、

「BTコア発動！」

「フライトコアオンライン」

地上で這いつくばっている白龍に次々にミサイルが命中する、外れ

ているミサイルの中にはあるが、まあ爆風の範囲にもいるし無事ではないはずだ、、いやわからない。プラズマレールガンを耐える時点でおかしいが流石にあれだけのミサイルを喰らえば死ぬはずだ、そうに違いないうんきつと

『イタタ、』

ん？今あいつ喋ったか？そんなわけがないよな、俺が王宮で調べたが人語を解す魔物は見たこないし何よりなんで生きてんだよ！あれだけのミサイルを喰らったんだぞ確かに体に爆発の跡があるけど何事も無いようにいるんだよ！

はあ一応あれにコンタクトするか

「あーあ、聞こえますか？」

『ええ、聞こえますがあなたは？』

「うーん依頼でここを調査していた冒険者だ、質問を？」

『は、はい』

「まずなんで魔物が喋れてるんですか？」

『い、いえ私は魔物ではなく竜人族です。』

「竜人族って滅んだとされているあの竜人族？」

『ええ、その竜人族です。しかし私たちはあなた方に関わらないようにと離れた場所で一族で細々と生きていました、しかし強大な魔力を感知しその原因を探るためにこの山で龍化し休んでいました、ただ、、』

「ただ？」

『我々は一度眠りにつくと尻を蹴飛ばされない限り眠り続けてしまうのです、、それで気づけば操られています、それで魔物の軍団を作るのを手伝わさせられて、、あなた様に叩きのめされて意識が完全に浮上した感じです。』

ってなんですかその『ポンコツだ』と言わんばかりの目は！』

「だってポンコツじゃん」

『と、とりあえず私は人間形態になりますので、できれば降りてきてくれませんか？』

「わかった」

BTから降りて地上に足をつけたわけだが、目の前にいたのは白いドレスを着ていた美人だった。

「久しぶりの人間形態です、少し待っていただけ」と

「俺は良いが、あつちの黒龍はどうするんだ？」

「お姉様も操られていたのですか!？」

「気づいてなかったのか?とどこどころ意識があるようだったが」

「全く気づきませんでした」

「だめだこいつ完全ポンコツだ。なんというかこいつ完璧に見えてめっちゃ抜けてやがる」

「早く向かわなくては、あつ」

25歳ぐらいのしつかり者の姉のような感じなのだが、やっていることはポンコツだ。さつき人間になったばかりで慣れていないから待っていたのに、自分から走って何をしてんだが

「ほら、立てるか?」

「うう、はい」

「おぶっていくからほら乗れ」

「わかりました、」

「・・・」

BT無言でプラズマレールガンを向けるな、俺が消し炭になる。ミサイルも向けるな俺は味方からの攻撃で死にたくはないぞ

「後で武装を作ってください、それで手打ちです」

「嫉妬か？」

「黙秘権を使います」

「ハハハ、揶揄いすぎたか」

軽口を言いながらハジメの方に向かう

残念な奴の姉もまた残念な奴だった

とりあえず竜人族をおぶりながら走っていると遠くから

「ああー……♡」

と聞こえてきた。

「間違いありません、お姉様の声です!!」

「わかったから暴れるな」

この竜人族の姉が生きているとわかったからか背中中で暴れるもんだから走りづらくてたまったもんじゃない、そして後ろを走るBTから何故か銃器を構える音がした。やめてくれBTそんな大口徑な弾喰らえば俺は即死だ、死因が味方からの発砲なんかで人生を終わりにくはない

「BT頼むから、プラズマレールガンを俺に向けるのは勘弁してくれないか、俺が消し炭になる」

「パイロットに危険な人物が接近しているのでここで消してしまおうかと」

「え、私今消されかけていました?」

「そうだな、その後ろにいる奴によって」

「お願いしますう、命だけは助けて下さい」

「命が惜しいなら今すぐ自分の足で走って下さい、もう十分休憩しましたよね?」

やばいBTに人格ができたのは良かったが、ここまで嫉妬深ったとは、、なんか個性があることはいいことなんだがこれは

「まだ魔力が完全に回復していませんし、それに」

「それに?」

「なんだ彼の背中にいると安心するんですよ」

なぜ火にガソリンを放り込む発言をするんですかね、、やっぱりダメだこの竜人族。そういえばこの前ユエが竜人族はすごい人って言ってたな、すまんユエ今からお前の幻想を壊すかもしれん

「パイロットその厭らしい雌を地面に置いて下さい、この場で消し炭にします」

あ、やっぱり怒っているよね、もはや竜人族とかじゃなくて厭らしい雌とか言い始めたよ、」

「そうだBTお前のコックピットのなk 「ダメです」」

「お前の「ダメです」」

「おm 「ダメです」」

「ちなみに理由を聞いても」

「ここはパイロットの特等席なので」

「なるほどな」

なんか嬉しいな

「まもなくハジメさんたちの位置につきます、おそらくあの黒龍は討伐が済んでいると思いますが警戒を」

「了解した」

「わ、わかりました」

「ハジメ！だいじょb」

言いかけた言葉を思わず引っ込めるような酷い光景が目の前にあった、流石にこの惨状を見た背中の竜人族は「お、お姉様？」と聞いている。間違いのない俺がこいつの立場だったら俺も聞いている、だって

ケツからぶつとい金属の棒が生えていたから

「ハジメ、ユエ、シアこれはどういう状況なんだ？」

「えーと、実は」

ここから聞いた話をまとめると、俺と白龍が何処かに行った後こつちも戦闘になったしかし、黒龍は一切ハジメたちを無視しながら執拗にウイルだけを狙って攻撃をした、ハジメたちの攻撃が効き始めるとハジメたちにターゲットが移り、隙をついて黒龍の脳天にシアの戦鎚を叩き込んだ後、トドメを刺仕方がわからず、この前聞いた竜の話を思い出し

ケツにぶつとい金属の棒を生やしたという

「なんでケツに生やしたんだ？」

「銃が効かなくて確実に仕留めるために金属棒を生やした」

「ほんとほんと、まさかハジメの銃弾を全部弾く鱗でね私の力でもこ

の鱗割れなかったんだよ」

「なるほど」

「…、重力魔法は要練習」

「そこらへんは手伝ってやるから」

『あのーそろそろお尻のそれ抜いて欲しいんじゃないか？…そろそろ魔力が切れそうなのじゃ。この状態で元に戻ったら……大変なことになるのじゃ……妾のお尻が』

「そうです！お願いします！じゃないとお姉様の命が」

「とりあえず、これ抜くけどその後なんでここにいるのか話せよ」

『わかったのじゃ、わかったのじゃ早くお尻のやつを抜いてたもう』

「ハジメ」

「え？」

「ハジメ」

「シアまで」

「…、ハジメ」

「ユエも」

ユエとシアの2人を呼びヒソヒソと話し始める、少し嫌な気がするからな

「多分だけど多分開いたらいけない世界というやつを開いてる気がするのは俺だけか？」

「奇遇だね、私も」

「…、私もそう思う」

「多分だけど痛みに快感を覚えるタイプじゃないか？」

「うわー」

「多分だけどこの扉を開いたのってハジメだよな」

「うん」

「よしこの件でハジメから助けを求められても助けないことok？」

「OK」

「よしこの件に関する事は終わりにしようか」

「なにを話しているの」

「ハジメには関係のないことだよ、ねえユエ」

「ハジメには関係のないこと」

「そうそうハジメには関係のないこと、さっさとあのぶつとい金属棒抜いてこい」

「わかったよ、後一つ聞きたいことがあるんだけど」
「？」

「あれどうやって抜いたらいい？」

「力任せに抜いたらいいんじゃない」

「私もいいと思う」

「私も」

「わかった抜いてくる」

俺は心中で敬礼をした、今後めんどくさい奴に絡まれないようにハジメを生贄にしたのだ、友よ強く生きてくれ

そう言つて、ハジメが後ろに回つて杭を掴み、引き抜き始めた。

『はああん！ゆ、ゆっくり頼むのじゃ。まだ慣れておらつあふうん。やっ、激しいのじゃ！こんな、ああんっ！きちやうう、何かきちやうのじゃ』

うん完全に18禁の声を出しているな、、もはやもう一人の竜人族の目からハイライトが消えていた。ハジメは気づいているのか？まあ面倒なことに手を出したのは確実だな、、頑張つていきますか

みつちり刺さつているので、何度か捻りを加えたり、上下左右にぐりぐりしながら力を相当込めているのも、拍車をかけているのだろう。もう一人の竜人族も、見られないと言わんばかりに目を逸らす。

ハジメはと言えば、そのすべてを無視していた。

そして、ようやくズボツ！と杭を引き抜いた。

『あひいー！す、すごいのじゃ・・優しくつてお願いしたのに、容赦のかけらもなかったのじゃ・・こんなの初めて・・・』

そんな訳のわからないことを呟く黒竜は、直後、その体を黒色の魔力で繭のように包み完全に体を覆うと、その大きさをスルスルと小さくしていく。そして、ちょうど人が一人入るくらいの大きさになると、一気に魔力が霧散した。

黒き魔力が晴れたその場には、両足を揃えて崩れ落ち、片手で体を支えながら、もう片手でお尻を押さえて、うつとりと頬を染める黒髪金眼の美女がいた。腰まである長く艶やかなストレートの黒髪が薄らと紅く染まった頬に張り付き、ハアハアと荒い息を吐いて恍惚の表情を浮かべている。

見た目は20代前半くらいで、身長は170cm近くあるだろう。見事なプロポーションを誇っており、息をする度に、乱れて肩口まで垂れ下がった着物から覗く2つの双丘が激しく自己主張し、今にもこぼれ落ちそうになっている。

ただ不思議なことに、それを見てもちつとも興奮せず、むしろ汚物を見ているような気分になる。

「ハアハア、うむう、助かったのじゃ……まだお尻に違和感があるが……それより全身あちこち痛いじゃ……ハアハア……痛みというもの……」

「お姉様大丈夫ですか？」

「ミナよ、お主も大丈夫か？妾は甘美なものを知ったぞ」

「うう、清廉潔白で完璧なお姉様はもう死にました」

「なにを言っているのじゃ、妾はいつも通りじゃ」

「その言葉忘れないでください」

「わ、わかったのじゃ」

「感動の再会のところ悪いが、お前たちが操られている理由やその黒幕がしていることを話して貰っていいか？」

「わかったのじゃ、申し遅れたが妾はティオ・クラネル。竜人族最後のクラネル族の一人だ」

威厳のようなオーラを放っていたが、先程の痛みを快楽にするのを見てしまったらなんとも言えないな

「良かった、お姉様はまだ立派な竜人族の姫なんです。失礼しました。私はティオ・クラネルの妹のミナ・クラネルと申します。早速ですがここで何があったのかを話させていただきます」

—————少年達事情聴取

2人の話をまとめると数ヶ月前に膨大な魔力反応があったため、調査のために来ていたらしい。詳細は省かれたが竜人族の中には魔力感知に優れている者がいるらしく、その人が今回の異世界転移の魔力を感じ取ったらしい

竜人族は表舞台に顔を出さないという部族の制約があるが、流石にこの魔力反応は莫大なものだったらしく自分たちに危害が及ぶかもしれないで調査に乗り出したというところまでは良かったが次が問題だった

本来であれば1つ目と2つ目の山脈の間で人型になり街に行くのだが、しっかりと休息をと思いい龍の状態で眠ったが、龍人族は一度寝ると起きない。起きるためには尻を蹴飛ばすでもしないと起きない、そこに黒いフードを被った男が現れ闇魔法を利用し操られたと言っていた。

ちなみにだが竜人族は強靱なタフネスと屈強な精神を持っていたがこの2人が言うには

「恐ろしい男じゃった。闇系統の魔法に関しては天才と言っているレベルじゃろうな。そんな男に丸1日かけて間断なく魔法を行使されたのじゃ。いくら妾と言えど、流石に耐えられなかった・・・」

「ってことは2人は丸1日暗示をかけられていても起きずに眠り続けていたのか？気づいていて？」

「というか1人にしか魔法はかけられないんじゃないの？なら片方が起きたら、その首謀者を倒せば良かったじゃない？」

「とは言いますがあの男お姉様を人質にされてしまい『もし俺に危害を加えたらこいつを自害させる！』と言ってきたものですから下手に動けず、そのまま洗脳、」

なるほどこいつのポンコツぶりは姉からか、、、なんというか残念な姉妹だな

ちなみに、なぜ丸1日かけたと知っているのかというと、洗脳が完了した後意識自体はあるし記憶も残るところ、本人が「丸1日もかかるなんて・・・」と愚痴を零していたのからだそう。

その後、ローブの男に従い、2つ目の山脈以降で魔物の洗脳を手伝わされていたのだという。そして、ある日、1つ目の山脈に移動させていたブルタールの群れが、山に調査依頼で訪れていたウイル達と遭遇し、目撃者は消せという命令を受けていたため、これを追いかけたうち1匹がローブの男に報告に向かい、万一、自分が魔物を洗脳して数を集めていると知られるのは不味いと万全を期して2人を差し向けたらしい。

「それで俺たちにボコボコにされて目覚めたと」

「はい（うむ）」

「・・・ふざけるな」

だいたいこの事情説明が終わると、激情を必死に押し殺したような震える声が発せられた。その声の主は、ウイルだ。

「・・・操られていたから・・・ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんを、クルトさんを！殺したのは仕方ないとも言うつもりかっ！」

「・・・」

どうやら、状況的に余裕が出来たせいか冒険者達を殺されたことへの怒りが湧き上がったらしい。激昂して二人へ怒声を上げる。

対する二人は、一切の反論をしなかった。

ただ、静かな瞳でウイルの言葉の全てを受け止めるよう真つ直ぐ見つめている。その態度がまた気に食わないのか、

「大体、今の話だって、本当かどうかなんてわからないだろう！大方、死にたくなくて適当にでっち上げたに決まってる！」

「・・・今の話は本当です」

「ああ、竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない」

それでもウイルはなにかを言いつのろうとするが、その前にユエが止める。

「・・・きつと、嘘じゃない」

「っ、一体何の根拠があつてそんな事を・・・」

「・・・竜人族は高潔で清廉。それは、私は皆よりずっと昔を生きた。竜人族の伝説も、より身近なもの。2人は『己の誇りにかけて』と

言った。なら、きつと嘘じゃない。それに・・・嘘つきの目がどういうものか、私はよく知っている」

そう言つてユエは、どこか遠くを見た。おそらく、昔に聞いた竜人族の話を思い出しているのだろう。決して、先ほどの醜態を思い返して遠い目をしているわけではない、と思いたい。

そして、俺からもウィルに忠告する。

「それにウィル冒険者というのは常に死と隣り合わせだ。いつ死んでもおかしくないというのが冒険者だ。だからお前の仲間は冒険者としての死を迎えたに過ぎない、もしお前があいつらのことを思っているのなら忘れるな。そいつらはお前を逃した、だから忘れるな。忘れたらそいつらの死が無駄になる」

俺の言葉に、ウィルはもちろん、愛ちゃん先生たちも言葉を失い、呆然としていた。

「ふむ、この時代にも竜人族のあり方を知るものが未だいたとは・・・いや、昔と言つたかの？」

そこに、ティオの言葉で我に返る。どうやら、先ほどのユエの言葉に興味を抱いたらしい。

「・・・ん。私は、吸血鬼族の生き残り。300年前は、よく王族のあり方の見本に竜人族の話を聞かされた」

「何と、吸血鬼族の・・・しかも300年とは・・・なるほど死んだと聞いていたが、主がかつての吸血姫か。確か名は・・・」

どうやら、単純に引きこもっていたわけではないらしく、世界情勢にもある程度は精通していたようだ。おそらく、今までと同じように里からでてきた竜人族が正体を隠して調査していたのかもしれない。

そして、ティオやミナをもつてしても吸血姫の生存は驚いたようだ。周囲のウィルや愛子達も、驚愕の目でユエを見ている。

「ユエ・・・それが私の名前。大切な人に貰った大切な名前。そう呼んで欲しい」

そんなティオの言葉に、ユエは幸せオーラを振りまきながら答える。

突然の惚気に一同は複雑な表情になるが、ウィルの方はやはり冒険

者たちの無念を晴らすまでにはいかなかったようだ。

「・・・それでも、殺した事に変わりないじゃないですか・・・どうしようもなかったってわかってはいますけど、それでもっ！ゲイルさんは、この仕事が終わったらプロポーズするんだって」

そいつは綺麗なフラグを立てたな、危険な山に入る前にそんなベタなフラグを立てていくなんて、、やっぱり戦いの前にへんなことは言うべきじゃないな、これは教訓として肝に銘じよう

「ウイルさん、これはそのゲイルさんって人の持ち物ですか？」

そう言つて、ハジメは調査中に見つけたロケットペンダントをウイルに差し出す。すると、ウイルはそれを受け取ると、マジマジと見つめ嬉しそうに相好を崩す。

「これ、僕のロケットじゃないですか！失くしたと思ってたのに、拾ってくれてたんですね。ありがとうございます！」

「あれ？ウイルさんの？」

「はい、ママの写真が入っているので間違いありません！」

「ま、ままっ..」

なんか、予想と違った返答が返ってきた。

写真の女性の写真は20代前半といったところだ。母親と言うにはいくらなんでも若すぎる。

そのことを聞くと、「せっかくのママの写真なのですから若い頃の一番写りのいいものがないじゃないですか」と、まるで自然の摂理を説くが如く素で答えられた。

なんだ自然湧きしたマザコンか、余談ではあるがゲイルという人の本名はゲイル・ホモルカだ。名前は人を表すと言ったが、なんともだちなみに結婚相手は男だそうだ

大事なペンダントが手元に戻ってきたからか、少し冷静になったがこの2人を殺すべきだと主張してきた。

主な理由としてはもう一度操られたら危険だかららしい、はあこれは私怨も入っているな

「ウイルさん、あなたの言うことは理解できますがそれは出来ません」「な、なぜですか？」

「正直な話をするとですね、この人たちは今私たちの監視下に置かれていてその黒幕は今はこちらに接近できません。」

さらにこの2人を洗脳するには2日日間を要するので今からこの2人を操るのは不可能なんです」

「でも今もまだ操られていたら、、、」

「逆に聞きますが敵の情報をベラベラと喋る敵がどこにいるんですか、ましてや洗脳中ですよそんなことはあり得ません」

「しかし」

言葉を遮る形で俺が割り込む

「もうやめろ、シアの言う通りだ。仇を取りたいのは分かるが少し待って、今は安全を確保するのが優先だ」

「操られていたとはいえ、妾たちが罪なき人々の尊き命を摘み取ってしまったのは事実。償えというなら、大人しく裁きを受けよう。だが、それには今しばらく猶予をくれまいか。せめて、あの危険な男を止めるまで」

「あの男は、魔物の大群を作ろうとしています。竜人族は大陸の運命に干渉せぬと掟を立てましたが、今回は私たちにも責任があります。放置はできません・・・勝手は重々承知しているので、どうかこの場は見逃してくれんか」

2人の言葉を聞き、その場の全員が魔物の大群という言葉に驚愕をあらわにする。詳しく話を聞くと、黒ローブの男が、魔物を洗脳して大群を作り出し町を襲う気であると語った。その数は、既に3000から4000に届く程の数だという。何でも、2つ目の山脈の向こう側から、魔物の群れの主にのみ洗脳を施すことで、効率よく群れを配下に置いているのだとか。

とりあえず、その黒ローブの男の正体について確認を入れておこう。あの可能性がある。

「テイオさん、ミナさんその黒ローブの男ってのは、黒髪黒目の少年ですか？あるいは、勇者のことを知っている素振りはありませんか？」

「南雲くん何を言ってるのですか？そんな訳ないじゃないですか」

「確認ですので、もし方が一についての考えです」

「いや、お主の言う通りじゃ。たしかに黒髪黒目の少年で、『これで自分は勇者より上だ』などと口にしておった」

「ずいぶんと勇者を妬んでいる様子でした」

「先生覚悟を決めてください、、、」

「、、、」

先生は俯いたまま何も答ええない、おそらく違うと信じているがおそらくは清水だろう、、、この世界に黒髪、黒目は日本人しかない、ほとんどの人が目の色や髪色は日本人とは異なっていたから、、、だから今回の黒幕は清水だと考えて動いて考えたほうがいいだろう、、、

「おお、これはまた・・・」

すると、突然ハジメが遠くを見る目をして呟いた。オルニスを飛ばして魔物の群れを探していたようだ。

「ハジメ、数はどんなもんだ?」

「3000とか4000とかではないのは確かだね。それこそ桁を1つか2つ追加しないといけないレベル」

「マジかよ」

「ルピこれって大丈夫?」

「まあ、不味い」

「不味いとかじゃなくて街に向かっている、おそらく救援は期待しないほうがいい!?!」

「∴ハジメどうかした?」

「タ、タイ」

「ハジメなんて言ったの?」

「タイタンがいる、、、1機」

「は?」

聞きたくない情報が耳に飛び込んできた

戦闘準備

「タイタンだ?!」

「多分、本物だと思う」

くっぞ、このままその軍団を放置したら王都まで落とされかねん、、とりあえずは街に戻るのが先決か

「お前ら街まで最大速度で降りるぞー！急げー！」

「ルピ」

「なんだ？」

「オルニスが撃墜された、、」

「相手は銃火器持ちか、、なぜこの世界に銃器があるのかさておき、急いで迎撃体制を整えるぞ」

「なんで？」

「正直な話すると、タイタンに銃火器を装備している、、まずこれでタイタン以外が射線状にいるだけでミンチか蒸発だ、、さらに今回の相手のロードアウトが判明していない、つまり逃げたところで追いつかれるさらに相手は万を超える魔物を支配下に置いている、、ここで食い止めなければ、俺たちにも被害が出る。幸いまだ時間はある、徹底的に迎え打つぞ」

「、、わかった」

「先生方時間がありません、早く車に」

「すまぬ、妾達にも責任がある、、から戦いに連れてっていつてくれぬか？おそろくじやが妾達の体力、魔力も完璧になるじやろう」

「わかった、早く山を降りるぞ」

「あのーすいませんが我々はまだ完全に回復していないので、合流地点を教えてくださいますか？」

「俺がこいつら連れていくから、ハジメ達は他を。BT行くぞ」
「了解しました」

ハッチを開けコックピットに乗り込み駄姉妹を掴み街に向けフライトを始めた

※※※ルピside↓ハジメside

今は山を全力で降りている、まさか敵側にタイタンがいるなんて、オルニスの視覚共有で見たあの一つ目と目が合ったとき、勝てないと感じてしまった、離れているのに絶対に勝てないと思ってしまった。奈落の底に落ちたばかりのような絶望感が胸で渦巻いている。わかっている戦う前から弱腰になることなんか、とりあえずは急ごう

「先生大丈夫ですか？」

「はああ、私たちは大丈夫です。早く車へ」

10分ほど走り車が出せるところまで辿り着いた、宝物庫から車を出してみんなを乗せて魔力を流し込む最大出力によりものすごいスピードで山を降り始めた。このままのスピードなら5分ほどで街に着く、急がないと

「すいません運転中に、タイタンというのは？」

「、、タイタンというのは、ルピが持っているあの機体のことを指します。しかしルピからは『BTも1つの機体にすぎない、まだ他の機体も多く発見されている』と言っていました、つまり今回の相手のタイタンは完全に出所がわからないタイタンです、そしてタイタンには生身で挑んではいけません」

「南雲それってどういうことだよ!？」

「そのままの意味だよ、生身の人間が挑んでも死ぬだけ、それこそユエとぼくとシアが命懸けで1機壊せるかどうかぐらい、もしみんなが挑んでも多分すぐに死ぬ」

「そんな言い草ないでしょー!」

「、、今の話は本当、実際に私は1度タイタンに魔法を撃つてみたけど傷1つつかなかった。最上級魔法が当たれば話は変わるけど、上級魔法を連発して傷1つつかなかった」

「その通り、私の全力のフルスリングでさえ止められてしまったからね、」

「だから不可能、生身の人間が挑むのはけど？」

「目には目を歯には歯をタイタンにはタイタンをです。それしか対策法がないんですが、」

「、今回はルピにかかっている、だから貴方達以外の人今すぐ避難させないといけない」

「ウイルさんもです」

「わかりました、僕にできることならなんでも協力します」

「ウイルさんには街の人の避難誘導を、先生達は僕たちの後ろにいてください」

「南雲なんで俺たちがいるんだ？」

「多分相手のタイタンに乗っているのは清水だと思う、、そして色々考えた結果相手がなせここを襲ってきたかを考えると、先生を殺しにきていると思う」

「「「は？（はい？）」「」」

「先生の天職は1人いるだけで食料事情が改善するだけの力を持っています、、相手からすれば勇者以上に鬱陶しい存在でしょう、いくら強い兵士や指揮官がいても兵站がなければ負けます、、でも1人で兵站を改善できるとなれば話は変わります、だから今回の侵攻が起こっていると思います。もう少しで街です、先生は説明をお願いしますウイルさんも同行してください」

「南雲君たちは？」

「迎撃体制を整えます」

「わかりました生徒を戦いに行かせるのは、、すみません」

「先生がそんなに気負わなくてください、清水は連れてくるように頑張ります」

「よろしくお願ひします」

「つきました、みなさん降りてください！」

※※※ハジメside↓シアside

私たちが街に降りた後各々やるべきことを始めめていく、町役場の方では先生とウィルさんは事情を説明し始めましたが、難色を示しながらも村長や街の重鎮の方はすぐに動き始めました、でもここで予想外のことが起こった、街を守るといふ人が出始めた、今からここに大量の魔物が攻めてくることがわかっていいるのかな、百単位ならわかるけど万単位なのに、こんな戦いに挑むのは無駄だから逃げる生きてさえいれば何かあるから

ちなみにハジメとユエは外周でバイクに乗りながら錬成で土の壁を作っている、けど私には何もできないから遠くで様子を見ることしかできない、ルピは街外れに着地している。流石に街の近くにあんな鉄の塊が降ってきたら敵と勘違いするからね、だから今は街の中心部分でルピを待っている

街に残り徹底抗戦をしようとしていた人たちはウィルさんと先生の説得により避難して行った、残っているのは私たちと先生たちだけ、聖教会の騎士たちは自分達も残ると言っていた。流石に私たちに身を預けるのではなく自分たちの方が安全だとか言っていたけどこれに関して言えば仕方がないと思う、流石に宿屋の一件があるから仕方がない

先生も危険になつたら逃げますと言っていたけど、意地でも残つてやると言わんばかりの目をしていた。生徒思いのいい先生だとは思うけど、いくらなんでも生徒を信用しすぎじゃ、と思う節が所々に見受けられた。この世界に転移してきた唯一の大人で先生という重荷があの人にかかっていると思う

「シアいるか――」

遠くからルピが呼んでいる、行かないや

――少女移動
中――

「来たよ」

ルピと龍人族との話していた、少し妬ましいけど今は状況が状況だから見逃すけど

「シアいきなりで悪いが、今から銃の訓練を受けてもらう」
「え？」

今から訓練？魔物が来るまでそこまで時間がないのに!？」

「待て待てそこまで難しくないから、それに今回は遠距離でかなりの数を撃滅するだろ、それだとシアはその攻撃に参加できないから今から短時間でもいいから練習してもらおう」

「でもそんなにすぐに扱えるの？それに銃も」

「今回使えるのはセミオート銃、それに元々銃は作っていた」
「!？」

「いつか渡して遠距離にも対応できるようにしようと思っていたが、まさかこんなに早く来るとはな。それに今回は数がかなり多い今は銃の扱い方を学んで、そのあとの殲滅戦の時に慣らせばいい」
「かなりぶっ飛んでいるね」

「ははは、丁度的が欲しかったんだよ」

「で、銃はどこに？」

「ああこいつだ」

そういうと宝物庫から銃を引き出してきた、その銃は今までルピの持っている銃はそこそこの長さを持つ銃だった。

マガジンはなく、狙撃銃のようなものだった

「こいつはm1ガーランドを元に作った『オペレッサー』だ。クリップで装填する、セミオートマチックライフル、装填数は10だ」

「わかった、でどうすれば扱えるの？」

「ああ、それはだな、……、……」

—————少年指導中少女受講中—————

「なるほどわかった、あとは自分で練習する」

「あと、これを渡しておく」

渡されたのはルピのような服だった、これってパールック？

「まあそれを渡したのはそのうん、あの服は心配だから、あとこれにクリップあるから」

そう言つて渡されたのは肩がけ式のもので帯弾するためのバッグ

が渡された、中には大量のクリップが大量にあった

「まあ今から練習して弾が減ったら壁の上に置いておくから、さつきクリップに銃弾を止め方も教えたからいけるよな？」

「うん大丈夫、ありがとう」

渡されたのは結構物騒な物が多かったけど、私のことを思ってくれていると思うと／＼／

さつきと服を着て練習しないと

シアside↓ルpside

シアに渡すもの渡したけど、もつといいものをあげたかった、、なんだらうその武器ではなくもつと普通の物を渡したかった、、今度何か渡そ

さてここは街から少し離れたところにいる周りに人はいないな、昔から形を変え続け現代の日本やアメリカでも空にいる鉄の鳥の最終調整をしよう、、

戦闘開始

ハジメ side

ある程度の土壁を作り終え、武器の手入れや点検を行っているところとシアと姉妹が合流した

「・・・シアその服と銃は？」

「ルピがくれたの、私のために作ってくれたって言うていたから嬉しかった♪」

「・・・いいな」

「ハジメに作って貰えばいいんじゃない？」

「・・・ハジメ欲しい」

「また今度作るね」

「ありがとう」

そんなシアの格好は肌の露出は少なく、スカートからズボンに変わっている。さらにエルボーパッドや膝あてなどもつけている、ルピの心配性が出ているそんな装備だね。

「あ、ティオとミナこれを」

「なんじゃ、ご主・・・ハジメ殿よ」

「姉様？今ご主人と言いかけてませんでしたか？」

「少し噛んだだけじゃ、気にするでない」

「そしてハジメ殿こちらは？」

僕が渡したのは、神水が取れなくなった神結晶を加工して魔力タンクとして使えるもの、基本的には腕輪やネックレスなんかに加工作している。今回2人に渡したのは、腕輪タイプのもの

「これは、プロポーズとして受け取ってもいいのの？」

「ユエ、ステイ！ステイ！」

「シア邪魔しないで、この糞墮龍はここで潰さない」と

「すいません、姉様が粗相を」

「プロポーズではないよ、それに入ってある魔力と自分たちが持っている魔力で魔法を撃って欲しい」

「なるほど了解したのじゃ」

「あ、あと言い忘れていたけど、最低限動けるだけの魔力は残しておいてね」

「なぜですか？ハジメ殿」

「敵にタイタンがいるっていう話はしたよね、タイタンは僕たちが全力で戦っても負ける確率の方が高いと思う、、でもタイタンにはタイタンをぶつけければ勝てる」

「しかしなぜそれが魔力を残すことにつながるのでしょうか？」

「…あの巨体と巨体から放たれる弾丸は最上級クラスの魔法に匹敵する、、そんなものを喰らえば生き残りできるかもわからない、仮に生き残れたとしても今後の活動にまで響く怪我になる」

「ルピが撃った弾が私たちの方に飛んでくるかもしれない、だから最低限動けるだけの魔力と体力は残しておくのが最善の行動、、私たちはタイタンとタイタンの先頭において邪魔者、、」

「わかったのじゃ」

「了解しました」

よしこつちの準備は終わったけど、先生たちの方はどうなっているんだろう？

「南雲くん」

後ろから先生に呼ばれ後ろ振り返って見てみると、先生と親衛隊が集まっていた。土壁から降りて先生たちの方に駆け寄る

「先生どうかしましたか？」

「その、大丈夫かと思いましたが、、」

「そこは大丈夫ですよ」

「南雲くん、なぜこんな無茶な仕事を受けてくれたのですか？」

「…先生からかなり辛い言葉言うことになりましたがいいですか？」

「…はい」

「まず僕たちがこの殲滅戦を受け入れたのは、自分たちのためです。先生たちのことは全く考えていません」

そう、僕たちがこの殲滅戦を引き受けた理由はあくまで自分たちが、この先旅をする上でこれを放置すると面倒くさいことになると感じたから、ただこれだけ。ただそのついでで街が救えるだけ

「それにさつき車で話しましたが敵対するタイタンもいるんです、これは僕たちの方でもまずいと感じたから僕たちは受けました。もしですが、魔物だけだったらウィルさんのことを無理矢理にでも車に詰めて依頼の達成報告に行っていました、何かあれば話は変わりますが」

「・・・」

「タイタンはおそらく僕たちでも勝てません。街の人を逃したのは、死んでほしくないからです」

「え？」

先生が鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

「僕たちは旅をしています、旅の途中で何回死にかけたかわかりません、奈落の底で出会った魔物、最奥ガーディアン、2つ目の大迷宮のガーディアン、数え始めたらキリがありませんそれに、」

「それに？」

「ルピは一度僕たちの目の前で死にかけました」

「ッ！」

「正確には言えませんが、腕はひしゃげて足も潰れていたと思います、そこから何やかんやあって生きていますが、だから目の前で死んでほしくないんです、敵ならいざ知らず、ルピたちや関係のない人たちが死ぬのを見るのは嫌なんです、」

「南雲くん、あなたは優しいですね」

「え？」

僕が優しい？かなり冷酷になった気がしていたけど、

「他者を思いやる気持ちなど優しい気持ちは絶対に忘れないでください」

先生は土壁の上で話している、4人を見て少し微笑んだ気がした

「先生たちはできるだけ上を注意しておいてください」

気持ち切り替え先生たちに忠告する、タイタンは別に持ち上げるのが不可能ではない、飛行型の魔物を3匹程度で釣り上げたらおそらく空中から降下できる。だから今回はそれに気をつける

「わかりました、南雲くんどうか無事で」

「先生方も」

そう言い残し離れようとした時、街の後方からエンジン音が聞こえてきた

ハジメside↓ルピside

「よし」

俺の目の前にはレシプロ機が鎮座している。もちろん作ったものだ。

ただ突貫工事で尚且つ精密機械なんか作れるわけもないからエンジンの信用なんかあつたもんじゃねえ

しかし今回はいかに早くタイタンを排除するかがカギだから仕方ないか

「BT、フライト準備は？」

「完璧です。パイロットあなたに完璧な空の旅をお届けしましょう」

「気合が入ってるななにかあつたのか？」

「あの糞駄竜よりもきれいな空をお見せします」

あーこれ完全に嫉妬してる

「そうだな、とりあえず離陸するか今回は2人のフライトだ。後ろは頼んだぜ相棒」

「了解しました。」

「Yak-9U離陸を開始する。飛べるよなこれ」

そんな不安はどこに2000Mほどの滑走路（錬成整地のおかげ）から飛び立った

その勢いで高度500Mほどにまで上昇したが異常はない

しかし西の空を見ると太陽が沈み東の空から月が顔を出している。どうやら初飛行兼初戦闘は夜間になりそうだな、技能で暗いところ見えるようになってるからよかつたけど、もしなかったらやばかつたな

『あーあ、聞こえるか』

旋回しながら試しに下にいるシア達に念話における会話ができるかを試してみる

『聞こえてるよールピそれ何？』

『、、ルピそれって戦闘機？』

『：ハジメ戦闘機って？』

『僕たちの世界にある空で戦う乗り物、、それって大丈夫？』

『大丈夫って？』

『こういうのは工場とかで作られるものなんだけど、個人で作るとなるとかなり信頼性が落ちるんだよ』

『ルーピーまた危ないも乗ってるの？』

やばいこのままだと説教を食らう、言い訳せねば

『大丈夫だ、最低限のテストはしてる』

『それでも説教だからね』

『勘弁してくれ』

『あれがご主人さまの世界の乗り物』

『姉さま今なんと？』

『とりあえず俺は空中にいるやつを落とす、そのあと対地支援を行う。下は頼んだぞ』

『『『『了解！』』』』

そのまま進んでいくといた、ターゲットがな

『BT仕事の時間だ』

『了解、幸運を』

『そっちこそ』

思っていたより飛んでいる奴は少ない、せいぜい30ほどか？とりあえず飛んでる奴は地面に落ちてもらうとしよう

照準を合わせトリガーを引く、放たれた弾は魔物の体を貫通している後ろにいたやつにも命中した。後ろにいたやつはかろうじて飛んでいるが、前にいたやつは重力に従い落ちていった

『まずは一匹』

後ろを見ると、魔物が付けてきているしかし

『パイロットの完璧な空の旅は邪魔させません』

レールガンで脳天に風穴があいていた

『ありがとう』

「このまま落としていきましよう」
「ああ」

※※※ルピside↓シアside

はあ、またルピは無茶をして、、今は土壁の前で空を見ている。その直後に空の一部が光った、始まった

「始まった、、」

「シア、ルピは大丈夫だよ」

「…あの人外は簡単には死なない」

「ほんとですよあの人おかしいと思いいダツ！」

「おぬしは何をしておるのじゃ、何も無いところで転ぶなど」

「申し訳ありません姉さま」

少し不安が和らいだ気がする

「見えてきたよ、魔物たちが」

「でも空中に魔物がない」

「…つまり全部落とした？」

「まさか」

「いや、本当のようじゃな」

こっちに向かってくる、空飛ぶ2つの物体が

『全部落とした、対地支援を行うが一回だけだ残弾がもうない。攻撃座標を頼む』

『わかったルピ今からそこに魔法の光球を出してもらおう。ユエ頼める？』

『了解』

『光球を目視、対地攻撃初め！』

そこから目にしたのは、一方的な攻撃でした上から銃弾の嵐が歩いていた魔物たちが10秒もしないうちにミンチになっていた

『俺は着陸した後、BTに乗って参加するそれまでは頼む』

『ゆっくりでいいからね』

『ありがとシア』

さて目の前に意識を向けると、大量の魔物が

さあ戦いの時間の開始だ！